

北陸自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書

宮ノ平遺跡ほか9遺跡

1987

新潟県教育委員会

北陸自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書

宮ノ平遺跡ほか9遺跡

新潟県教育委員会

序

昭和47年以来、県教育委員会は、北陸自動車道の建設に伴い、日本道路公団と埋蔵文化財の発掘調査については協議を進めながら実施してきた。北陸自動車道は昭和58年に上越インターチェンジまでが開通し、昭和63年度には上越インターチェンジから富山県朝日インターチェンジ間が開通する予定になっている。この一大事業の全線開通により、新潟県を含めた北陸地方は一段とあらゆる面において飛躍・発展するものと思われる。

本書は、新潟県が日本道路公団から委託を受けて実施した、上越市谷浜地内から能生町鬼舞間に存在した10遺跡の発掘調査記録である。本地域は、新潟県の西端部に位置し、国指定史跡である長者ヶ原遺跡（糸魚川市）、国指定建造物である白山神社本殿（能生町）など原始時代から中世に至るまでの歴史資料が数多く存在する地域でもある。

今回実施した10遺跡の発掘調査により、新潟県の西端部における縄文時代の一端が明確になり、本地域の縄文時代前期の様相は北陸地方南西部の様相に類似していることが判明した。また、平安時代以降の人々の生活や文化の一端が明らかになった。本県においては、縄文時代前期の遺跡は数少なく、不明瞭なところが多く、今後追求される課題は多いものと思われる。本調査の成果が、縄文時代のみならず古代・中世の考古学的研究に一つの新知見を加え得るとすれば意義深く、本書が広く活用されることを願うものである。

なお、本調査に際し、多大なる御協力・御援助を賜った上越市・名立町・能生町ならびに地元の方々、また、計画から発掘調査に至るまで格別の配慮を賜った日本道路公団に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第である。

昭和62年3月

新潟県教育委員会

教育長 有磯邦男

例　　言

1. 本書は北陸自動車道の建設に伴い、上越市谷浜地内から能生町鬼舞地内までに存在した10遺跡の発掘調査報告書である。調査は新潟県が昭和59年度に日本道路公団から受託して実施したものである。
2. 遺跡の発掘調査は新潟県教育委員会が主体となり、昭和59年6月26日から昭和59年11月8日まで実施したものである。なお、遺物等の整理は昭和60年度に実施した。
3. 発掘調査に伴う出土遺物の注記は遺跡名の頭文字をとって略記号化した。宮ノ平遺跡→「MY」、上八平遺跡→「UB」、松原B遺跡→「MTB」、梨子平遺跡→「NS」、川原田遺跡→「KW」、東カナクソ谷遺跡→「HK」、カナクソ谷遺跡→「KN」、東川原遺跡→「HG」、鬼舞II遺跡→「KB」。
4. 出土遺物は一括して県教育委員会が保管・管理している。
5. 本書で示す方位はすべて真北である。作成した図面のうち既製の地図を使用したものについては、それぞれの図に出典を記した。その他は日本道路公団提供の地形図である。
6. 遺物には遺跡ごとに一連番号を付し、挿図の遺物番号と図版の遺物番号は同じである。
7. 磨製石斧の表面は、複数の平坦面（磨面）によって構成されており、複数の面境を一点破線で表記した。また、磨り面内の擦痕の方向は→で表わした。（局部磨製石斧を除く）
8. 磨石、叩き石、砥石、石皿等の実測図の磨り面、叩き面の範囲はスクリーントーンで示した。
9. 遺物整理は戸根与八郎を中心に田海義正・鈴木俊成が行なった。
10. 本報告の地理的環境は柳恒雄、縄文土器は田海義正、石器は鈴木俊成、その他は戸根与八郎が執筆した。
11. 石質の鑑定については、新潟県教育センター地学研究室（現県立江南高校）坂井陽一氏の御教授を賜った。
12. この他に下記の諸氏から御教示を賜った。（敬称略）
木島　勉、小林達雄、佐藤雅一、品田高志、前山精明

目 次

I 序 説	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 観測確認調査の概要	2
II 遺跡の環境	3
1. 周辺の地理的環境	3
2. 周辺の遺跡	5
III 調査の経過	7
1. 調査の経過	7
2. 調査の方法	8
IV 遺跡各説	9
1. 宮ノ平遺跡	9
2. 上八平遺跡	12
3. 松原B遺跡	17
4. 後谷遺跡	24
5. 梨子平遺跡	25
6. 川原田遺跡	34
7. 東カナクソ谷遺跡	49
8. カナクソ谷遺跡	60
9. 東川原遺跡	63
10. 鬼舞II遺跡	70
V 総 括	74

図版目次

宮ノ平遺跡

図版1 遺跡遠景(南から),
完掘状況(南西から)

図版2 旧道路(北西から),炭焼
窯,地すべりの亀裂跡

上八平遺跡

図版3 完掘状況(C区南西から),
完掘状況(B区北東から)

図版4 完掘状況(A区西から),
炭焼窯

松原B遺跡

図版5 遺跡遠景(北から),
完掘状況(南から)

図版6 突状遺構,溝,
後谷遺跡遠景

図版7 出土遺物
(縄文土器・須恵器ほか)

梨子平遺跡

図版8 遺跡遠景(南西から),
完掘状況(北から)

図版9 土壌,完掘状況,D1,D2,
D3:土器出土状況

図版10 出土遺物(縄文土器)

図版11 出土遺物(石器1)

図版12 出土遺物(石器2)

図版13 出土遺物(石器3)

川原田遺跡

図版14 遺跡遠景(北から),完掘状況
(北西から), D7:遺物出土状況

図版15 D7:遺物出土状況

図版16 D7:完掘状況,D3~D6,D7,
石皿出土状況

図版17 出土遺物(縄文土器1)

図版18 出土遺物(縄文土器2)

図版19 出土遺物(石器1)

図版20 出土遺物(石器2)

図版21 出土遺物(石器3)

図版22 出土遺物(石器4)

図版23 出土遺物(石器5)

図版24 出土遺物(石器6)

図版25 出土遺物(石器7)

東カナクソ谷遺跡

図版26 西側斜面遠景(東から),
東側平坦面遠景(東から)

図版27 東側平坦面近景(南から),
遺構(土壌)

図版28 遺構および土器出土状況

図版29 出土遺物(縄文土器)

図版30 出土遺物(石器1)

図版31 出土遺物(石器2)

図版32 出土遺物(石器3)

図版33 出土遺物(石器4)

図版34 出土遺物
(土師器・須恵器)

図版35 出土遺物
(土師器・須恵器ほか)

カナクソ谷遺跡

図版36 遺跡近景(南から),
完掘状況(南東から)

図版37 遺跡遠景(北から),
完掘状況,炭焼窯1

東川原遺跡

図版38	遺跡遠景(東から), 遺構(北西から)	図版39	遺構(土壙・横列状遺構)
図版40	出土遺物 (土師器・須恵器ほか)	図版41	出土遺物 (中世・近世陶磁器)

鬼舞遺跡II

図版42	遺跡遠景(南西から), 完掘状況(南西から), 遺構	図版43	出土遺物(上段……カナク ソ谷遺跡, 下段……鬼舞II遺跡)
------	-------------------------------	------	-----------------------------------

挿 図 目 次

第1図	西頭城地方の接峰図面	……4	第2図	周辺の遺跡分布図	………6
宮ノ平遺跡					
第3図	調査対象範囲	………9	第4図	土層柱状図	………10
第5図	沢土層断面図	………10	第6図	遺構実測図(炭焼窯)	……10
第7図	出土遺物(近代磁器)	……10	第8図	位置図(宮ノ平遺跡)	……11
上八平遺跡					
第9図	土層柱状図(1)	………12	第10図	位置図(上八平・松原B)	…13
第11図	調査対象範囲	………14	第12図	遺構集中地域	………14
第13図	土層柱状図(2)	………15	第14図	遺構配置図	………16
第15図	出土遺物(石器)	………17			
松原B遺跡					
第16図	調査対象範囲	………18	第17図	遺構集中地域	………18
第18図	遺構実測図(鉢状遺構)	…20	第19図	遺構実測図(溝)	………21
第20図	遺構実測図(土壙)	………21	第21図	出土遺物 (縄文土器・石器・須恵器ほか)	23
後谷遺跡					
第22図	調査対象地	………24			
梨子平遺跡					
第23図	土層柱状図	………25	第24図	調査対象範囲	………26
第25図	遺構集中地域	………26	第26図	遺構実測図(土壙)	………27
第27図	出土遺物(縄文土器)	………29	第28図	出土遺物(石器)	………31
川原田遺跡					
第29図	調査対象範囲	………35	第30図	遺構集中地域	………35
第31図	遺構実測図(土壙)	………37	第32図	出土遺物(縄文土器1)	……40
第33図	出土遺物(縄文土器2)	………42	第34図	出土遺物(石器1)	………44

第35図	出土遺物(石器2)	46	第36図	出土遺物(土偶)	47
第37図	出土遺物(石器3)	48			
東カナクソ谷遺跡					
第38図	土層柱状図	49	第39図	遺構全測図	50
第40図	遺構実測図(土壙はか)	50	第41図	遺構実測図(炭焼窯)	51
第42図	出土遺物(縄文土器)	53	第43図	出土遺物(石器)	55
第44図	出土遺物(土師器)	57	第45図	出土遺物 (須恵器・製塙土器)	58
第46図	出土遺物(羽口)	59			
カナクソ谷遺跡					
第47図	調査対象範囲	60	第48図	遺構実測図(炭焼窯1)	61
第49図	遺構実測図(炭焼窯2)	61	第50図	出土遺物 (縄文土器・石器)	62
東川原遺跡					
第51図	調査対象範囲	63	第52図	土層断面図	64
第53図	遺構実測図(土壙・棚)	64	第54図	遺構実測図(土壙)	66
第55図	出土遺物 (須恵器・青磁等)	67	第56図	出土遺物 (珠洲焼・近世陶磁器等)	69
鬼舞II遺跡					
第57図	調査対象範囲	71	第58図	窪地土層断面図	71
第59図	遺構実測図(土壙)	72	第60図	出土遺物 (縄文土器・石器)	73

表 目 次

第1表	上越～能生間発掘および範囲確認一覧	2
第2表	発掘工程表	8
第3表	土壤計測値一覧	38
第4表	土壤計測値一覧	51

I 序 説

1. 調査に至る経緯

北陸自動車道は西蒲原郡黒崎町から長岡市を経て、日本海に沿って富山・石川・福井の各県を通過し、滋賀県坂田郡米原町で名神高速道路に接続する延長476kmの道路である。この自動車道は日本海沿岸地域の交通の円滑化と関係地域の開発を図ろうというもので、すでに黒崎ICから長岡J.C.Tを経て上越ICまでと富山県の朝日ICから米原J.C.T間は供用されている。上越ICから朝日IC間は北陸自動車道最後の未開通区間で、路線は海岸沿いを通っているものの、平地は名立川・能生川・姫川などの小河川の谷沿いにしかなく、ほとんど山間部を通り、トンネルが多い区間でもある。昭和44年1月に上越一糸魚川間の基本計画が策定され、昭和47年8月には施行命令が出されている。

昭和49年3月新潟県教育委員会（以下県教委とする）に日本道路公团（以下公團とする）より、上越市から糸魚川市までの遺跡分布調査の依頼があった。県教委は公團の指定した範囲に限って遺跡分布調査を実施し、上越市10遺跡、名立町3遺跡、能生町26遺跡、糸魚川市25遺跡、合計64遺跡を確認した。さらに青海町についても遺跡分布調査を実施し、5遺跡を確認した。県教委は昭和49年11月28日付け教文第1124号で上越市から青海町までの遺跡についてランクをして公團へ回答した。その後、法線発表が行われ、県教委は数回にわたって上越市から能生町間について分布調査を実施し、松原B遺跡、茶屋ヶ原遺跡の2ヶ所が法線内に所在していた。昭和58年4月に最終的分布調査を県教委が実施したところ、新たに3遺跡（東川原・上八平・宮ノ平）が確認され、地形から遺跡の可能性があり確認調査が必要な3地点（鬼舞II・カナクソ谷・後谷）が追加された。昭和58年5月11日付け教文第345号で新遺跡3と確認調査が必要な箇所が3地点あること及びその範囲について県教委は公團に通知した。この結果、既存遺跡2遺跡、新遺跡3遺跡及び要確認調査地域3地点で、延面積は65,950m²であった。面積は広いものの、遺跡の実態は不明な所が多く、県教委および公團もその取り扱いに苦慮し、あび重なる協議を行なった。その結果、確認されている遺跡および確認の必要な地点に対し、試掘調査を実施して面積・内容を明確にすることになった。試掘は昭和57年に松原B遺跡、58年に茶屋ヶ原遺跡を実施したにすぎず、他の遺跡については県教委の調査スケジュールが詰まっていたために全く実施していなかった。

昭和59年上越ICから名立ICまでは62年度供用予定と決定し、遺跡の対応について公團と県教委は59年2月再度協議をした。公團は宮ノ平・松原Bの発掘調査、上八平・カナクソ谷・後谷・鬼舞IIの確認調査を県教委に希望したが、県教委は東川原および鬼舞については無理であると答えた。同年3月、公團は宮ノ平、松原B、上八平については分割でもよいから59年に一部でもよいか引渡してほしいと申し込みがあった。いずれにせよ60年には全て事業着工前

に引渡してもらわなければ供用予定期がずれ込むという事であった。県教委は、調査予定がたてこんでいるため8月からしか着工できず、宮ノ平・松原Bは発掘調査、上八平・カナクソ谷・後谷・東川原・鬼舞については時間のゆるす限り試掘調査を実施するということで公團と協議をした。しかし、両者の調整はうまくゆかず、6月上旬になって、県教委は調査予定を再度考慮し、8月以前に他の遺跡の調査が終了した時点でただちに調査に入るという約束で公團と最終的協議が成立した。調査は59年7月と8月着手の2本立てで計画した。

遺跡名	所在地	時代	面積(m ²)	遺跡名	所在地	時代	面積(m ²)
宮ノ平	上越市高住字宮ノ平	平安?	3,600	川原田	上越市茶屋ヶ原字川原田	縄文?	7,000
上八平	上越市有馬川字上八平	縄文	17,500	カナクソ谷	上越市下宇山字カナクソ谷	縄文?	20,000
*松原B	上越市丹原字中ノ坪	縄文・平安	7,200	東川原	名立町名立小泊字下孤原	平安	4,500
後谷	上越市鍋ヶ浦字後谷	縄文	1,400	鬼舞II	能生町鬼舞字五目田	縄文?	750
梨子平	上越市茶屋ヶ原字梨子平	縄文	4,000				

表1 上越～能生間発掘および範囲確認調査一覧(※印 試掘済)

2. 範囲確認調査の概要

a 松原B遺跡(調査期間 昭和57年8月16日～8月19日)

法線内面積11,000m²に対し、人力および重機によって398m²を掘り下げる。耕作土が約25cmあり、すぐ地山と考えられる褐色土となる地域と耕作土と褐色土の間に明褐色ないしは灰色シルトがある地域がある。全体的に見ると遺物包含層と思われる土層はほとんどない。遺物は北端部で縄文土器、市道鍋ヶ浦1号線の北側の集落寄りの畠地から須恵器(長頸瓶)や土師器、磨石、フレークが単発的に出土し、その量も少ない。地山直上に炭化物を含む所もあることや須恵器の長頸瓶が一括出土しているので遺構も残存している可能性が多分にある。市道鍋ヶ浦1号線の南側は旧表土もなく階段状に土地利用されているため調査対象外とする。調査必要面積は7,200m²である。

b 茶屋ヶ原遺跡(調査期間 昭和58年8月22日～8月27日)

本遺跡は三ノ橋・梨子平・川原田・滝ノ布袋遺跡の総称で、法線内に入るものは梨子平・川原田遺跡の2遺跡である。昭和39年栗畑造成の際、大規模に土地の改変を行なっている。任意の地点にトレッチを入れ、重機で掘り下げた。梨子平、川原田遺跡とも削平を受け、遺物包含層は全くない。石皿・磨石・縄文土器が表土から出土しており単発的ながらまんべんなく検出される。カナクソ谷についても電気室予定期内に限って言えば、丘陵の頂部から縄文土器が若干出土しているが、沢を狄んだ丘陵地は地名から製鉄遺跡の可能性が多分にある。調査必要面積は梨子平遺跡4,000m²、川原田遺跡7,000m²、カナクソ谷遺跡20,000m²である。

II 遺跡の環境

1. 周辺の地理的環境

本遺跡群は、新潟県南西部、上越市・西頸城郡名立町・能生町にかけての海岸部に位置する。ここは、糸魚川・静岡地質構造線を西縁とするフォッサ・マグナの中にあり、新第三系からなる西頸城山地が日本海に臨む地域である。

西頸城山地は、長野県境に近い焼山火山（2,400.3m）や山地最高峰の火打山（2,462.0m）から北へ高度を減じ、海岸まで約8kmの、高度400mを下ったあたりで、小起伏山地もしくは丘陵性の山地となる。一体は新第三紀堆積岩からなり、この小起伏山地では泥岩起源の地すべりが多発している。しかし、能生川から早川にかけては、新第三紀の石英閃緑玢岩の貫入岩および安山岩質溶岩が分布しており、鉢ヶ岳（1,316.3m）や海岸近くまでせまる中起伏山地は地質をよく反映しているといえよう。青田羅波山（949.3m）とその南の龍町南波山（909.1m）を結んだ主稜部も同様のことがいえる。この安山岩質溶岩や能生小泊付近の安山岩質溶岩は、黒色で、多くの場合自破碎状を示しており、本遺跡の石器材料の可能性がある。山地の前面には、小規模な海岸段丘が局部的に分布するが、海岸平野は発達せず、山地は直接日本海に没する。

地すべり地形は、最上部に馬蹄形の滑落崖と、その直下に凹地をもち、階段状の緩斜面で特徴づけられるが、これは、山地から北流する河川の中～下流域に分布する。とくに、桑取川・名立川・能生川の流域に多いが、徳合川・筒石川・湯澄川・びびら川・山王川・木ノ浦川など能生町のはとんどの小河川の流域にもみられる。能生町に限ってみれば、地すべり地形の上限は高度50m以下にはみられず、上流にいくほど高くなり、能生川の鉢ヶ岳麓・河口で480mにも達する。そして、高度280m以下では、現河床との比高は60～140mに集中している。

段丘地形については、桑取川・名立川・能生川の、地すべり地形より低い河道近くに沖積世の河岸段丘が小規模ながら発達しているほか、桑取川河口と本地域最北端の島ヶ首岬の間、および能生川河口部で、数段の洪積世の海岸段丘が局地的に分布する。桑取川河口～島ヶ首岬間の段丘面は、高田平野の段丘面に対比して高度が著しく高い。開析の進んだ高位段丘群の高度は約170～220m、平坦面を残し比較的発達のよい中位段丘群の高度は約80～120mにもなる。能生川河口部では、左岸に上位の比較的発達のよい面をはじめ3段の段丘面があり、高度はそれぞれ約110m・60m・50mとなる。対岸にも最下位の面に対比される小規模な段丘面がみられる。

これらの地すべりの階段状緩斜面や段丘面は、本地域においては貴重な平坦面であり、ほとんど耕地として利用されている。また、縄文時代および古代・中世の遺跡も、この地すべりの緩斜面と段丘面上に立地している。これらの様相は本地域の地形の反映、あるいは調約ともいえる。つまり、遺跡の集中する島ヶ首岬の直下の急崖が高度数十mにもおよぶことをはじめ、

山地が直接日本海に没し、海岸平野は発達していない。また、谷が深く、能生川などの谷底平野も著しくせまい。これらから、縄文時代以降の海水準変動を考慮しても、それぞれの時代における地形的環境にはほとんど変化がみられなかつたといえる。前面の海と背後の山地から自然の恩恵を手近かに受けてきたにちがいない。

しかし、一方で宝曆元年(1751)の「名立崩れ」をはじめ、近年では、昭和2年(1927)の「大洞地すべり」、同22年(1947)の「樋口地すべり」、同38年(1963)の「小泊地すべり」、同46年(1971)の「島道地すべり」などがあげられるように、山崖れや地すべりは古くから2次的、3次的に発生し、多くの災害をもたらしてきた。そして、これらは、格好の生活の場であった段丘面とのかかわりの中で、これを被覆したり、開拓したりしてきたと考えられ、このような箇所が隨所でみられる。

また、気象条件としては、海岸部であるため浜の風を直接受ける、とくに冬の季節風は強い。積雪量は県全体としては多くないところであるが、少し山地や谷に入ると極端に増える。そして、融雪期と集中豪雨期の3~4月、7~9月に、地すべりの発生回数がピークになる。



第1図 西頭城地方の接峰面図

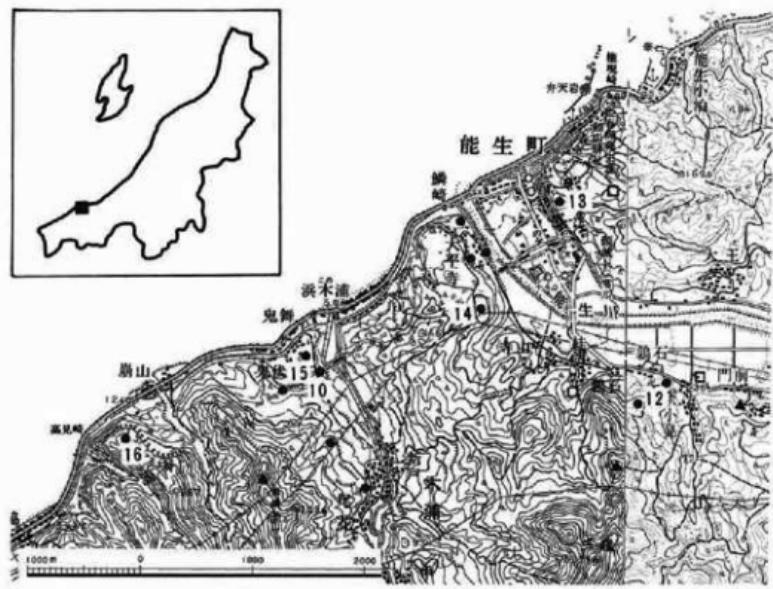
1:新第三紀安山岩質岩・同質火砕岩、2:石英閃綠玢岩、いずれも分布を略化する。団内の囲みは第2図の範囲。

2. 周辺の遺跡（第2図）

第2図は今回の調査の対象となった遺跡の周辺に所在する縄文時代および古代・中世の遺跡分布図である。本地域については古くから糸魚川市在住の青木重孝、能生町在住の伊藤信太郎、柿崎町在住の室岡博などの先駆によって詳細な遺跡分布調査が行われている。しかし、発掘調査が行われた遺跡は数少なく、名立町の瓜原遺跡¹¹が昭和37年に、能生町の井の上遺跡¹²が昭和60年に町史編纂事業に伴って行われたにすぎない。また、遺物については上越市の丹原・茶屋ヶ原・鍋ヶ浦・高住などの諸遺跡から縄文土器や石器が発見されると紹介されている。遺跡の現状は畠・水田になっていたものが多いが、過疎化が進んでいるため、畠は荒廃化し雜木林や植林地になっている所が多い。このため、遺跡の現状把握もかなり困難で遺跡の性格等については不明なものが多いと言わざるを得ない。

当地域の縄文時代の遺跡は中期・後期のものが主であり、縄文時代中期の遺跡からはヒスイの玉製品の他に原石や未製品が出土する傾向が強く、本地域の特色ともなっている。遺跡の立地について見ると段丘上にあるものと山麓部に発達する崖錐に類似した傾斜度の少ない平坦部に立地しているものがある。段丘上に立地しているものは標高40m前後の中位段丘上に立地するものと標高80~100m前後の高位段丘上に立地するものがある。前者には井の上遺跡、後者には松原B遺跡¹³、梨子平遺跡¹⁴、川原田遺跡¹⁵、布引遺跡¹⁶、鬼舞遺跡¹⁷、イワゴ平遺跡¹⁸がある。これら段丘面に立地している遺跡は規模も大きく、遺物量も多い。井の上遺跡は中期から晩期にわたる遺跡で平安期の遺物も出土している。昭和60年の発掘調査では早期後半の尖底土器が出土し、本地域では注目される遺物である。鬼舞遺跡ではヒスイの玉や未製品、原石が出土している。崖錐に類似した傾斜度の少ない平坦部に立地している遺跡としては瓜原遺跡、十二平遺跡¹⁹などがある。瓜原遺跡では縄文時代後期前半の三十稻場式土器や後期後半の三仏生式土器が出土し、ヒスイの玉も出土している。この種の遺跡は鳥ヶ首岬の東側ではあまり見られないのに対して名立川の右岸および能生川の左岸に著しく多く分布している。遺跡の規模は小さいが、遺物量の多いものと少ないものがあり、遺物量からも遺跡の性格が細分される可能性が多分にあるものと思われる。いずれにせよ鳥ヶ首岬を境にして遺跡のあり方が異なっている。東側は段丘の背後が比較的急峻な山地地形であり、西側は地すべりの多発地域で、遺跡の立地にも地形的制約がかなりあったものと考えられる。

古代・中世になると山城を除いて能生川や名立川流域の沖積段丘に遺跡が立地しているが、遺跡総数は縄文期のものに比して極めて少ない。能生川流域では内の間遺跡、角地田遺跡、名立川流域では東川原遺跡²⁰があり、古代の北陸道の鶴石駅、名立駅と有機的関係をもった遺跡とも考えられる。今後、この能生川と名立川流域の沖積段丘上に立地する該期の遺跡分布や具体的な内容の検討を行うことによって、鶴石・名立両駅の存在が一層明確になるであろう。



1. 宮ノ平 6. 川原田
 2. 上八平 7. 東カナクソ谷
 3. 松原B 8. カナクソ谷
 4. 後谷 9. 東川原
 5. 梨子平 10. 鬼舞II



第2図 周辺の遺跡分布図(●縄文、□古代、▲山城) 国土地理院地形図
糸魚川・高田西部 (1/50000)

III 調査の経過

1. 調査の経過

調査の対象となった遺跡は当初 9 遺跡であったが、この内試掘調査が終了し、遺跡の調査対象面積がある程度明確になっていたものは上越市の松原 B 遺跡、梨子平遺跡、川原田遺跡の 3 遺跡だけであった。他の 6 遺跡については実態が明らかではなく、試掘調査を実施して遺跡か否か検討を要するものであった。調査の詳細については各遺跡ごとの経過を参照して頂きたい。

調査は他の遺跡の発掘調査が予定より 1 ヶ月早く終了したために 6 月 28 日から着手し、11 月 8 日に完了した。調査の順序については公団の要望に沿って行ったが、着手の時点ではすべての対象地がサラ地になってはいなかった。東カナクソ谷遺跡の南側丘陵部については用地買収が進展しておらず、7 月まで雑木林の状況であった。調査予定計画と考えあわせると 8 月に着手しなければ予定がくずれるため早急に伐採するよう早い段階で公団に申し入れておいた。

上八平遺跡の試掘調査の段階で地山面にブルトーザーのキャタピラの痕やリッパーの爪痕などが明瞭に残り、かなり地形変更が行われていることが判明した。地形変更の有無について聞き込みを行なった結果、今回の調査対象地のうち地形変更が大規模に計画的に行われているのは宮ノ平遺跡、上八平遺跡、梨子平遺跡、川原田遺跡を含む一帯であることが判明した。この事業は昭和 38 年から 44 年にかけて県が自立経営農家の育成を目的とした西部パイロット事業で、総工費は 56,296 万円である。今まで原野であった 200 ha が水田 82 ha、畠 111 ha に造成され、一戸当たりの平均耕地面積が 80 a から 220 a に拡大し、主に水稻・烟草・果樹（栗、柿）などが植えつけられたものである。谷浜地区の土地改良区で工事着工前の現状地形図と公団作成の現在の地形図を比較したところ、等高線の走り方、および標高等が異なり、小さい沢は埋立てられ、丘陵は大規模に切られて地形の改変がかなり行われていることが裏付けられた。また、松原 B 遺跡も個人で地形の改変を行なったという聞き込みを得た。当初、今年度中に発掘が完了するのは面積的にも不可能で、試掘調査が主体で次年度に発掘の一部が残るものと考えていた。しかし、土地の改変を受けている地域が判明し、遺跡自体も相当荒れている可能性が多分にあり、調査日程もかなり楽になり、初期の目標は達成されるものと思われた。

8 月にバックホーを移動中、川原田遺跡とカナクソ谷遺跡の間にある低丘陵の縁辺で土師器や石錘が発見された。一部試掘調査を実施したところ、パイロット事業地域内にも入っておらず、地山面まで全くいじられていない良好な状況で残存していることが判明した。この遺跡の取扱いについて県教委と道路公団は協議をした。遺跡の名称は東カナクソ谷遺跡とし、公団は調査予定期間内で予算もかわらなければ今回新たに発見された遺跡について調査を実施してもよいという回答を得た。県教委は調査予定およびパイロット事業で地形が改変され、遺跡自体も荒れているという見通しで、時間的にも短縮されることから、東カナクソ谷遺跡も今回の調

査工程に入れることにし、合計10遺跡を対象とした。

調査は表2の工程で実施し、最終的には公団の要望通り全ての遺跡の発掘調査が終了した。なお、表2の(1)内は最終的発掘調査面積で、10遺跡で62,568m²である。調査の詳細については各遺跡の章を参照して頂きたい。報告書作成に伴う遺物整理や図版・挿図等の作成は昭和60年度に実施した。

6月	7月	8月	9月	10月	11月
宮ノ平(3,600m ²)	松原(B)(7,200m ²)	梨子平(4,000m ²)			
上八平(17,500m ²)		川原田(7,000m ²)		東川原(1,200m ²)	
		カナクソ谷(17,000m ²)	東カナクソ谷(1,600m ²)		
	後谷(468m ²)			鬼舞Ⅱ(3,000m ²)	

表2 発掘工程表

2. 調査の方法

試掘調査が終了しているものと未了の二者があることは前述した通りである。試掘調査を実施したものでも遺構の分布状況や遺物の出土状況、土層などが不明確であったために、試掘調査を実施したものに対しても、地形にあわせて任意の位置に試掘溝を入れ、遺物や遺構、それに土層を把握することを基本とした。遺構・遺物が出土した場合は、その遺存状況に応じて周辺部を擴張してゆくこととした。また、試掘調査が未了のものについては、道路法線のセンター杭および幅杭を基本にして試掘トレンチを設定し、土層状況に応じて適宜バックホーを使用し、人力で精査を行なうこととした。また、表土の厚さが極めてうすい所に対しては、職員がバックホーについて、遺構・遺物の確認を地山面で行なった。用地内の土砂の処理については、バックホーおよびトラックを積極的に使用した。表土の処理については事前にバックホーを使用して行なった。遺構等が検出された場合は、その時点でグリッドを設定することにした。

出土遺物はすべて現場で水洗い、注記が終了するようにした。

IV 遺跡各説

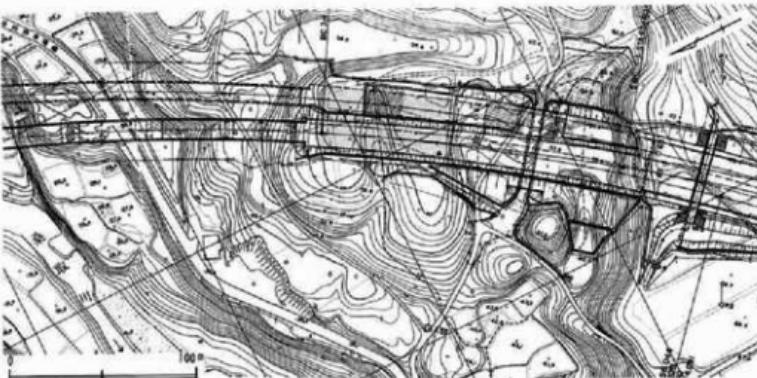
1. 宮ノ平遺跡

1. 遺跡の立地 (第3図、図版1)

本遺跡は昭和58年の遺跡分布調査の際、土師器片が採集され、平安時代の遺跡ではないかと推定されていた。遺跡は桑取川の左岸、標高60mの海岸段丘上に立地し、桑取川との比高は約53mを測る。遺跡の立地について詳細に見るとほぼ中央部に西側に開口する浅い沢があり、東から南を経て西側は大きな間折谷、北側は急傾斜となって桑取川になっている(第8図)。現状は中央部にある西側に開口する浅い沢は埋立てられ、北側から南側へ緩く傾斜した平坦面になっている。

2. 調査の経過

センター杭および幅杭に沿って幅2mのトレンチを3本設定し、遺構・遺物の検出に努めた。溝状遺構・土壤など性格不明の遺溝が調査対象地の北側と南側に於いて検出されたので、重機で周辺の表土を除去し、遺構の全体把握に努めた。遺物包含層というものは存在せず、遺物としては近代陶磁器片(伊万里焼染付)が5片出土したのみである。性格不明の遺構について断面および全体的形態などを検討した結果、北側および南側で検出された不定形の溝状遺構は断面などから人為的なものとは言えず、自然の亀裂と考えられた。また、東側にある直線的溝は、基盤層である青褐色粘土層を切っており、第5図の最下部に箱形となっている所に接続する。溝の底面には溝方向と直角になるように幅10~15cm、深さ10cm内外の小溝が掘られ(図版4)、中には雄木の丸太が埋設されているものもあった。これは昭和38年以前の土地更正図によると下から登ってくる道路で、古い時代の遺構ではないことが判明した。



第3図 調査対象範囲 (▲炭焼窯)

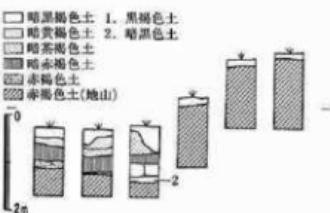
調査は6月26日に着手し、調査対象の遺構・遺物が殆どないため7月7日に終了した。

3. 土層（第4図・第5図）

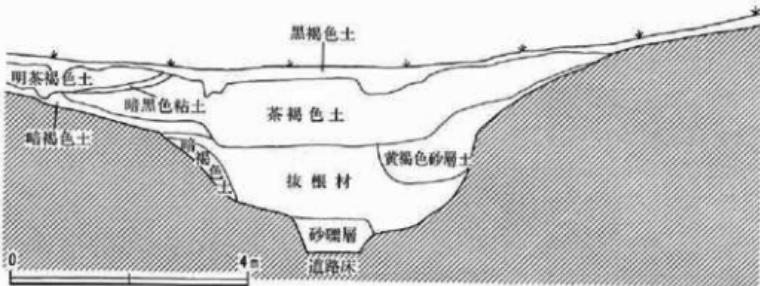
現地表面から地山面までは4層に細分され、第3層の暗茶褐色土から近世陶磁器が出土している。第1層・第2層は昭和38年の農地改良工事の盛土である。第5図では道路床から上部は全て盛土である。

4. 遺構・遺物（第6図・第7図、図版4・図版7）

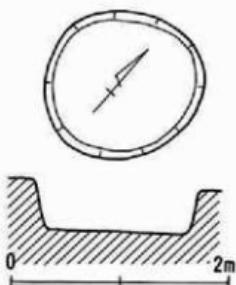
炭焼窯が1基検出された。長径1.5m、短径1.3m、深さ47cmを測る。壁面・底面は赤く焼け、底面には粉炭・木炭片が堆積している。第7図1・2は近代の伊万里焼（有田焼）茶碗である。いずれも外面には呉須で絵文様が描かれているが、発色は悪く薄水色をしている。



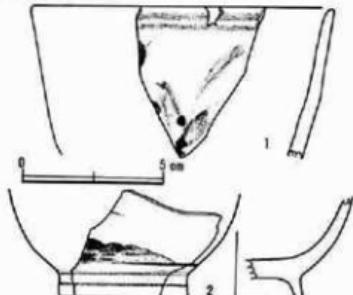
第4図 土層柱状図



第5図 沢土層断面図



第6図 遺構実測図（炭焼窯）



第7図 出土遺物（近世磁器）



第8図 位置図(官ノ平遺跡)

2. 上八平遺跡

1. 遺跡の立地 (第10図、図版3・図版4)

本遺跡は昭和58年の遺跡分布調査の際、縄文土器片が数片採集されていた。遺跡は海岸段丘の段丘崖から直線距離で約700m入った標高80~85mの段丘面上の最奥部に立地している。東側は丘陵となって徐々に高度を増し、西側は緩く傾斜して平坦面となっている。北側および南側には大きな開拓谷となり、A・BとC区の間には深さ15~20mの沢が入っている。本遺跡の北西200mには縄文時代後期の山田遺跡が存在している。また、大きな開拓谷をはさんで南西約600mの地点には松原B遺跡がある。

2. 調査の経過

遺物がわずかしか採集されず、再度調査に入った時点でも遺物分布調査をした。しかし一点の遺物すら発見されなかった。調査対象面積も広く、谷によって切られているので便宜的に地区を北からA・B・Cの3区に分けた。試掘のトレンチは幅5mでセンター杭および両幅杭に沿って3本設定した。また、A区では南東から北西に向かってのびる丘陵尾根上および丘陵の南斜面に前述のトレンチと直交するように2本設定した。重機で表土を除去したが、表土はセンター杭から西側では非常に浅く、10~15cmで地山の赤褐色土に達する。一方、A区の東側では丘陵尾根は浅く削平されているが、北東部および南西部は徐々に厚く土盛されている(第13図、図版4一下)。A・B・Cの3区のうち、A区のセンター杭より西側、B区の丘陵尾根部から北側緩斜面、C区の平坦面ではブルトローザーのキャタピラ痕やリッパーの爪痕が地山の赤褐色土上面に見られ、大規模に地形の改変が行われた事を如実に示している。このため、遺物包含層・遺構は全くなく、調査の対象地外とした。調査の対象はA区で土盛され、旧表土が残っている東端部に限定された。盛土を重機で除去し、旧表土の暗褐色土を人力で除去した結果、

縄文土器の細片が4点、近代の

炭焼窯や土壤が10基検出され

た。この内8基が風倒木痕であ

る。遺構・遺物はA地区でも南

東から北西に向かってのびる丘陵

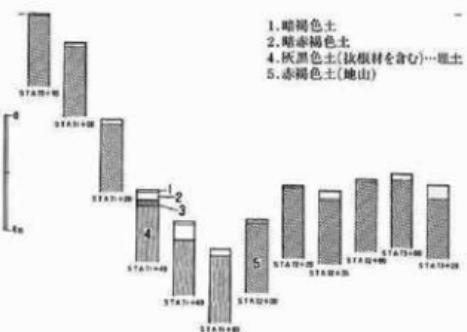
尾根の平坦面から南斜面にかけ

て旧表土が存在している地域に

限定された(第12図)。

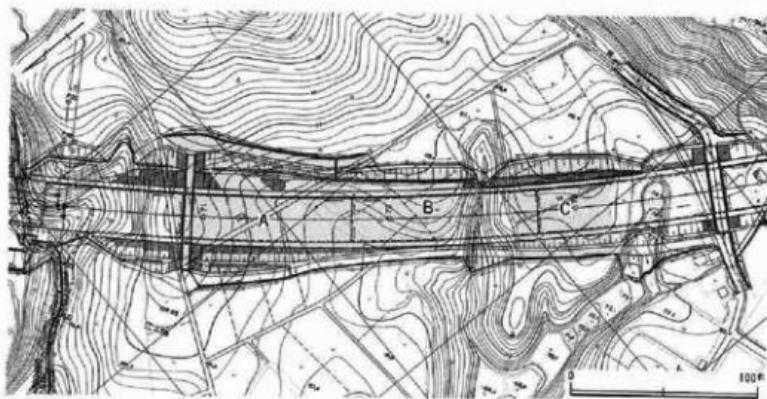
調査は7月10日に着手し7月

26日に終了した。

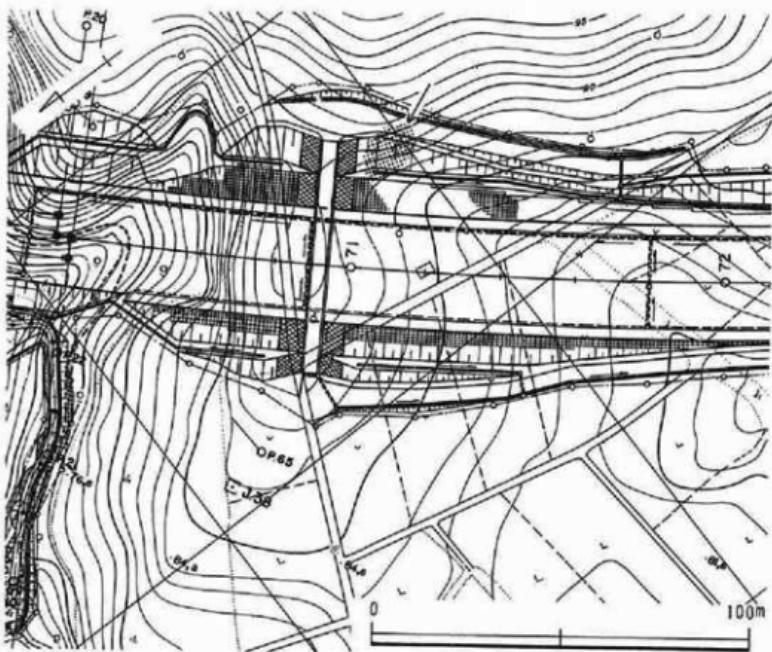




第10図 位置図（上八平・松原B遺跡）



第11図 調査対象範囲図



第12図 造構集中地域

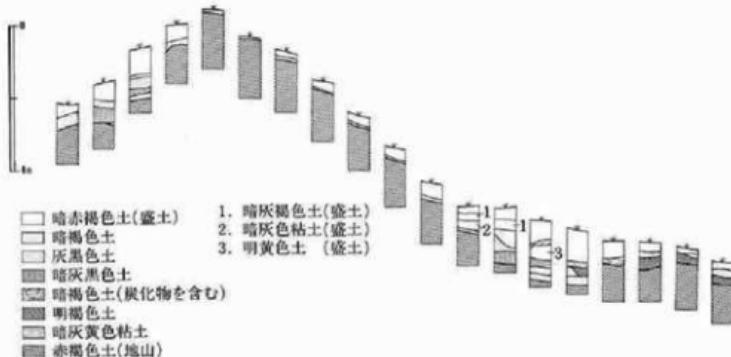
3. 土層（第9図・第13図）

第9図はセンター杭に沿った土層柱状図である。STA 71+40からSTA 71+80までは沢地で上層から暗褐色土、暗赤褐色土、暗灰黒色土となり、STA 71+40には暗赤褐色土と暗灰黒色土の間に暗灰色粘土が間層として存在している。暗灰黒色土は、昭和38年から44年にかけて県が実施した西部パイロット事業で埋立てた土で、中には樹木および板根材がまた完全に腐敗せず残っている。他の地点については表土の暗褐色土のすぐ下に地山の赤褐色土がある。表土の暗褐色土は本来の表土とは言えず、前述した如し、地表面を削平し、リッパーで人工的に造り出した表土である。第13図はA地区の東側の土層柱状図である。最高地点で旧表土の暗褐色土が薄く残存しているが、北および南側へ行くに従って徐々に厚く埋積し、南側部では旧表土は存在していない。地表面直上の旧表土（暗褐色土）より上面の土層は全て盛土で、北側は南側に比して厚く土盛されている。遺構・遺物はこの旧表土の残存している地域、東側の幅約25m程度の範囲に限られる。遺物は縄文土器の細片が4片旧表土内から出土したが、旧表土が遺物包含層というわけでもない。

4. 遺構（第14図、図版4）

検出された遺構は土塙10基と近代の炭焼窯1基で、いずれもA地区の南東から北西に向かってのびる丘陵の尾根の平坦面から南側斜面にかけて検出された。確認面は地山の赤褐色土上面である。10基の土塙のうち8基は楕円形によるもので、残り2基については明確な時期決定はできないがD₂からは小形磨製石斧が出土しており、縄文時代のものと思われる。

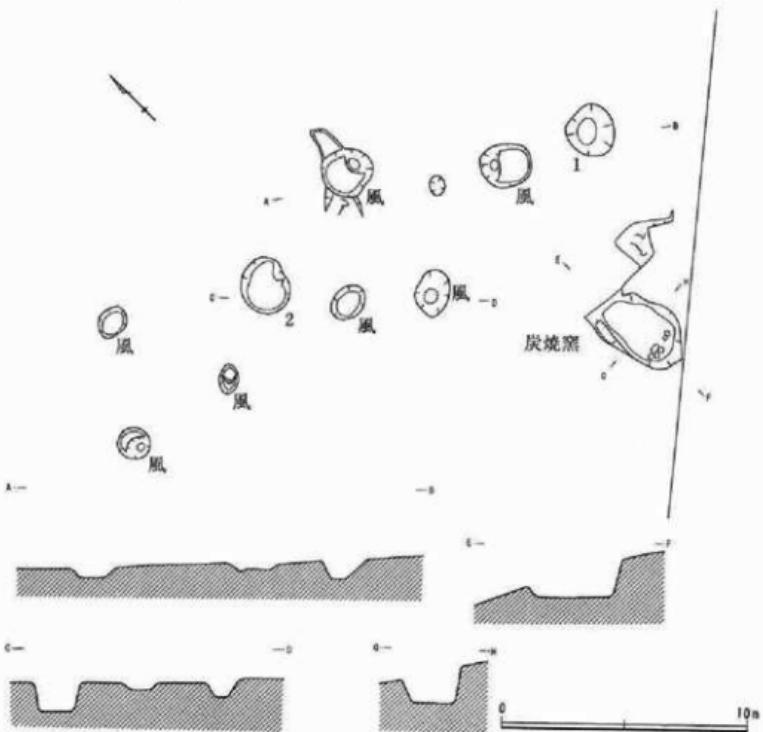
土塙 いずれも平面形態は楕円形で、長径2.2m、短径1.85mを測る。深さは確認面からD₁が0.8m、D₂が1.2mで、D₂の壁面がほぼ垂直に掘られているに対しD₁は傾斜角度も弱く、



第13図 土層柱状図(2)

底面積も狭い。2基の内部充満土は上面から暗褐色土、茶褐色土、黒褐色土でレンズ状に埋積している。 D_2 の黒褐色土中より小型磨製石斧が1点出土したのみで、土器等は出土していない。他の土壤はいずれも風倒木によるもので、底面の起伏が激しく深さも浅い。

炭焼窯 黒炭を製造する近現代の炭焼窯である。南北に主軸をもち、主軸方向は斜面に併行している。窯体の平面形態は焚口部の一部が削平されて欠失しているが、碗弾形に近い。焚口から奥壁まで3.64m、窯体部最大幅2.4m、焚口部幅1.26mを測る。天井部は崩壊しており、側壁の高さは東側で1.46m、西側で1mを測る。奥壁のカーブに沿って、床面から長径20cm前後、短径15cm前後の川原石が1段もしくは2段に積込まれている。側壁部に川原石が存在しない所から奥壁部のみに石積をしたものであろう。排煙口および煙道口は検出されていない。窯壁・床面とも赤く焼け、表面から5cm位までは硬い。窯体内部の充満土は灰褐色土で、床面に



第14図 造構配置図（風…風倒木）

近づくにつれて焼土や本炭片が多くなり、床面には粉炭が3~4cmの厚さで堆積している。床面下には排水溝等の諸設備はない。前庭部には窓体内から引き出した焼土や木炭片が薄く堆積している。時代を決定するような遺物は全く出土していないが、形態的には近代のものであろう。

5. 遺物（第15図）

D₂から出土した小形磨製石斧がある。現長5.5cmを測り、側面は後世の打痕がある。表面には斜行する研磨痕がある。他に細片の縄文土器があるが、時期は不詳である。

3. 松原B遺跡

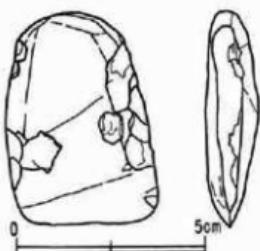
1. 遺跡の立地（第10図、図版3）

本遺跡は昭和55年に県教委が刊行した“新潟県遺跡地図”にも掲載されている周知の遺跡である。“新潟県遺跡地図”によると縄文時代の石斧と古代の須恵器が採集され、その範囲は100×50cmとされている。遺跡は海岸線に沿って発達した海岸段丘崖から南へ約400m入った標高80mの平坦な段丘面上に立地している。遺跡の立地について詳細に見ると北側および南側は深い開析谷となり、特に北側から東側にかけては北高差約30mを測る。西側については段丘崖に向かって徐々に高度を下げる緩傾斜面となってくる。当遺跡は当初第16図の77.80km付近を一つの境界と考えていたが、昭和57年8月の範囲確認調査の際、北側先端部の畠地でも縄文土器が採集されたので、この地点についても調査の対象地とした。本遺跡の主体部は調査対象地周辺の遺物道路法線の西側に近接して広がる畠地・竹林および住宅地で、縄文時代中期後半の土器や石器類が出土している。

本遺跡の北東約600mの地点には上八平遺跡が、南側の深い開析谷をはさんで200mの地点には古代の土師器・須恵器、縄文土器等を出土する松原A遺跡が存在している。

2. 調査の経過

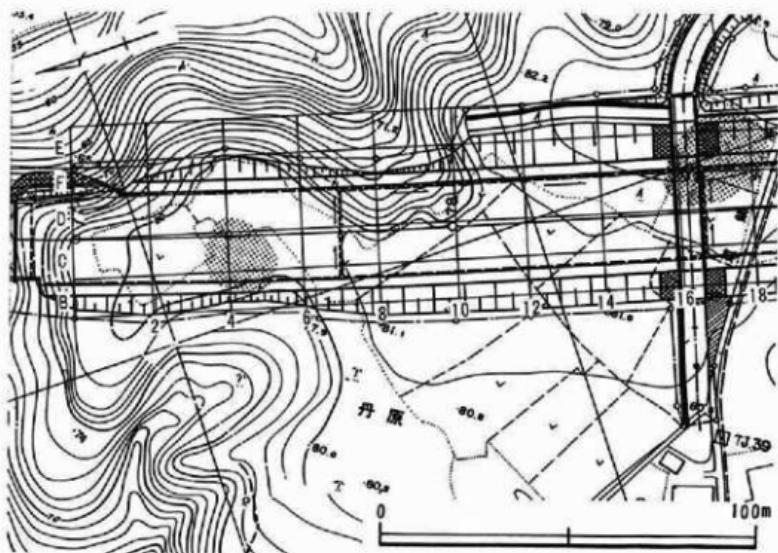
昭和57年8月の範囲確認調査の結果にもとづいて試掘トレンチを設定した。試掘トレンチは範囲確認調査の際にあげたトレンチおよびグリッドと重複しないように、センター杭を中心として東側に2本、西側に2本幅5mで合計4本設定した。表土を重機で約25cm除去すると地山の赤褐色土となる。4本の試掘トレンチはグリッド方向に一致させているため、便宜的に西側から1T・2T・3T・4Tとした。いずれのトレンチにおいても、遺物包含層というものは存在せず、表土の下はすぐ地山の赤褐色土となる。しかし、A・B列の13から16にかけては部分的ながら表土と地山の間に明褐色土や灰色シルトが10cm弱の厚さで存在する所もある。遺構・遺物の検出地点はD・E-16・17で南東から北西にのびる歛状遺構、C・D-4・5で清



第15図 出土遺物（石器）



第16図 調査対象範囲



第17図 遺構集中地域

状遺構やピットが、また、B-D-7では北西から南東に向かう幅1.28m、深さ46cmの溝が1本検出された。遺物は縄文土器・磨石等がC-D-4・5で表土中より単発的に破片となって出土している。須恵器・土師器も単発的に細片が出土し、特にA-B-14・15に集中して出土している。遺物の分布状況から古代と縄文時代のものでは場所が異なっていることが判明した。しかし、遺構に伴う遺物は全くなく、時期決定にも問題があった。遺物の絶対量は極めて少ない。

この他に性格不明の土壤や風倒木痕などがかなり検出された。また、周辺の聞き込みから、大規模ではないが、土地の改変を行なっているという事実があり、遺跡としてはかなり荒されているものと判断された。調査は7月26日に着手し8月7日に終了した。

3. 土 層

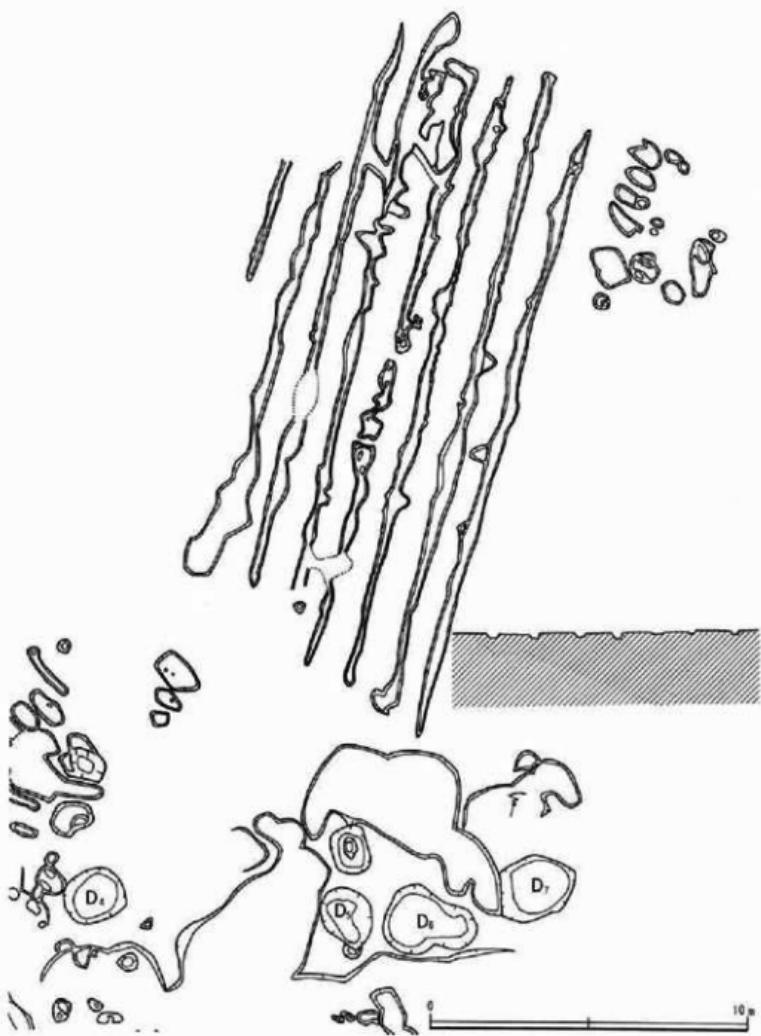
本遺跡の基本層序は2つに大別される。調査対象地の北端部、B-E-1-4、およびB-E-7-12、C-F-13-17においては暗褐色と表土が20-25cmあり、すぐ地山の赤褐色土となっている。暗褐色土の表土は北側では厚く、南側へくるに従って薄くなるが、その差は5cm前後を測るにすぎない。遺物は調査対象地の北端部で耕作土中より数片の縄文土器片が出土した以外に他の遺物は全く出土していない。遺構は地山の赤褐色土上面で確認された。B-C-13-16では暗褐色の現地表面から36-40cmで地山の赤褐色土に達する。地山までは表土を入れて3層に識別される。第1層は暗褐色の表土で20cm弱、第2層がしまりの悪い明褐色土で10cm弱、第3層が堅くしまった灰色シルトが5cm前後あり、そして地山の赤褐色土となっている。第3層は部分的にしか見られない。第3層が存在する地域には、遺構と呼ばれるものはほとんどない反面、古代の須恵器や土師器、縄文土器が量的には多くないが出土している。縄文土器は暗褐色の表土中から、土師器・須恵器は灰色シルトの下面から地山の茶褐色土上面にかけて出土している。第21図17の須恵器は茶褐色土上面でつぶれた状態で検出されている所から、原位置を保っているものと思われる。時期を決定する遺物が遺天している所から上面はかなりいじられているものと思われる。灰色シルト層は古代の遺物に関係する可能性があるが、部分的にしか残っていないために詳細は不明である。

4. 遺 構

遺構として認められるものは畝状遺構・溝・性格不明の土壤などがあるが、遺構内からは時期を決定するような遺物は全く出土していない。

畝状遺構（第18図、図版6） D-E-17・18で7条検出された。いずれも併行して存在し、全長20m、深さ10cmから18cmで、断面は上面が緩く開くU字状をしている。内部充満土は暗褐色土である。畝と畝の間隔は60cmから80cmで一定している。また、隣接した畝と接続しているもの、途中で切れているものもある。遺物は全く出土していない。

溝（第19図、図版6） B-C-7・8とC-D-4・5に所在するものがある。B-C-7・



第18図 遺構実測図(歯状遺構)

8にある溝はほぼ東西に走り、東側端部は狭くなつて途切れている。西端は法線外へ続いている。幅は上面で1.2m、断面は紙く開くU字形をしている。傾斜角は北側が急で、南側は緩い。底面はほぼ平坦で東側が西側より5cm高い。内部充溝土はしまりのない明褐色土一層で、B・C-16の第2層に近似していることから、年代的には新しいものであろう。

土壤(第20図) 平面的形態から長方形、梢円形、不整形の三種がある。長方形のものはC・D-4・5で3基併列して検出された。D₁は長辺7.4m、短辺1.4m、D₂は長辺6.9m、短辺0.7m、D₃は長辺4.3m、短辺0.9mを測る。深さは確認面から20~30cm弱で、D₃が一番浅くて10cm弱を測るにすぎない。D₁とD₂の北側には幅が狭く、深さのないテラスが付いている。底面はほぼ平坦であるがD₃のほぼ中央部はさらに10cm程度底くなっている。内部充溝土はいずれも溝状造構と同様、しまりのない明褐色土一層で、遺物も出土しないところから古い時代のものとは考えられない。

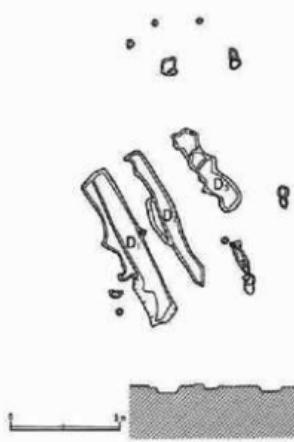
梢円形および不整形のものは畝状造構の周辺部で検出されている。大きさからさらに2分される。

大きいものはD₄~D₇のごとく、長径2~3m、短径1.5~2m前後を測る。小さいものは長径1~1.2m、短径0.6mを測る。深さは形態の大小に関係なく、10~15cmと浅い。内部充溝土は灰色シルトを含むもの、暗褐色土のものがあるが、遺物は全く出土していない。

ピット(第18図) 総計40数個を数え、畝状造構の周辺部に数多く分布している。形態的には円形と梢円形のものがある。直径は25~40cm、深さは20cm弱で、内部充溝土は暗褐色をしているものが多い。建物等の柱穴のごとく、整然とは並ばず、柱穴とは考えられな



第19図 遺構実測図(溝)



第20図 遺構実測図(土壤)

い。遺物は全く出土しておらず、時期は不明である。

5. 遺物（第21図、図版7）

縄文時代の土器・石器と平安時代の須恵器・土師器がある。遺物量は全体で平箱4分の1弱である。縄文土器はそれぞれの破片が単発的に出土し、全体の形状をほぼ把握されるものは須恵器の長頸壺（瓶）2点のみである。

1) 縄文時代の遺物（第21図1～13、図版7）

縄文土器（1～10） いずれも深鉢形土器で、1・2は口縁部片である。1の口唇部は肥厚し、端部は平坦にナデられている。1の器面には撚糸が綴位に施されている。3～6は胴部片で6の器面には細かい条線文が施されている。7・8は胴部上半部と思われる。7は二本の横走する沈線によって文様が画され、上半には斜行する平行沈線、下半には縄文が施されている。8は無文帯上に縱横に沈線が施され、綴位の沈線は器面を区画するものであろう。9・10は平底で、ヘラでナデ調整されている。色調は、赤褐色・暗褐色をしているが、器面は荒れているものが多い。文様等から縄文時代中期後半から後期前半頃のものであろう。

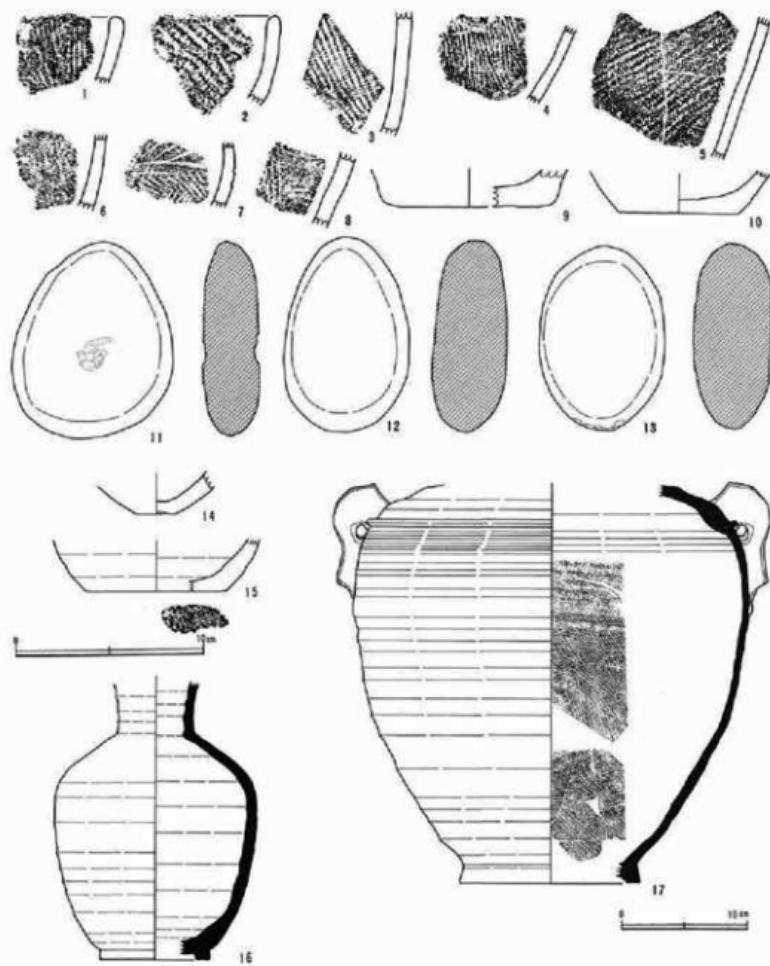
石器（11～13） 凹石・磨石の二種がある。11は凹石で、長さ10.5cm、幅8.5cm、厚さ2.9cmの偏平な楕円形を利用し、両面に凹がみられる。石質は安山岩である。12・13は磨石で、楕円形で偏平な河原石を利用している。いずれも磨面が正・裏面に存在し、13の下端部には叩き潰し痕がみられる。石質は12が安山岩、13が砂岩である。

2) 平安時代の遺物（第21図14～17、図版7）

土師器と須恵器があるが、出土量は少ない。この他に須恵器の杯の小片が若干出土している。

土師器壺（14～15） 14は胴部が匏弾形を呈し、底部が小さい大壺の底部である。底面には指頭状の浅い窪があり、外面には綴位のヘラミガキ痕がある。胎土は緻密で黄褐色を呈し、焼成は堅緻である。15は器面が荒れているために調整は不明であるが、底部には回転糸切痕がある。胎土は緻密で赤褐色をしている。

須恵器長頸壺（第21図16・17） 16は口縁部を欠失しているが、頸部は外反気味に立ち上り、最大径は胴部上半に位置している。高台・頸部は付けられたものである。高台は外方へふんばるように付され、高台の接合部付近はヘラナデされている。内外面ともにロクロナデ調整である。17は双耳壺（瓶）である。肩部下半には幅4mmの突帯が一条めぐっている。胴部外面はタキ整形の後に回転による横方向の刷毛目調整が加えられている。内面には刷毛目調整痕があり、肩部内面はさらにロクロナデ調整されている。高台は付高台である。双耳は接合部で1.5cmの厚さを測り、ヘラで面取りされ、直径1cmの孔が穿たれている。双耳と胴部の接合部はていねいにヘラ調整されている。胎土は精選され、器厚も全体的に薄く仕上げられ、焼成も良好である。特に、17の長頸壺（瓶）は県内では稀なもので、時代的には平安時代中期、即ち10世紀頃のものと考えられる。



第21図 出土遺物（縄文土器・石器・須恵器ほか）

4. 後谷遺跡

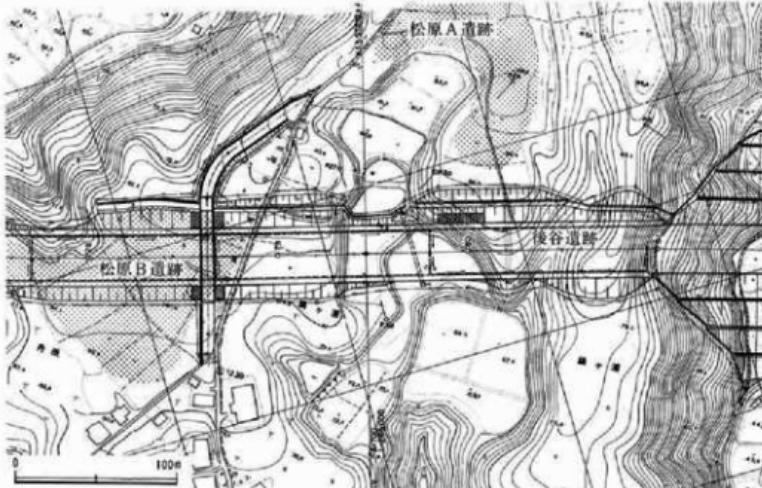
1. 遺跡の立地 (第25図、図版6)

本遺跡は海岸線に沿って発達した海岸段丘の段丘崖から南へ約400m入った標高85mの段丘面に立地している。調査対象地は東および西側に発達した開析谷に狭まれた段丘先端にあたっている。東側の開析谷をはさんで北へ約200mの地点には松原B遺跡がある。

2. 調査の概要

調査対象地の東側に隣接して縄文時代中期および古代の遺跡である松原A遺跡が存在している。調査対象地まで松原A遺跡が広がっている可能性が多分にあったために試掘調査を実施して遺跡か否か、検討する必要性があった。旧状は杉の植林地で遺物は全く採集されなかったので幅3mを基本として第22図の如くトレンチを3本設定した。抜根には重機を使用し、人力で地山面まで掘り下げた。表土下約25cm程度で黄褐色土の地山面に達するが、台地の先端部および北側・南側の緩斜面に行くに従って5~10cmで地山面に達する。表土から地山面までは暗褐色土一層で遺物は全く含まれされていない。地山面は地形に沿って整地され、暗褐色土は地山を削って造り出されたもので、上八平遺跡と同様の性格を持っているものと考えられた。このため遺構と呼ばれるものも存在していない。調査は7月28日に着手し7月31日に終了した。

遺構・遺物も検出されず、松原A遺跡は当地域まで広がっていないことが判明した。



第22図 調査対象地

5. 梨子平遺跡

1. 遺跡の立地 (第24図、図版8)

本遺跡は今日まで茶屋ヶ原遺跡と呼ばれていた遺跡の一地点でもある。遺跡は海岸段丘崖から直線距離で東へ約500m入った標高78-81mの段丘面上の最奥部に立地している。東側は丘陵となって斜面に高度を増している。南側には開析谷が西に向かってあり、調査対象地との比高差は約17mを測る。調査対象地は北東から南西に向って緩やかに傾斜し、南側は開析谷に面している。遺跡の立地条件は後述する川原田遺跡に極めて近似している。本遺跡の南西380mの地点には縄文時代中期の川原田遺跡が存在している。

2. 調査の経過

昭和58年8月の範囲確認調査の結果にもとづいて試掘トレンチを設定した。試掘トレンチは昭和58年の範囲確認調査の際にあけたトレンチとトレンチの間をぬうように、地形の傾斜面に沿って幅4mのトレンチを合計4本設定した。重機で表土を10cm強除去すると軟質の赤褐色土が10cm内外あり、赤褐色粘質土の地山となる。直径1m弱の円形ピットが等間隔で検出されたが、これは昭和38年の西部パイロット事業で栗林の造園を行った際に掘られた栗の植樹痕と判明した。遺物としては縄文時代の土器や磨石・石斧・剥片などの石器類が標高80mの等高線より高い地域に集中的に出土し、それ以下になると遺物量は極端に少くなり、南西端から南側の開析谷の崖上では全く出土しなくなる。遺物の集中している地域は人力で、遺物量が極端に減少する地域については重機で地山面まで掘り下げ、人力で精査した。遺物が集中している地域といえども、遺物は単発的に出土し、まとまってはいない。遺物の集中している地域を全面的に拡張した結果、楕円形の土壙が2基検出された。このうち1基は土壙内から縄文土器が2個体潰れて出土した(図版9-1中段)。他の一基からは全く遺物は出土していない。また、遺物が極端に減少する地域については、栗の植樹痕と根切溝が検出されたにすぎず、縄文時代の遺構は検出されなかった。検出された土壙の壁は確認面からも浅く、かなり大規模に地形の改変が行われたものと考えられた。

調査は8月28日に着手し9月7日に終了した。

3. 土 層 (第23図)

基本的に地表面までは2層に区分され、地表面から約20cmで赤褐色粘質土の地山となる。第1層は耕土、第2層は軟質赤褐色土で、両層とも昭和38年の西部パイロット事業で新たに地山を削って作られた土層である。遺物は第1・2層から出土するが、本来の遺物包含層とは言えず、攪拌されている。



第23図
土層柱状図



第24図 調査対象範囲



第25図 遺構集中地域

4. 遺構 (第26図、図版9)

遺構は土壙2基が検出されたにすぎない。遺物は2基の土壙のうちD₁から縄文時代中期の土器と石器がまとまって出土したのみである。この他に、直径1m前後を深さ1.2m前後を測る円形の落ち込みが等間隔で検出されたが、これは昭和38年から実施した西部パイロット事業によって植込んだ栗の植木穴であることが判明した。

D₁ 長径3.5m、短径2.3cmを測る楕円形の土壙である。壁高は確認面から10~15cmを測り、非常に浅い。底面はほぼ平坦で、内部充満土はしまりのある暗褐色土一層である。北側の壁面近接して長径30cm大の自然凹縛と縄文土器が潰れた状態で出土している(図版9)。特に、第27図42・44の土器は遺構の時期を決定し得るものとして注目される。なお、本土壙の南側に直径1m前後の楕円形の落込痕があるが、栗の植木穴で、本遺構とは時代的にも異なり、昭和30年代後半のものである。

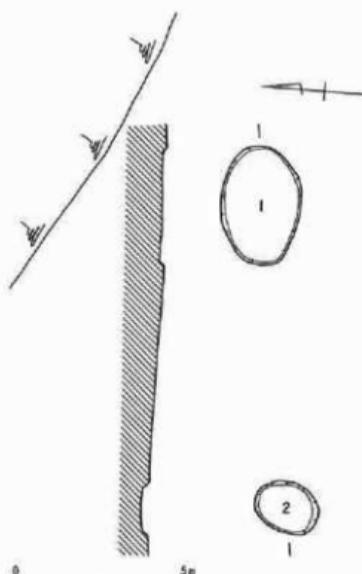
D₂ 長径1.94m、短径1.5mを測る楕円形の土壙でD₁の西側9mの所に位置している。壁高は確認面から8~12cmを測り、D₁と同様非常に浅い。底面は中央部が若干凹み、平坦ではない。内部充満土はD₁と同様しまりのある赤褐色土であるが、遺物は全く出土していない。

検出された土壙の壁高がなく、基底面しか残っていないということは昭和38年から44年にかけて県が実施した西部パイロット事業によって地山面が削平された結果にもとづくものと思われる。検出された土壙より、浅いレベルの所に構築された遺構は前述の西部パイロット事業によってすべて削平された可能性が強い。2基の土壙は本来、もっとも深くしっかりとした土壙であったであろう。

5. 遺物 (第27図、図版10)

土壙内から出土した土器の他は、1層および2層に混じって、それぞれの破片が単発的に出土している。前述したように、大規模に削平されているため調査対象地全域から遺物が採集され、原位置は保っていない。出土した縄文土器は縄文時代中期に属し、石器類もこの時期に属するものであろう。この他の時期の遺物は全く出土していない。

縄文土器 (第27図、図版10) 出土した縄文土器の出土量は平箱2箱弱である。その土器の大

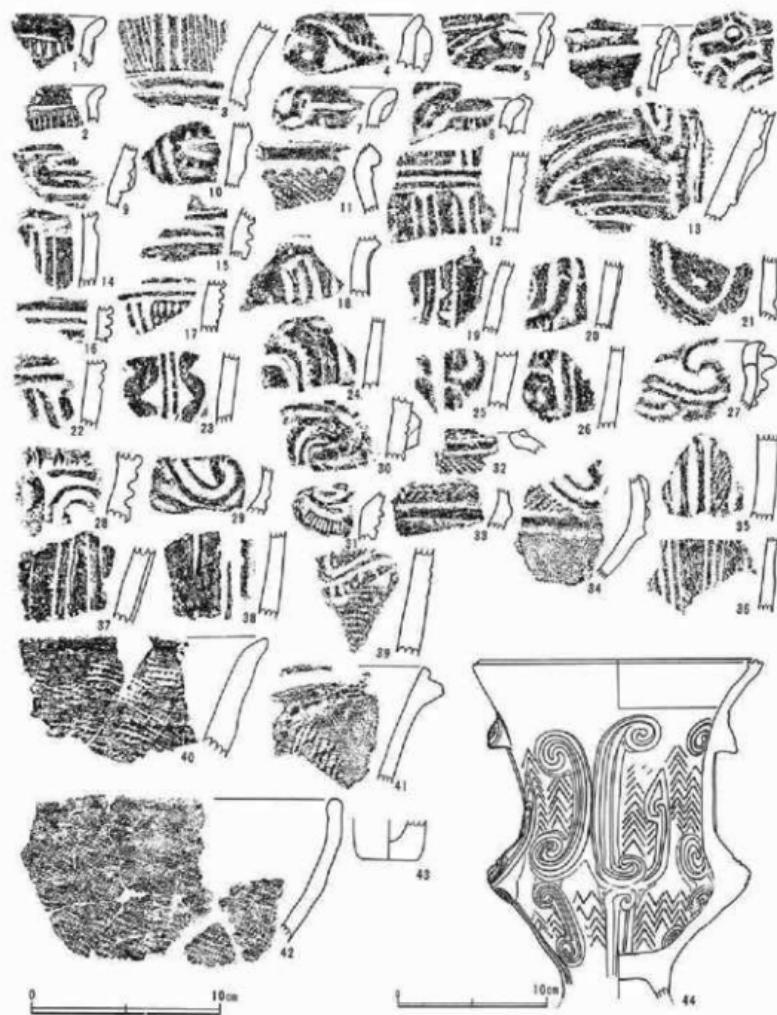


第26図 遺構実測図(土壙)

半は遺構外からの出土である。ここでは D₁ から出土したものを主にして説明を加えたい。なお、D₁ からは最低 2 個体の土器が潰れて出土したが、1 個体のみ復元された（第27図-44）。他の 1 個体については器面が軟弱で細片化しており、図化するまでは至らなかった。器形の全体をほの窺えるものは 44 の台付深鉢のみである。

1～8 口縁部付近の破片である。1・2 は口唇部をやや肥厚させ、その下に刻みをつけている。3 は半隆起線で区画した中に縱沈線を引いている。4・7・8 は半隆起線で区画し、その中に刻みをつけるもの、6・7 は曲線的な隆起線で器面を飾る土器の口縁と考えられる。11 は頸部付近の半隆起線で胴部の純文と口縁部を区画している。14～16 は横位の半隆起線の施される土器で胴部上半に施文されるものと思われる。12・13・17～26 は半隆起線により区画し、空間部を作り出している。19・23 は縦の半隆起線に区画された、無文部に刻みを入れたり、三角形に彫去したりしている。27～31 は端部が渦巻く隆帯を基本にして、半隆起線で器面を満たすものと考えられる。32～34 は口縁部付近の破片と思われる。半隆起線を巡らせ、口縁部と頸部の区画としている。35～38 は縦位の半隆起線及び沈線を一括した。39～42 は純文の施文された土器である。41 は口縁部外方が突出している。43 はミニチュア土器の底部である。上部の器形・文様等は不明である。44 は器形が判る唯一の例なので詳述する。遺存高 23.2cm・口径 20cm の台付の深鉢であるが台部は欠損している。器形は外反する口縁部が最大幅となり、頸部はくびれ、胴下半部が張り出している。口縁は平口縁で口唇部には 2 本の沈線が一周する。胴部文様は 4 単位の縦長 X 字状隆帯を付し、対になっている一方の隆帯の端部を大きく渦巻かせ突出させている。X 字状隆帯間に劍先文を描き、空白部は綾杉状沈線で満たされる。焼成は良好で、色調は赤褐色を呈する。この土器の特徴は各地域の器形・文様を融合したものとなっていることがある。器形と綾杉状沈線は中部高地の系統であり、劍先文は東北地方の大木 8 b 式の影響を受け、X 字状隆帯は信濃川中流域に認めることができる。

これらの土器の時期は縄文時代中期のもので、前葉に位置づけられるもの（1～5・8～22）と中葉に位置づけられるもの（6・7・27～34）があり、前者は北陸地方と、後者は東北地方との間連性が強い土器と言えよう。



第27図 出土遺物（縄文土器）

石器（第28図、図版11-13） 磨製石斧2、スクレイバー1、両面加工石器3、両極打法による石器5、二次加工を施した剥片3、疊器1、石核14、打面再成剥片2、剥片234、石皿1、磨石5、叩き石3、円礫（河原石）53、角礫（自然石）13、原石11、その他分類不可能なもの42があり、総計390点を数える。

磨製石斧（第28図45・46、図版11）

両資料ともD₁からの出土である。45は刃部を欠損する。一方の側面には、長軸とほぼ直交する形で浅い凹みがみられ、中には横位の線条痕が観察される。着柄痕とも考えられるが、周囲との色調のちがい等、後世の所産とも考えられる。46は刃部の少破片である。石質は、45が硬砂岩、46は蛇紋岩である。

スクレイバー（第28図49、図版11）

D₁からの出土である。一部に自然面を残す剥片を素材とする。両面はかなり平坦な剝離面によっており、右側縁は正面から、左側縁は裏面から二次加工が施されている。特に左側縁の加工は、入念かつ細かな剝離が施されている。石質は安山岩質溶岩である。

両面加工石器（第28図48・50、図版11）

両資料ともD₁からの出土である。48は原石面を一部残し、そこを打面として全周へ剝離が施される。下端には正・裏面から剝離が施されるが、それらの成すエッジは潰れており、刃部を作り出すためとは思えない。50は、正・裏面から剝離が施されているものの、両面の成す角度がかなり広く、しかも細部調整がみられない事などから、意識的な刃部作出とは考えられない。石質、両資料とも安山岩質溶岩である。

両極打法による石器（第28図47、図版11）

全てD₁からの出土である。47は両側縁に原石面を残すことから、素材は小型偏平な円礫である。両極からの剝離面は正・裏面とともに観察される。石質は、チャートである。その他両極打法によるものが4点あるが、小型円礫を半割状にしたもの（図版11-47a）と残り3点は、剥片を素材としている。石質は前者が安山岩、後者は安山岩質溶岩である。

二次加工を施した剥片

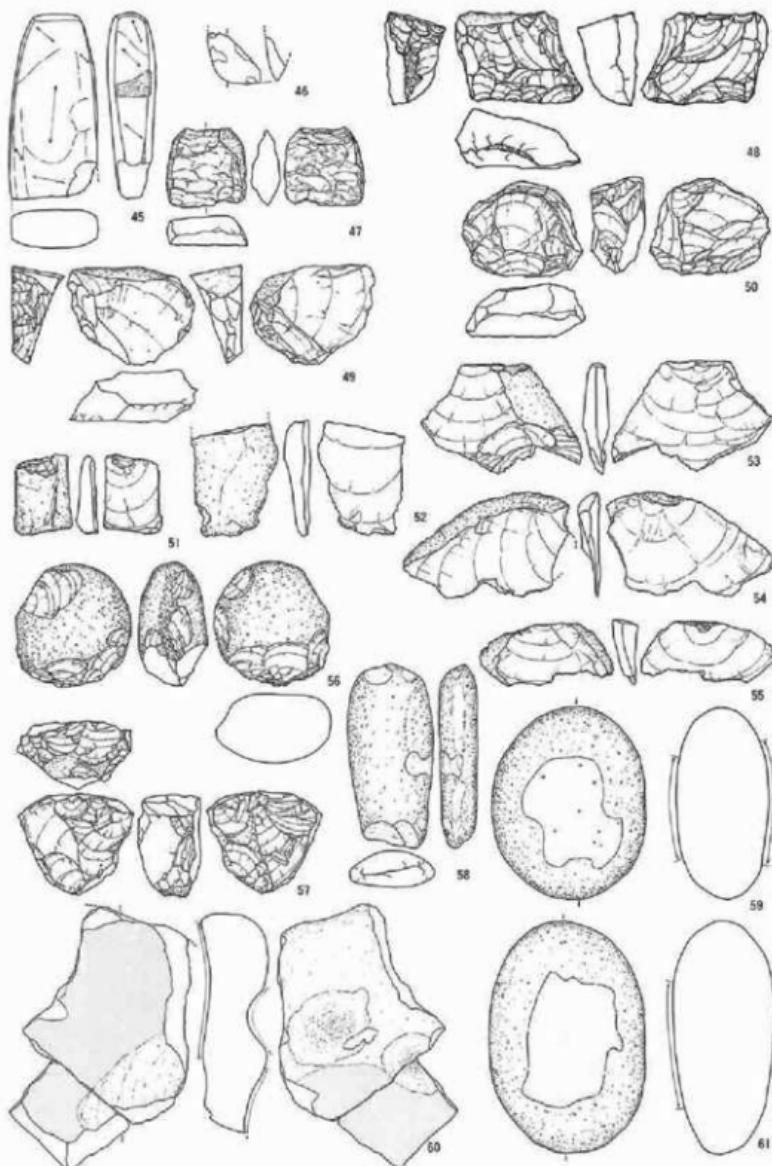
3点ともD₁からの出土である。剥片の1側縁または一部に大・小の剝離が施されている。それらの剝離には規則性がみうけられない。石質は全て安山岩質溶岩である。

疊器（第28図56、図版11）

偏平な自然礫の1側縁に交互剝離を施している。刃部付近は、原石面を完全に除去していない。石核の可能性も考えられる。石質は安山岩質溶岩である。

石核（第28図57、図版11・図版12）

D₁からの出土は9点である。原石面を打面とするもの（図版11-57c・57d・57e）6点、剝離面を打面とするもの（第28図57、図版11-57a・57b）6点である。前者は、礫の1面に作業



第28図 出土遺物(石器) 42%・16%・他は3%

面をもつもの（図版11—57d・57e）と複数面に作業面をもつもの（57）とがあり、その中には打面が180度転位したものも含まれている。後者は一面に作業面をもつものではなく、打面180度転位のもの（図版11—57b・57）と、90度転位のもの（図版11—57a）等が含まれる。また、13のように打面に細かな調整剝離が施されるのは希であり、その多くは1回の大きな剝離面を打面として利用している。石質は全て安山岩質溶岩である。

打面再成剝片

D₁からの出土である。原石面を打面とする石核からのものと、大きな剝離面を打面とする石核からのものとがある。石質は、安山岩質溶岩である。

剝片（第28図51～55、図版12）

多くが打面または正面に原石面を残し、長さ2～5cm、幅1～5cmのものが大多数を占める。横長・縦長に極端に片寄る傾向はない。打面の形状は観察可能な資料103点中、原石面を打面とするものは62点あり、全体の60%以上を占める。残りは1回の大きな剝離面または複数の剝離面から成っている。しかし、これら複数の剝離面は、それぞれ大きく、打面調整痕と思われる細かな剝離によるものは3点と少ない。大多数がD₁からの出土である。石質は全て安山岩質溶岩である。

石皿（第28図60、図版12）

片面に磨り面、裏面には磨り面と2ヶ所の凹みがみられる。凹みは、叩打によるもので、大きさ、深さ等が、きわめて近似する。凹みと磨り面との新旧関係は不明である。石質は、砂岩である。

磨石（第28図59・61、図版13）

D₁から出土したものはない。椭円形の河原石を素材とする。磨り面が正・裏の2面に存在するもの（第28図59、図版13—59a～c）と片面のみのもの（第28図61、図版13—61a）とがある。石質は、図版13—61aが砂岩、他は全て安山岩である。

叩き石（第28図58、図版11・図版13）

細長の自然礫の両端が剝離をともなって潰れているもの（58）と、肉厚な椭円礫の一端に細かく潰れた痕跡があるもの（図版13—61a）とがある。前者は、かなり強い加熱によったと考えられ、後者と区別される。石質は、全て安山岩である。

円礫（図版13—63）

上記の安山岩質溶岩を多用した石器とは別に、河原石の頻度がきわめて高い。大きさは、長幅2cmの小型のものから、長15cm、幅10cmほどの大型のものまで多数出土している。形状は円礫・椭円礫・長椭円礫とかなりバラエティーがある。この中に、剝片作業時に叩き石として使用したものも何点か含まれようが、明瞭な痕跡を留めるものはみあたらない。石質は、安山岩が最も多く、全体の40%以上を占め、石英粗面岩、礫岩、砂岩、流紋岩等がこれにつづく。

安山岩質溶岩原石（図版13—62）

径7～2cm程度の角礫である。自然破砕したもので、表面がかなり風化しているものと、径20～10cmほどの円礫が出土している。原石面を残す剥片・石核等の観察においても、前者の大形角礫を多用したものと考えられる。

- (註1) 剥片の1側縁または一部に大・小の剥離が施されるもので、剥片の形状・大きさ・剥離の施される部位には、共通性がみられない。これらを一括して「二次加工を施した剥片」とした。
- (註2) 安山岩質溶岩製の定型化した石器器種が、きわめて少なく、剥片、破片を区別することに危険性を感じる。したがって、ここではそれらをひとまとめとして「剥片」とした。
- (註3) 安山岩質溶岩のものに限る。
- (註4) 特に川原田遺跡出土のものの中に多量に含まれている。剥離面にみられるリングが、面の中央から放射状に広がるものや、原石表面のビビに沿って破碎した様なものなど、人工的な加熱によるものとは理解できないものを一括して扱うこととした。これらの成因については、凍結、凍解、人的な加熱によるもの等が推察されるが、今後、実験や石材原産地での調査等で解明しなければならない点が多い。なお、前記の剥離面を石核の打撃面として使用する例の多いことを付け加えておく。
- (註5) 梨子平遺跡、東金クソ谷遺跡、川原田遺跡で、剥片、石器製作に多用した石材である。それらは原石表面の観察から、火山噴出物が空気中に流れ出し、冷え固まったもので、表面はパン皮状の細かなビビや、気泡がみられる。また、破碎面では、よく織状の模様が観察され、溶岩の性質を窺い知ることができる。上記の安山岩が自然破砕したものと、石材として使用したもので、他の安山岩質の石材と区別する意味でも、今回の報告では「安山岩質溶岩」の語を用いた。また、「安山岩」としたものは輝石安山岩・角閃石安山岩である。

6. 川原田遺跡

1. 遺跡の立地（第29図、図版14）

本遺跡も前述の梨子平遺跡と同様、茶屋ヶ原遺跡と呼称されていた遺跡の一地点である。遺跡の所在する小字名から川原田遺跡と呼称することにした。遺跡は海岸段丘崖から直線距離で東へ約450m入った標高80mの段丘面上の最奥部に立地している。東側は丘陵となって斜面に高度を増している。北側および南側には開拓谷があり、谷は北東方向に開口している。特に南側の谷は深く、遺跡との比高差は約20mを測る。調査対象地は南東隅が標高約84mと一番高く、北および西北方向に向って緩く傾斜し、調査対象地の北端部とは約9mの差がある。

本遺跡の北東380mの地点には縄文時代中期の梨子平遺跡が、南側の深い開拓谷をはさんだ対岸には縄文時代前期や古代の土器を出土した東カナクソ谷遺跡が存在している。

2. 調査の経過

昭和58年8月の範囲確認調査の結果にもとづいて試掘トレンチを設定した。試掘は昭和58年の範囲確認調査の際にあけたトレンチとトレンチの間をぬうように、地形の傾斜面に沿って幅4mのトレンチを合計5本設定した。重機で表土を10cm強除去すると軟質の赤褐色土が10cm弱あり、地山の赤褐色粘質土となる。遺構と考えられる土壤やピットは標高の一番高い地域、面積にして約400m²の範囲に限定された。しかし遺物量はさほど多くなく、縄文時代の遺物が散発的に単独で出土する範囲は、遺構が検出された範囲の北側から西側にかけての標高80m前後の範囲で、それ以北は全く出土しない。遺物が散布しない範囲については重機で地山面まで掘り下げ、遺構等の精査は人力で行った。遺物が出土する範囲における遺物の出土状況は、土器・石器および安山岩質溶岩の剥片が散発的にそれぞれ破片が単体となって出土している。遺物に時期的幅があるにもかかわらず混在して出土しており、かなり地形の変化が行われたことを物語っている。昭和38年の西部パイロット事業に携わった地元の人の話によると、「栗林造成の際、原地形を地形なりに30~50cm削平した。」という聞込を得た。

遺構は標高の一番高い地域（第30図）で土壤が7基検出された。遺構が残存している地域は削平が行なわれたが、削りの深度が浅かった結果によるものであろう。大形の土壤7には土器や安山岩質溶岩の剥片が集中していた（図版14~16）。小形の土壤には、自然石や土器が入っているもののが多かった（図版16）。土壤からの出土遺物については1点づつ番号を付し、位置・レベルを計測した。調査対象地内には（図版14~中段）のごとく、栗林造成工事に伴う幅30cm、深さ約40cmの根切溝が等間隔で南北方向に走っている。又、根切溝に狭まれた所には直径1m前後の栗の植樹痕が梨子平遺跡と同じように確認された。

調査は9月7日に着し9月27日に終了した。



第29図 調査対象範囲



第30図 遺構集中地域

3. 土 層

現地表面から赤褐色粘質土の地山までは約20cmを測る。地山までの土層は一応表土、軟質赤褐色地の2層に識別される。しかし、2層に識別される範囲は遺構が集中的に検出された地域に限られ、それ以外は図版14—中段の栗の木の根本が示すように表土のすぐ下が地山となっている。地山面は昭和38年の西部パイラット事業で削平されている。表土および軟質の赤褐色土は梨子平遺跡の土層と同様、人工的に作られた土砂である。遺物は軟質の赤褐色土および表土から出土しているが、本来の遺物包含層ではなく、埋葬された結果内包されているにすぎない。

本遺跡も梨子平遺跡と同様、遺物の量や質からかってはかなり大規模で良好な遺跡であったと推定される。

4. 遺 構 (第31図、図版15・16)

遺構としては土壙が9基検出された。このうち7基が標高の一番高い地域に集中している。土壙は地山の赤褐色粘質土上面で確認され、三角形・梢円形・不整形の三種に大別される。さらにこれらの土壙は規模によって大小に分けられる。土壙内からは土器が出土するものが多い。なお、土壙については“D”という略記号を用い、番号を併設して記述する。D₁・D₅・D₈・D₉から土器は出土していない。また、土壙内に長径25cm前後を測る自然石が1ヶ入っているもの (D₃・D₄・D₈・D₉)、長径5cm前後の偏平な自然石が数点入っているもの (D₅・D₁)、安山岩質溶岩の剝片が数多く入っているもの (D₇)、全く伴出遺物がないもの (D₁・D₂) がある。

D₁ 長径52cm、短径40cm、深さ8cmを測る梢円形の土壙である。内部充満土は暗褐色土一層で、自然石もなく土器も出土していない。

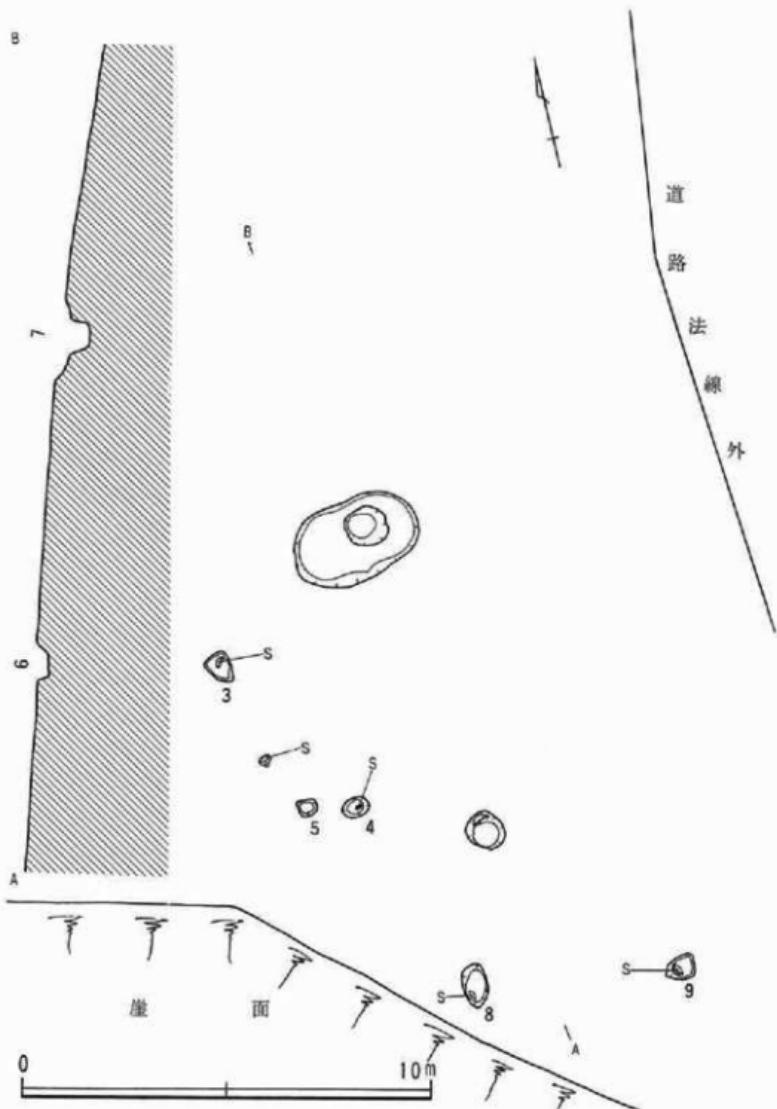
D₂ 長径68cm、短径60cm、深さ11cmを測る円形の土壙である。内部充満土は上面から暗褐色土、灰褐色土となり、灰褐色土には炭化物の小片が混入している。暗褐色土中より縄文土器および安山岩質溶岩の剝片が数点出土している。

D₃ 長径75cm、短径50cm、深さ14cmを測る三角形状をした土壙である。内部充満土は暗茶褐色土で炭化物が混入している。長径25cm前後の自然石が土壙の片側に偏して垂直に立った状態で検出された。自然石の下は土壙等は存在しない。暗茶褐色土中より縄文土器片が出土している。

D₄ 長径65cm、短径48cm、深さ20cmを測る梢円形の土壙である。内部充満土は暗茶褐色土で炭化物が混入している。長軸線の東側には長径85cm前後の自然石が垂直に立った状態で、土壙上面において検出された。土壙の底面に接して縄文土器が出土している。

D₅ 長径48cm、短径40cm、深さ14cmを測る不整形の土壙である。内部充満土は暗茶褐色土で炭化物が混入している。自然石の小さいものが底面に接するかもしくは若干浮いた状態で検出されている。遺物は一点も出土していない。

D₆ 長径94cm、短径84cm、深さ35cmをはかる梢円形の土壙である。北側には小さい浅い段



第31図 遺構実測図(土壤)

が付いている。底面の西側に扁した位置には自然石が底面に接するかもしくは若干浮いて出土している。本土壙は、他の土壙に比して規模も大きく、壁面の状態もよい。底面はほぼ平坦で、南側は上面より外側にくい込んでいる。内部充満土は黄褐色土で炭化物が混入している。内部の底面に接して縄文土器片が若干出土している。

D₇ 本遺跡の土壙のうち最大規模のものである。長径3.12m、短径1.9m、深さ15~20cmを測る小判形の土壙である。土壙の底面はほぼ平坦で、東側に偏してさらに長径1m、短径90cm、深さ48cmを測る不整円形の土壙がある。本土壙は2段深の土壙で、上段の土壙面からは安山岩質溶岩の剥片や原石、円形の自然縄、縄文土器の細片が出土している。これらの遺物は土壙全面には広がってはおらず、東側に偏して所在する下段の土壙上面と西側の2グループに分離される。遺物は土壙底面に接しているものは数少なく、大半が浮いた状態で検出された（図版14一下段・図版15一上段）。下段の土壙は上段の土壙に比して、遺物の主体は土器類が多く、上面から底面にかけては第32図の16~21までの土器が潰れた状態で出土した。（図版17中・下段）。上下段の土壙は、出土遺物からあまり時間差等は見られず、内部充満土は黄褐色土、暗褐色土でいずれの層にも炭化物が混入している。

D₈ 長径1m、短径60cm、深さ9cmを測る楕円形の土壙である。楕円形でも南北に長軸線をもち、偏平に近い。南側に偏して長径25cm前後の自然石が1個南北方向に配されている。自然石は土壙上面に浮いた状態で検出されている。内部充満土は黄褐色土で炭化物が混入している。遺物は全く出土していない。

D₉ 長径72cm、短径56cm、深さ29cmを測る不整形の土壙である。東西に主軸をもち、西側に偏した所に長径25cm前後の自然石が1個、底面に接して検出された。自然石はD₃・D₄・D₈と同様、扁平な石で、位置は異なるもの垂直に立っている。内部充満土は黄褐色で炭化物が混入している。遺物としてはフレークが若干出土したのみで、土器は出土していない。

本遺跡の土壙はD₇のように規模が大きいものもあるが、表の数値が示すように長径・短径はある程度の数字の範疇に入っている。土壙には自然石が1個垂直に立っているものと小自然石が複数に入っているものがある。これらの土壙の分布も段丘崖上にある程度限定されることから自然石が立っている土壙は該期の墳墓の可能性が多分にあるものと思われる。自然石は墳墓の“標”としての役割をもつものであろう。今後、類例の増加をもって検討したい。

土壙No.	(単位:cm)					
	長径	短径	深さ	形態	備考	
D ₁	52	40	8	楕円形		
D ₂	68	60	11	円形	土器	
D ₃	75	50	14	三角形	石・土器	
D ₄	65	48	20	楕円形	石・土器	
D ₅	48	40	11	不整形	石・土器	
D ₆	94	84	35	楕円形	石・土器	
D ₇	312	190	20	◆	石・土器	
D ₈	100	60	9	◆	石	
D ₉	72	56	29	不整形	石	

表3 土壙計測値一覧

5. 遺物 (第32図-37図、図版17-25)

縄文時代の土器と石器の他に土偶片が出土している。土壤内から出土した土器の他は1層・2層に混じって、それぞれの破片が単発的に出土している。本遺跡出土の遺物も梨子平遺跡と同様の出土状態を示している。出土した遺物は縄文時代中期のものと考えられ、他の時代の遺物は全く出土していない。

縄文土器 (第32・33図、図版17・18) 出土した縄文土器の出土量は平箱2箱である。D₇から出土した土器は遺構の年代を決定する一括資料として注目される。記述にあたっては遺構の内外にかゝわらず文様で9類に分類した。なお、D₇から出土した完形土器については本項の最後で詳細に記述することとする。

I類 (8・21)

半隆起線によって区画された部分に沈線により格子目文を施す一群である。

II類 (1・7・15・22-24・26・27)

蓮華状文の施される土器である。これを施文法により3分することができる。a (22-24) は印刻手法によって蓮弁部を表出している。b (1・7・15・26・27) は蓮弁部の上端を半截竹管を押圧し、綻の沈線によって表現している。この他に、c として綻位の沈線のみのものが存在する。b は蓮華状文がより退化したものであると言われている。

III類 (9・10・25・28-38)

口縁部あるいは胴部に半隆起線を横位に施文した一群である。そのうち口縁部の破片は(9・29・30) では無文部分を残すものや、半隆起線上に爪形及び綾杉状刻目を施文するものなどがある。また、口縁が小波状となるもの(32) や円形隆帯を貼りつけたものも存在する。

IV類 (4・5)

口縁部の横に半隆起線を施し、そこから綻に半隆起線を下して区画割りを行い、その空間に横位の沈線を施している。この2点の破片は同一個体である。

V類 (2・3・6・11・39-61)

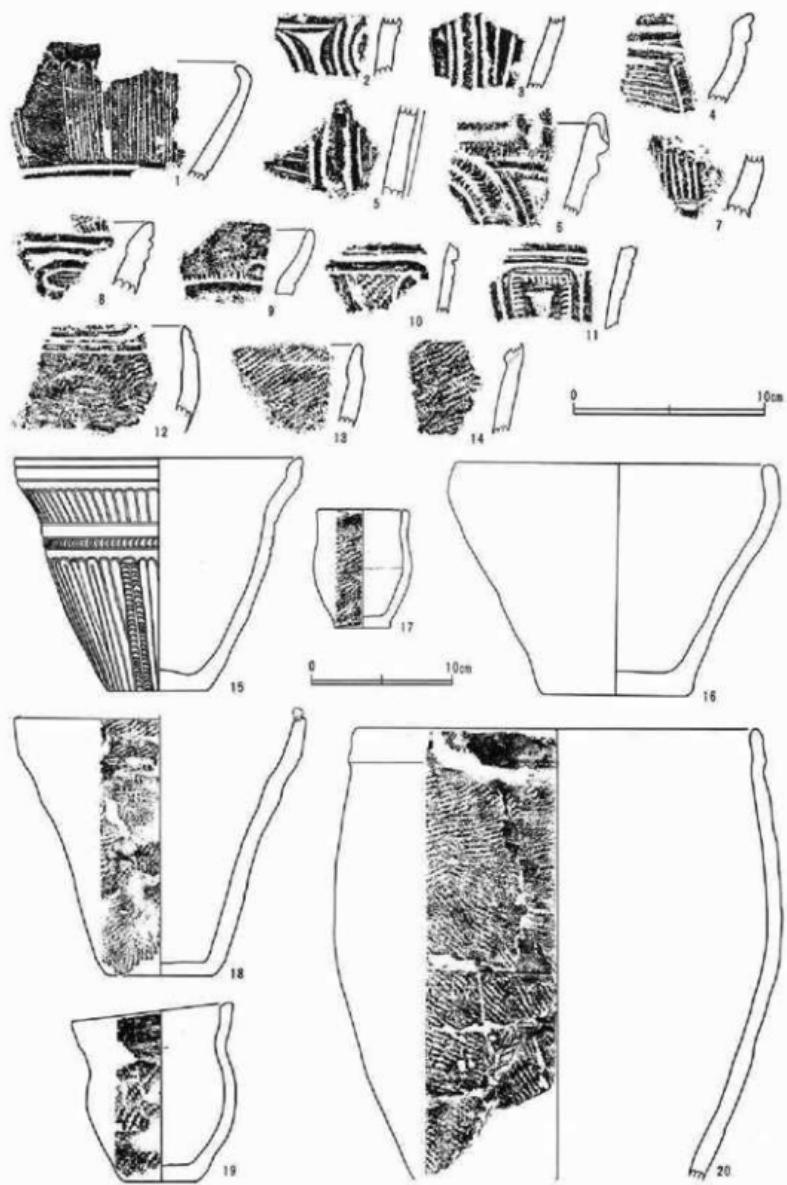
半隆起線の組み合わせで器面を埋めるものを一括した。半隆起線で直曲線を描き、三叉文を作りあるいは印刻するもの(2・6・46・47)、やや細い半隆起線で渦巻や垂下する線を施すもの(52・53・55・56)、渦巻文様を描出したもの(40・41・43-45・48)などがある。

VI類 (62)

屈曲する胴部破片である。大きな爪形が施文されているが、器形は不明である。

VII類 (12・63)

浅鉢を一括した。口には口縁部が直立からやや内擣気味になる。口縁部には沈線が引かれており。器形の傾きからして鉢と呼ぶべきかも知れない。63は口縁部外面に3本の半隆起線を引き胴部には縄文を施し、口唇部は水平に仕上げ、玉だき三叉文を施している。なお口唇部の一



第32図 出土遺物（縦文土器 1）

部に赤色顔料が残る。

罹頭 (13・14・17~20・64~68)

縄文・撫糸文の施されるものを一括した。

Ⅳ類 (16)

無文土器。一個体のみである。

以下、D₇出土の一括土器のうち、6個体の完形土器について詳述する。

15は高さ15.8cm、口径20cmである。器形は外傾し、頸部がわずかくびれる。口縁部と頸部下に半隆起線を配し、その間に半截竹管を利用した沈線で蓮華状文が施文されている。頸部下の半隆起線は口縁部文様帯と胴部文様帯を分けているが、胴部の文様も基本的には口縁部文様帯と同じである。胴部の二ヶ所に、半隆起線上に爪形が施文される。色調は暗茶褐色である。

16は高さ16.3cm、口径21.3cmである。器形は外傾して立ち上がり、口縁部付近で直立する。

無文Ⅳ類で外面胴部下半が焼けている。器面調整は内外面とも割合粗く仕上げられている。

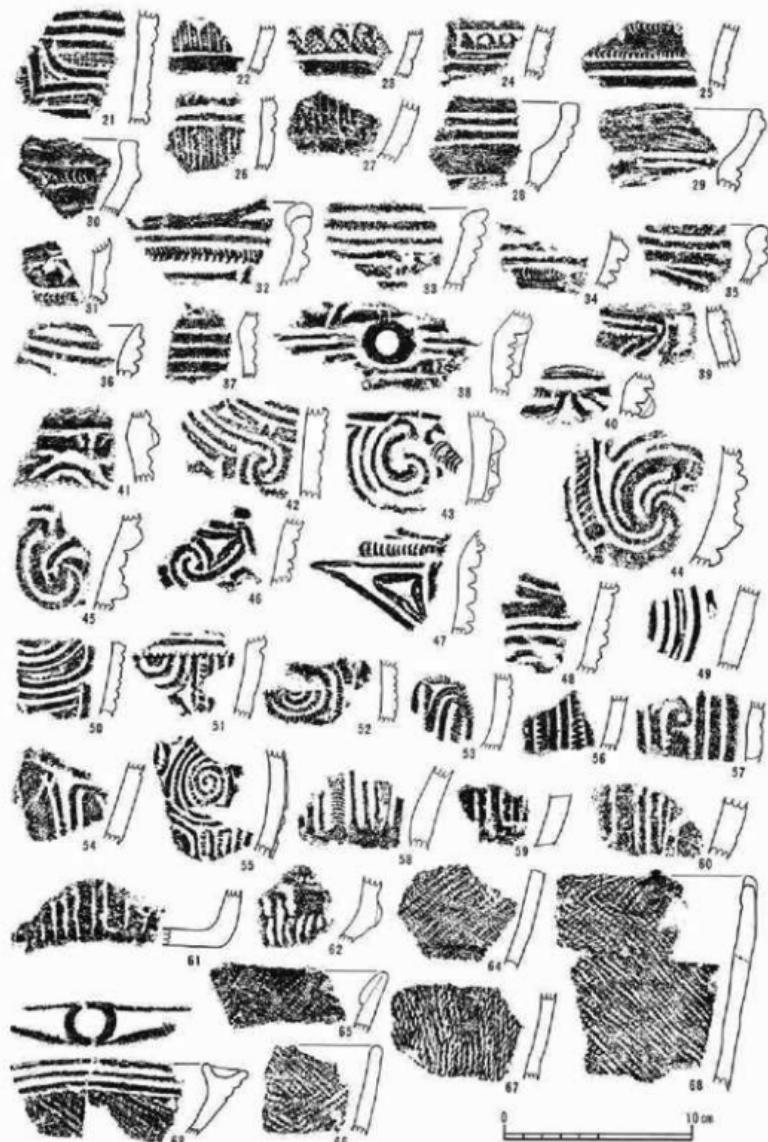
17は高さ8.5cm、口径5.7cm。器形は口縁部が直立し、胴部がややふくらむ。文様は口縁部付近を無文帯に胴部には繩文を粗く施す。色調は淡黄褐色で胎土には砂が多い。

18は高さ約19cm、口径約19.4cm。器形は外傾して立ち上がり、口縁部付近で外方にやや広がり直立気味となる。口縁部上端には沈線が巡る。胴部文様は風化が進んでいるが、繩文が不定方向に施文されている。色調は淡黄褐色で焼成は悪く胎土には砂が多い。

19は高さ12.1cm、口径8.6cm。器形は頸部ですつまり、胴部がややふくらみ底部へかけて細まる。文様は口縁部が無文で胴部には粗い繩文が施される。色調は淡赤褐色を呈す。この19と17はほぼ同じ器形と文様構成を持つ土器である。

20は口径約28cm。器形は胴部上方で一番ふくらみ、口縁部は、ほぼ直立する。文様は口縁部付近の幅約2.5mを無文帯として胴部には粗く繩文を施す。

本遺跡出土の土器は繩文時代中期前葉から中葉にかけての土器が主体である。県内では上越市山屋敷遺跡、吉川町長峰遺跡、栄町吉野屋遺跡、小木町長者ヶ平遺跡などでも出土しており、文様構成等からすでに北陸地方との関連性が指摘されている。本遺跡出土の土器もこの例にもれず、I~IV類は石川県の新崎式に対比される一群の土器で、中期前葉に位置づけられる。II類は蓮華状文を有する一群で、文様テクニック等から時期差があるものと考えられる。V類は中期中葉に位置づけられる。なお、I~Ⅳ類に分類した土器の他に、中期後葉の土器が1・2点出土している。



第33図 出土遺物（縄文土器 2）

石器（第34～36図、図版19～25）

打製石斧2、磨製石斧15、二次加工を施した剥片15、両極打法による石器9、スクレイバー1、疊器6、石核164、打面再生剥片6、剥片332、石皿2、磨石8、叩き石11、石錘4、凹石1、砥石2、円疊256、角疊44、原石109、その他、分類不可能なもの649を含む、計1636点である。また、今回、整理が行き届かなかったピット出土のものを含めると約1800点の出土量がある。

打製石斧（第34図69・70、図版19）

69は片面に原石面をもつ横長厚手の剥片を素材とする。左側縁には、正・裏面からの剥離が加えられている。70は原石面を片面に残す横長の剥片を素材とするが、69に比べかなり薄い。石自体かなり風化が進んでいるが、両側縁には細かな剥離が施されている。石質は69が安山岩質溶岩、70は不明である。

磨製石斧（第34図71～85、図版19）

最も多く出土している器種である。71は製作途上のものと考えられ、両側縁からの大まかな剥離が施された後、正、裏面は研磨されている。側縁は叩き潰し様の加工により、ほぼ平坦面を作り上げている。72は唯一の擦切石斧であり、両面からの擦り溝と切断面とがみられる。73～85は定角式石斧である。79は刃部のエッジをつぶして研磨面が存在し、鋭利な刃部を作る前段階（刃部ライン作製の痕跡）を示す資料と思われる。82～85は本遺跡では、小型の部類に含まれる石斧である。石質は71が疊岩、74～76が砂岩、81が安山岩、他は流紋岩である。

二次加工を施した剥片（第34図86・89・90、図版19）

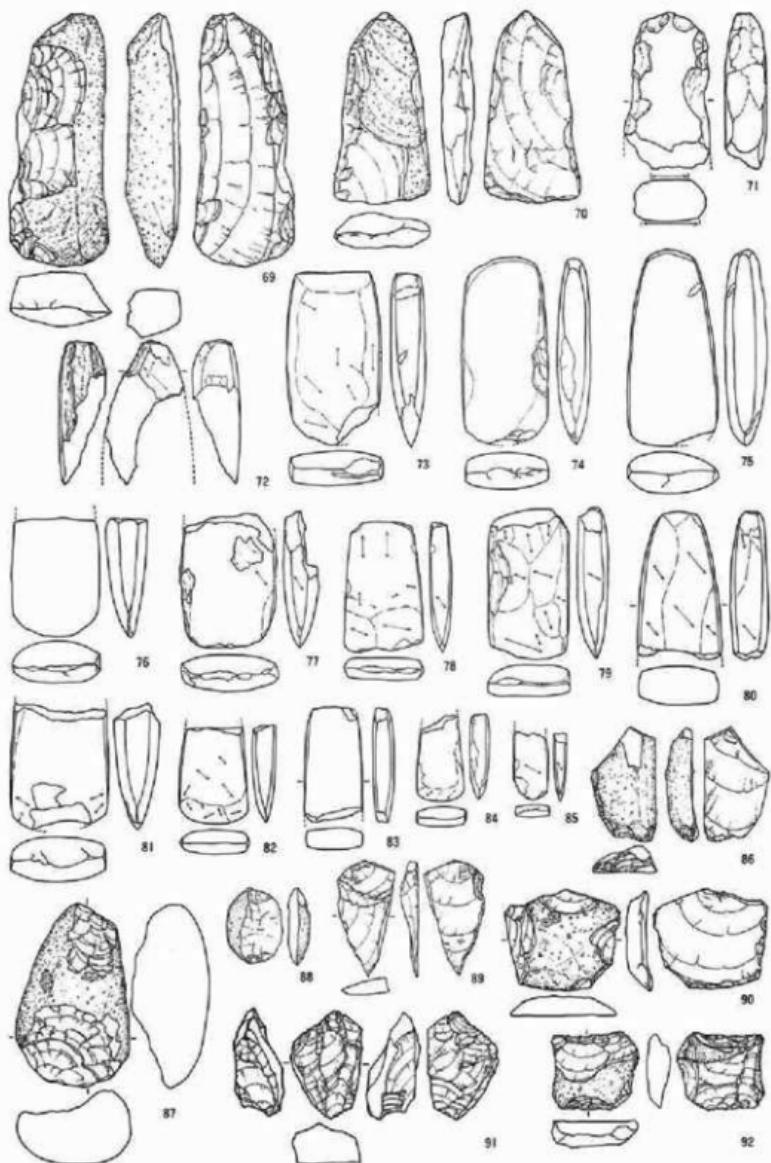
86は片面に原石面をもつ縦長の剥片を素材とするもので、側縁から下端にかけて、裏面からの細かな剥離が施されている。89は縦長の剥片を素材として、一侧縁に正面からの細かな剥離が施されている。正面の剥離痕から、打面90°転位の剥離方法が観察される。90は片面に原石面をもつ横長の剥片を素材とし、側縁から下端にかけて、正面から細かな剥離が施されている。細かな剥離は86、89のそれに比べると連続性を欠き、使用による刃潰れと考えられる。石質は全て安山岩質溶岩である。

両極打法による石器（第34図87・88・91・92、図版19）

87・88はそれぞれ、厚手の楕円疊と偏平で小型の円疊とを用いており、片面に両極打法によるとと思われる剥離痕が認められる。91は側縁と裏面の一部に素材時の剥離面を残すのみで、他は全て両極打法による剥離痕と考えられる。92は正・裏面に原石面を残すもので、偏平小型疊を素材とする。石質は87が安山岩、88が砂岩、他は安山岩質溶岩である。

スクレイバー（第35図93、図版20）

93は残核を利用したものと思われ、右側縁には正、裏面からの、下端には裏面からの、剥離が加えられ、刃部としている。石質は安山岩質溶岩である。



第34図 出土遺物（石器） 23は $\frac{1}{2}$ ・他は $\frac{1}{4}$

礫器（第35図94、図版20）

94は片面に原石面をもつ剥片を素材としている。裏面へは周縁より剥離が加えられ平坦面を作り出している。これに類似する資料が、本遺跡では多数出土している。その他、原石の端に大まかな剥離を加えたものもある。石質は全て安山岩質溶岩である。

石核（第35図95、図版20・図版21）

多量の石核が出土している。原石面を打面とするもの（図版20・21-95 i・95 l・95 m・95 p・95 Q）と剥離面を打面とするもの（図版20・21-95 a・95 c・95 k、95 a・95 h・95 k・95 Q）がある。後者のものも、1回の大きな剥離面を打面とするものが大半である。また、剥片剥ぎ取り作業が1～3回程度で終了していると思われるものが相当数含まれる。

打面再生剥片

全て大きな剥離面を打面とする石核の打面再生剥片である。石質は全て安山岩質溶岩である。

剥片（図版22）

打面または正面に原石面を残すものの頻度の多いことは、梨子平遺跡、東金クソ谷遺跡と同様である。長さは2～10cm、幅は15～12cmまでのものに含まれ、長さ3～6cm、幅3～6cmのものが大半を占める。打面の形状は観察可能な資料175点中、原石面を打面とするもの73点、1回の大きな剥離面を打面とするもの72点、複数の剥離面によって打面を作っているもの30点である。しかし、打面への複数の剥離は、細かいものではなく、ほとんどが大まかな剥離である。石質は全て安山岩質溶岩である。

石鏝（第35図96・97、図版23）

比較的小型のものである。石質は、全て安山岩である。

叩き石（第35図98～101、図版23）

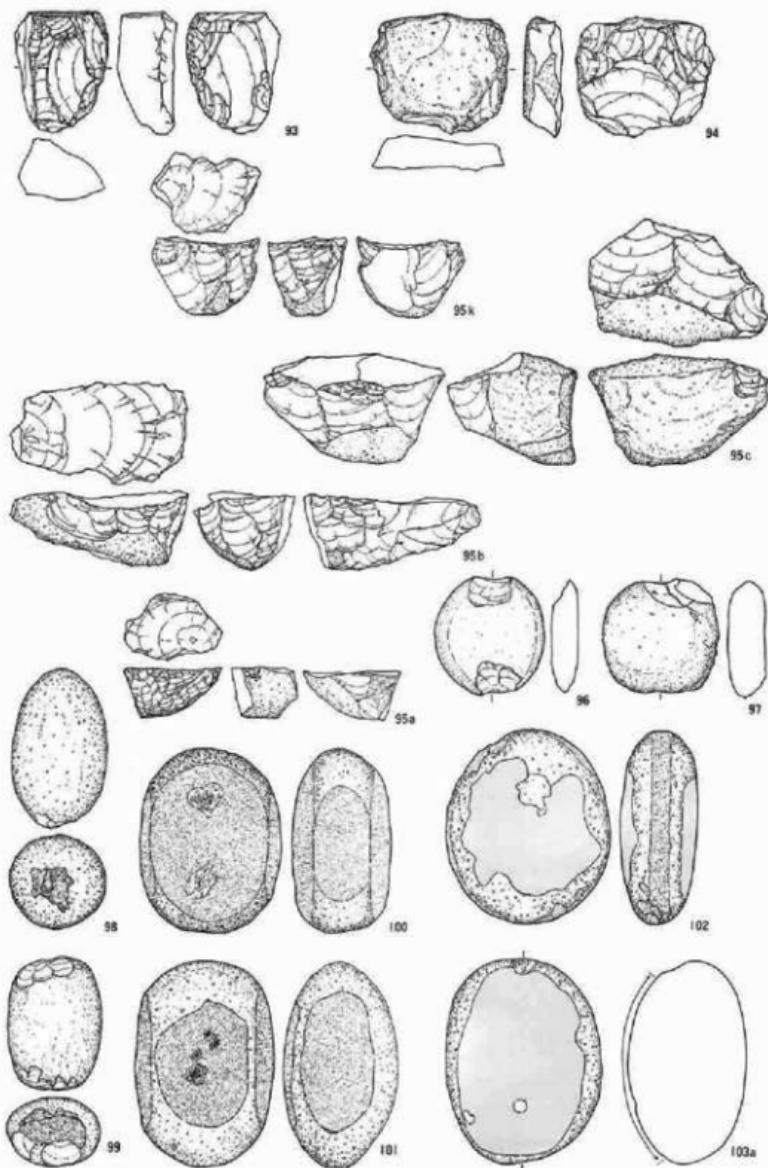
棒状の河原石の一端または両端に叩き潰れ様の痕跡を認めるもの（98・99、98 a）と100・101のように梢円形の正・裏面と両側面を叩き潰し様の加工によって平坦面を作り出すものがある。後者は、むしろ、加工痕と考えられ前者と区別される。石質は98が砂岩、99が砾岩、他は安山岩である。

凹石（第35図100・101）

長さ9.5cm、幅7.0cm、厚さ2.0cmの偏平な梢円形を利用し、背面に凹みられる。石質は、安山岩である。また、100・101の片面にも凹部がみられるが、きわめて不明瞭である。

磨石（第35・37図102～108、図版23・24）

梢円・偏平な河原石を利用して磨り面が正・裏面の2面に存在するもの（102・103・105・106）と片面のみのもの（103 a・106）がある。102の周縁は叩き潰し様の加工がみられる。107は横断面が半円形の河原石を利用し、平坦面の大部分と側縁に沿った形で、磨り面が存在する。108は偏平・梢円形の河原石を利用し、一侧縁に磨り面と下端に叩き潰れ様の痕跡を残す。



第35図 出土遺物(石器2)・(3)

107・108は縄文時代早期に多出する特殊磨石と考えられる。石質は107が砂岩で、他はすべて安山岩である。

石皿（第36図110、図版23）

110は両側面を叩きによって成形している。作業面は深く渋曲しているが、研磨痕は認められない。作業面も叩きによったものと推測される。石質は安山岩である。他に砂岩製の破片が1点と、形態的には110と同様な安山岩質製のもの1点を表面採集している。

砾石（第36図109・111、図版23・24）

109は下端が欠損したもので、作業面を4面もつ。正面には、断面V字状の溝が走る。堤砥である。111は大型の河原石の一面に磨り面と2本の溝がみられる。作業面に近い位置に黒色付着物が散見される。置砥である。石質は110が凝灰岩、112が砂岩である。

円礫（図版25）

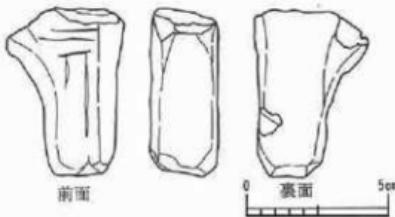
長さ3cmから23cm、幅2cmから17cmの大きさの原石である。形状は、梨子平遺跡同様、かなりのバラエティーがある。石質は石英粗面岩が最も多く、全体の約40%を占め、安山岩、疊岩、流紋岩、泥岩等がこれにつづく。

原石（図版24—112）

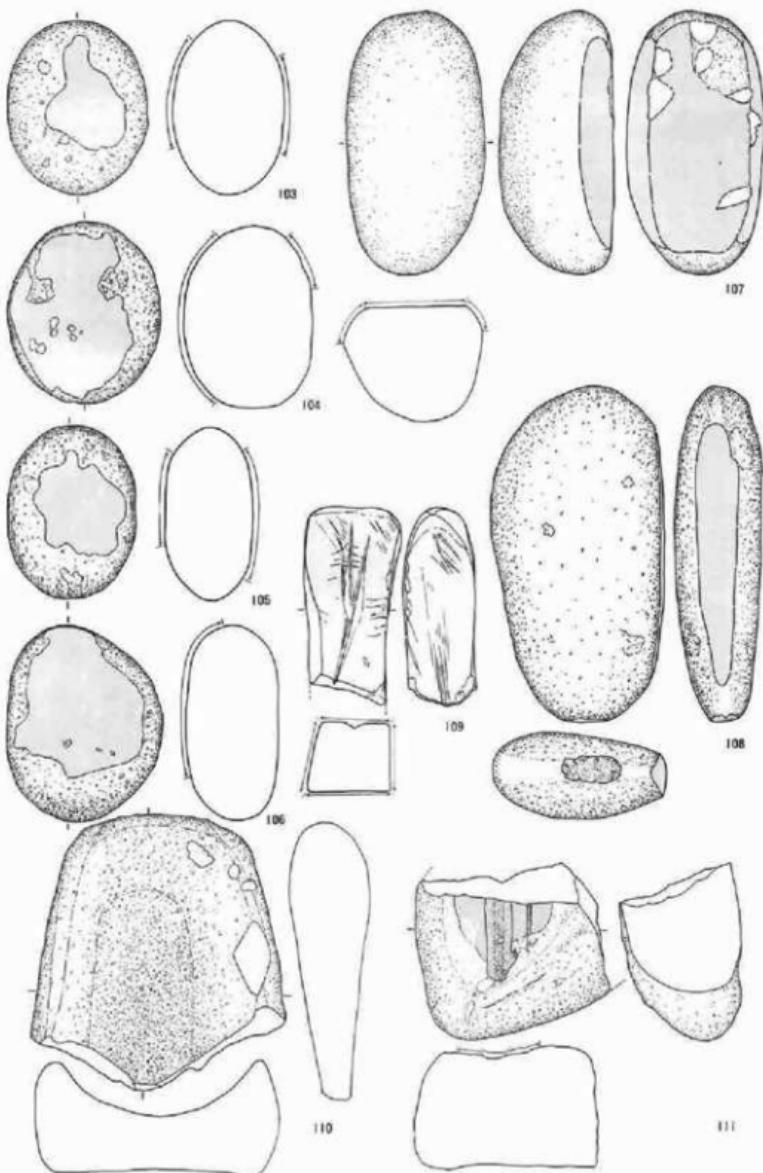
自然破碎したもので表面がかなり風化した角礫である。長・幅15cmほどの大型のものもみられるが、数は少なく、大方は梨子平遺跡のものに近似する。

土製品（第36図） 縄文時代中期のも

のと考えられる土偶片が1点出土している。土偶の左脚部と思われ、現存長5.5cmを測る。脚部は四角柱状に成形され、器面は研磨されている。脚上部前面の横走する三条の沈線は膝頭を意識したものであろうか。胎土には砂粒を多く含むが焼成は堅緻である。色調は淡赤黄色をしている。



第36図 出土遺物（土偶）



第37図 出土遺物(石器3) 46・47は3%・他は5%

7. 東カナクソ谷遺跡

1. 遺跡の立地 (第29図・図版26)

本遺跡は海岸段丘崖から直線距離で東へ約450m入った低段丘上にあり、標高は約65mを測る。遺跡の東側は除々に高度を増して行く。北および南側は西に開口する谷で、北側の谷は幅広で深い。谷をはさんで北東に存在する川原田遺跡との標高差は約18mを測る。今回の調査の対象地となつた丘陵そのものは南東から北西へのび、調査対象地は北傾斜面にあたる。調査対象地は大きく分けて東西の2地区に分けられる。西側は急斜面、東側は平坦地となっている。本来の遺跡は南側丘陵尾根上の平坦面および丘陵裾部の平坦面まで広がるものと考えられる。本遺跡の北東70mには川原田遺跡、南へ350mの地点には金ケソ谷遺跡が存在している。

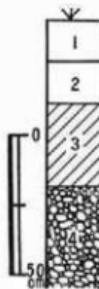
2. 調査の経過

本遺跡はカナクソ谷遺跡から川原田遺跡へ重機を移動中、偶然発見されたもので、本遺跡の取り扱いについては県教委と道路公团上越事務所とで協議を行つた。協議の結果、全体の調査日数および予算の範囲内で実施することになった。西側の急斜面については等高線と直交するように放斜状にトレチ5本を設定した。また、東側の平坦面についてはトレチを調査対象地のはゞ中央部に南北方向で1本設定した。本遺跡は現地表面が全くいじられておらず、良好な遺物包含層があることが判明した。出土する遺物は両地点とも時代は同様であるが、南側平坦面では時期的に古い縄文土器や平安時代の遺物も多いことが判明した。遺構については西側の急斜面では近現代の炭焼窯が1基検出されたにすぎなかった。一方、東側平坦部では面積が狭小にもかゝわらず、縄文時代、平安時代の土壙が検出され、用地内の全面発掘に切りかえた。縄文時代の土壙や近世の寺院跡と思われる礎石等も検出された。石器や剣片も出土し生活痕跡が一段と明確になった。

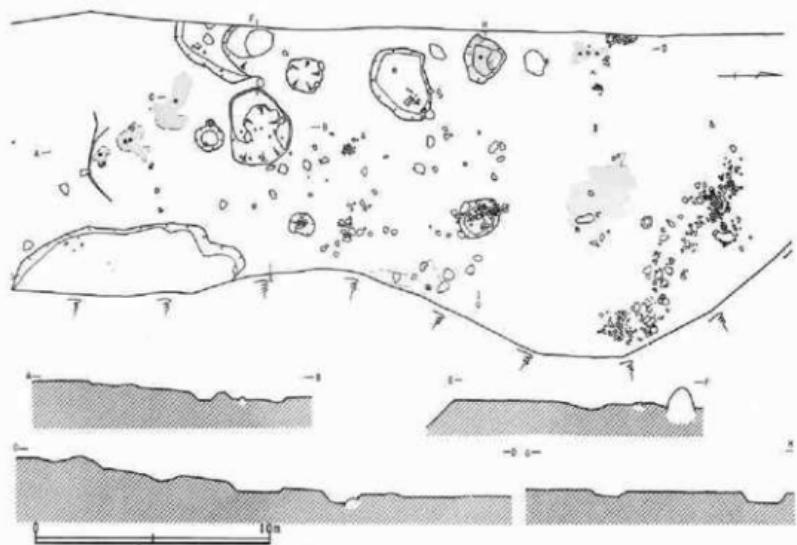
調査は9月27日に着手し10月17日に終了した。

3. 土 層 (第38図)

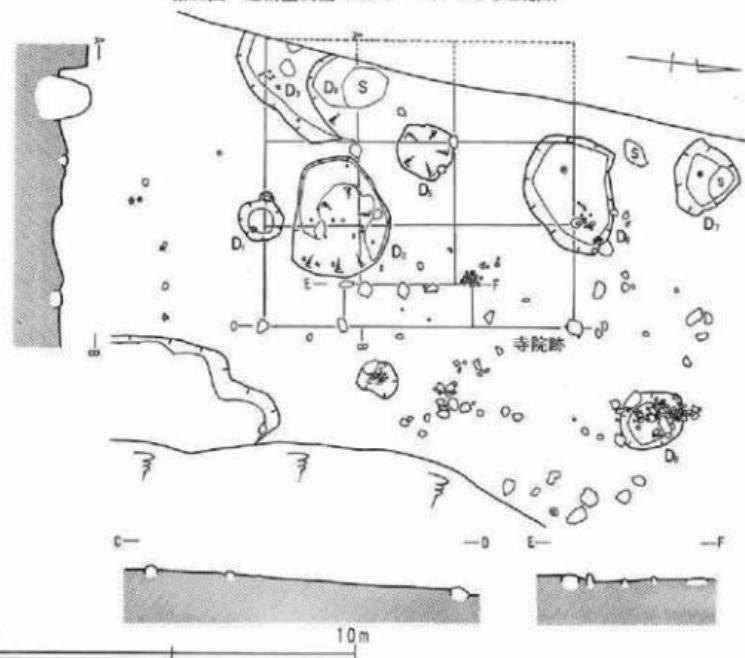
現地表面から基盤層の黄褐色粘質土(3)までは約30cmを測り、黄褐色粘質土の下は礫混入の黄褐色粘質土(4)となっている。表土(1)は厚さ15cmで灰褐色をし軟質である。表土と黄褐色粘質土の間には暗褐色土(2)があり、遺物包含層ともなっているが、あまりに薄いため縄文時代・平安時代の時代区分はできなかった。遺物包含層が明確に残っている地域は東側平坦面の丘陵沿いの所であり、西側の急斜面においてはほとんどなく、すぐ黄褐色粘質土となっている。西側の急斜面および東側の平坦面の北側においては黄褐色粘質土が全体的に薄くなり、礫混入の黄褐色粘質土が露出している所もある。



第38図
土層柱状図



第39図 遺構全測図（スクリーントーン：小標範囲）



第40図 遺構実測図（土器・寺院跡）

4. 遺構

検出された遺構は土壙が12基、礎石を伴う建物跡が1棟、炭焼窯が1基ある。遺構のほとんどが東側の平坦面に集中し、西側の斜面においては炭焼窯が1基存在したのみである。いずれも地山の上面で確認された。土壙については“D”という略号を用いて記述することとする。

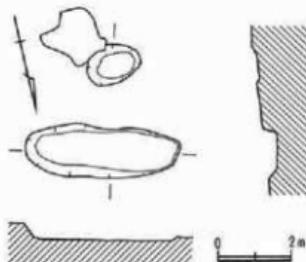
土壙（第40図、図版28） 平面形態からの円形・椭円形・不整形のものがあり、遺物が出土するものと全く出土しないものがある。さらに、遺物が出土する土壙は縄文時代の遺物が出土する土壙（D₁・D₃～D₆）と平安時代の土器（土師器）が出土する土壙（D₂）がある。内部充満土は縄文時代のものが2層に識別され、下層が暗褐色で炭化物を含んでいる。上層は暗褐色土である。遺物の大半が下層上面から出土している。該期の遺構の充満土の層序は基本的に同じである。平安時代の遺構は3層に識別される。下層が軟質の黄褐色土、中層が暗褐色土で炭化物を含んでいる。上層は暗褐色土で軟質である。遺物は中層および上層から出土している。D₃・D₄は当初別個のものと考えられたが、断面観察の結果連続するものと判明し、西側は法線外へのびている。土壙北側にある石はD₇にある石と同様、地山の中に含まれている自然礎で、人為的に入れたものではない。

建物跡（第40図、図版27） 柱間3間、桁行3間ないしは4間の建物で南側は法線外へのびているため不明である。南面して建てられ、上面が偏平で長径20～30cmの自然石を礎石としている。柱間の柱間数値は東から1.28+1.32+1.62mを、桁行の柱間数値は北から1.38+1.18+1.40mで、整然とは並んでいない。北側中央には須弥壇の礎石が残り、前面の東からの数値は36+50+45+48cmである。礎石の下には根固石等はない。礎石は廃絶した以後にかなり移動したものと考えられる。柱間などから中世後半から近世前半頃の觀音堂とも考えられるが、出土遺物は全くなく、時代等については不明である。なお、本地点の東側、茶屋ヶ原地内から室町時代頃の五輪塔が出土し、本寺院と関連があった可能性もある。

炭焼窯（第41図、図版28） 傾斜面に直交するように構築された近現代の炭焼窯である。壁面および底面は赤く焼け、特に壁面がよく焼けている。充満土は下層から粉炭、木炭層、褐色土となっており、周辺を含めた地域から遺物は全く出土していない。

番号	長径	短径	深さ	形態
D ₁	100	62	31	椭円形
D ₂	162	130	5	椭円形
D ₃	200	?	78	椭円形？
D ₄				
D ₅	78	72	27	円形
D ₆	162	110	33	不整形
D ₇	98	84	48	不整形
D ₈	92	80	27	椭円形

表4 土壙計測値一覧（単位cm）



第41図 遺構実測図（炭焼窯）

5. 遺物

本遺跡から出土した遺物は縄文時代の土器・石器と平安時代の土師器・須恵器を主にし、近世陶磁器が若干ある。

1) 縄文時代の遺物（第42図、図版29）

縄文土器と石器があり、土器は平箱にして約半分の量である。石器は石斧・石錘・磨石などの他に剥片類が464点ある。遺物は東側の平坦面から大半出土し、石器の一部は西側の急斜面から出土したものもある。

縄文土器（第42図1～32、図版29） 器形を復元できる個体ではなく、文様を中心に8類に分類した。Ⅶ類以外の土器には植物模様が混入されているがその量は少ない。

Ⅰ類（1） 縫位の波状文を施す。色調は外面赤褐色土で胎土には細砂が含まれている。

Ⅱ類（2・3） 丸底様尖底土器の底部片である。縄文が不定方向に施文されている。3は底部近くを一部無文帶としている。底部に径約5mm孔が穿たれている。色調は2が暗赤褐色、3が淡黄褐色をし、共に焼成は良好である。

Ⅲ類（4・5） 口縁部を無文化し、その後端に棒状工具で連続刺突文をめぐらせ、胴部には羽状縄文を施文している。5には縫位の羽状縄文が施文されている。器形は4の口縁部から波状口縁の深鉢形土器と考えられる。

Ⅳ類（6） 口辺部を無文化して粘土を垂下させている。ループ端による上下2段の刺突文がある。下半には縄文が施され、暗褐色を呈している。器面は風化が著しい。

Ⅴ類（7） 器面の風化は著しいが、口辺部は無文で縄文との境には粘土紐を横位に貼りつけ、丸棒状工具で押圧している。胴部には縄文が施されている。

Ⅵ類（8・26） 貝殻腹縁文を持つ土器である。8は口縁端部を急に外反させ、無文帶とした口縁部には貝殻腹縁を押圧し、胴部に縄文を施文している。胎土には砂粒を多く含み、色調は暗灰色である。

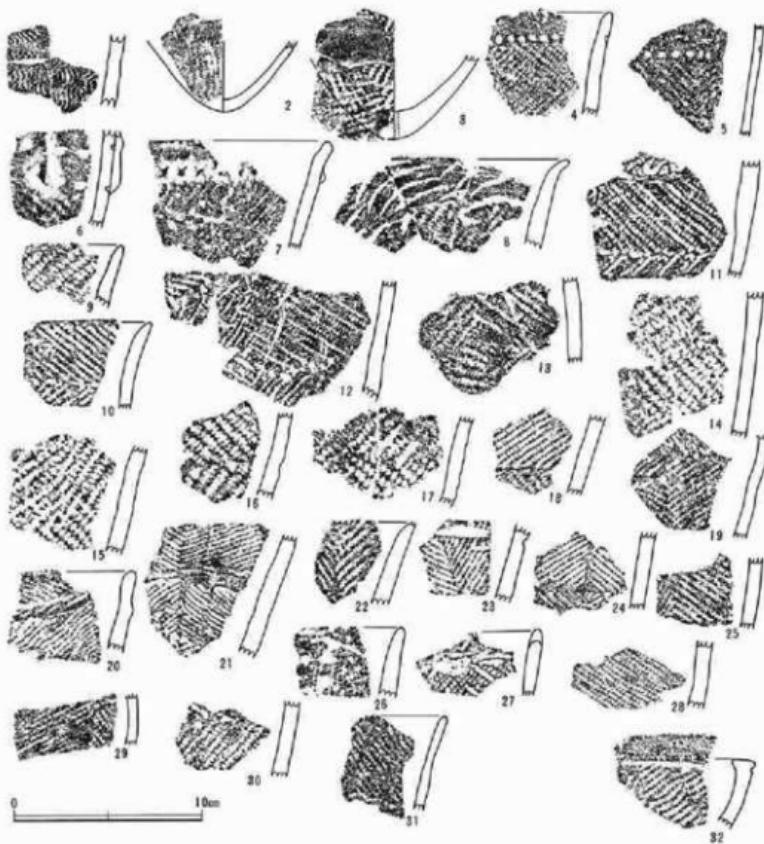
Ⅶ類（9～25・27～31） 羽状縄文が施された土器である。胴部破片が多く、口縁部に文様帶を持つものがあるかもしれないが、ここでは一括して記述する。20は口辺部に粘土紐を貼り、その隆起を境にして燃りの方向が異なる縄文が施文されている。31は波状口縁を示すものと思われる。21～24・27は縫位の羽状縄文が施文されている。7・21は無節縄文が施されている。27は口縁に小突起を持ち、口唇部にも縄文が施されている。

Ⅷ類（32） 縄文時代中期中葉の浅鉢型土器である。口唇部を平坦に仕上げ、外面には沈線が施されている。色調は黄褐色で焼成は良好である。

I類からⅧ類の土器は縄文時代前期初頭から前半に位置づけられる。I類は石川県の甲・小寺遺跡の第Ⅶ類Aに、II類は新潟県西蒲原郡巻町布目遺跡出土資料、同町新谷遺跡の1群下半部1類の資料に類例が求められる。新谷遺跡の資料は関東地方の縄文時代前期初頭に編年され

ている花積下層式に対比されている。Ⅲ類は富山県の極楽寺遺跡の第11群土器、Ⅵ類は石川県の吉野寺遺跡出土資料のIA・Ⅲ類に類似している。Ⅶ類21は胸部片であるが、器面には無筋の縄文を比較的粗く施していることから新しい様相とも考えられるが詳細は不明である。

本遺跡出土の土器を地域的に見ると、新潟県内の該期の遺跡の調査例が少なく資料的には恵まれていない現在、その系統を的確に導き出せないが、巻町の新谷遺跡出土の土器資料との類似点は少なく、北陸地方の土器との類似性が強く見い出される。



第42図 出土遺物（縄文土器）

石器（第43図、図版30～33）

局部磨製石斧1、二次加工を施した剥片19、石核13、剥片224、石錐1、磨石5、凹石1、叩石1、砥石2、円礫（河原石）73、角礫1、原石99、その他の分類不可能なもの24を含めて合計464点ある。

局部磨製石斧（第43図33、図版30）

原石面を片面に残した偏平な剥片を素材とする。裏面のほぼ全周と正面の右側縁とに剥離を加え、形状を整えた後に研磨が施されている。正面への研磨は、右側縁の剥離が施される部位に限って観察されるが、それ以外のところは、原石面の形状をそのまま利用している。また、両側縁は研磨により平坦面（側面）を作り出している。石質は硬砂岩である。

二次加工を施した剥片（第43図34a～34f、図版30）

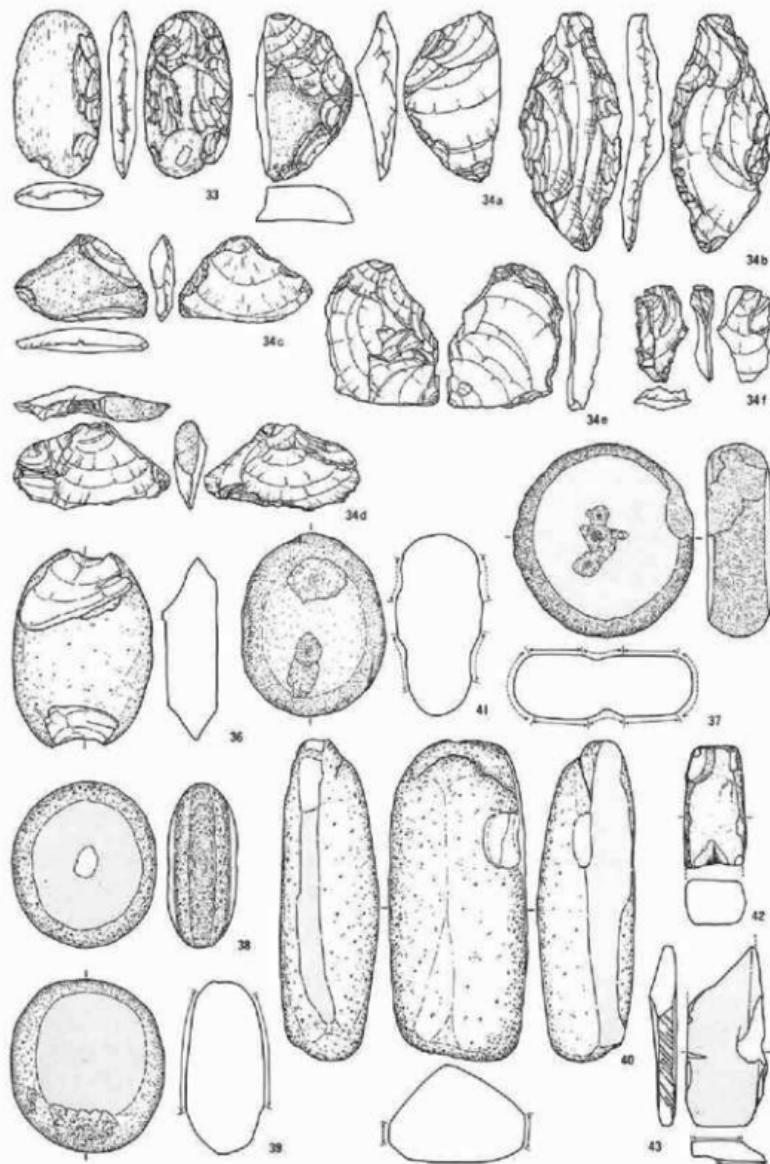
34aは片面に原石面を残す厚手の剥片を素材とするもので、右側縁に二次加工が施されている。34bは、横長の剥片を素材とし1側縁に交互剥離を加え、かなり鋭利な刃部を作り出している。また、素材の打点、バルブ付近に剥離を加え、高まりを除去している。34c、34dはそれぞれ、原石面と大きな剥離面との接点を打面とした横長剥片を利用し、1側縁または部分的に二次加工が施されている。34eは縦長の剥片を利用し、側縁と下端に、正面から裏面へと二次加工が施されている。34fは打面と下端に原石面を残す縦長の剥片を素材とし、両側縁に細かにタッチ様の加工がみられる。他に本類に含まれる剥片が13点出土しているが、その全てが1側縁または部分的に二次加工が施されるものである。石質は34fがチャートで他は全ての安山岩質溶岩である。

石核（図版30～35a～35c）

原石面を打面とするもの（図版30～35b・35c）6点、剥離面を打面とするもの（図版30～35a）が7点あり、その中で、大型の剥片を石核に利用するものが4点含まれている。原石打面のものは、打面を90度転位したもの（35c）がある。剥離面打面のものは、比較的、細かな剥離によっているもの（35a）と1回の大きな剥離面を打面するものとが存在するが、意識的な打面への細かな調整剥離は施されないようである。剥片を利用した石核は、2・3回の剥離作業痕を残す。石質は全て安山岩質溶岩である。

剥片（図版31・32・36）

多くが打面または、正面に原石面を残す。剥片の長さ2～7cm、幅2～7cmと、梨子平遺跡に比べ、大型のものが目立つ。打面の形状は、観察可能な資料200点中、原石面を打面とするもの61点、1回の大きな剥離面が打面と推定されるもの35点、複数の剥離面が打面を構成するものが11点存在する。打面が複数の剥離面によって構成されるものの中に、打面調整剥離と思われるものが3点含まれる。その他、打面の残存が極少で、形状を観察できないもの93点を点打面として分類した。石質は全て安山岩質溶岩である。



第43図 出土遺物（石器）

(15)

石鍤（第43図36、図版30）

偏平梢円の標を素材とし、両端へ、正・裏からの剥離を加え凹部を作り出している。石質は砂岩である。

磨石（第43図37～40、図版32）

37～39は偏平な円標の正・裏面に磨り面と思われ平坦面を有する。38は磨り面の状態が良く、かなり明瞭に他の範囲と区別できるが、37・39は叩き潰しによる作り出しとも考えられる。しかし、両者ともかなり平らな面を持つことから、ここでは、磨り面として取り扱う。また、37・38は全周縁に叩き潰しによる加工が施されており、磨り面のほぼ中央には、小さな凹部を正・裏面ともにもつ。37の正面凹部は、複数の小さな凹部の集合体とみられ、他と区別される。40は、特殊磨石で、横断面三角形の標を素材とし、面と面とによって構成される陵線上に磨り面が観察される。石質は41・37・39が砂岩、38・40は安山岩である。

凹石（第43図41、図版32）

偏平な梢円標の正・裏面に、それぞれ2ヶ所の凹部を作り出している。凹部は梢円形を呈する。石質は、砂岩である。

叩き石

長・幅11cm・厚さ0.7cmほどの偏平な円標を利用し、ほぼ全周縁にわたって、叩き潰れ様の痕跡がみられる。叩き潰しの部位は38と近似するが、磨り部は観察されず、磨り石とは区別した。石質は、安山岩である。

穂石（第43図42・43、図版32）

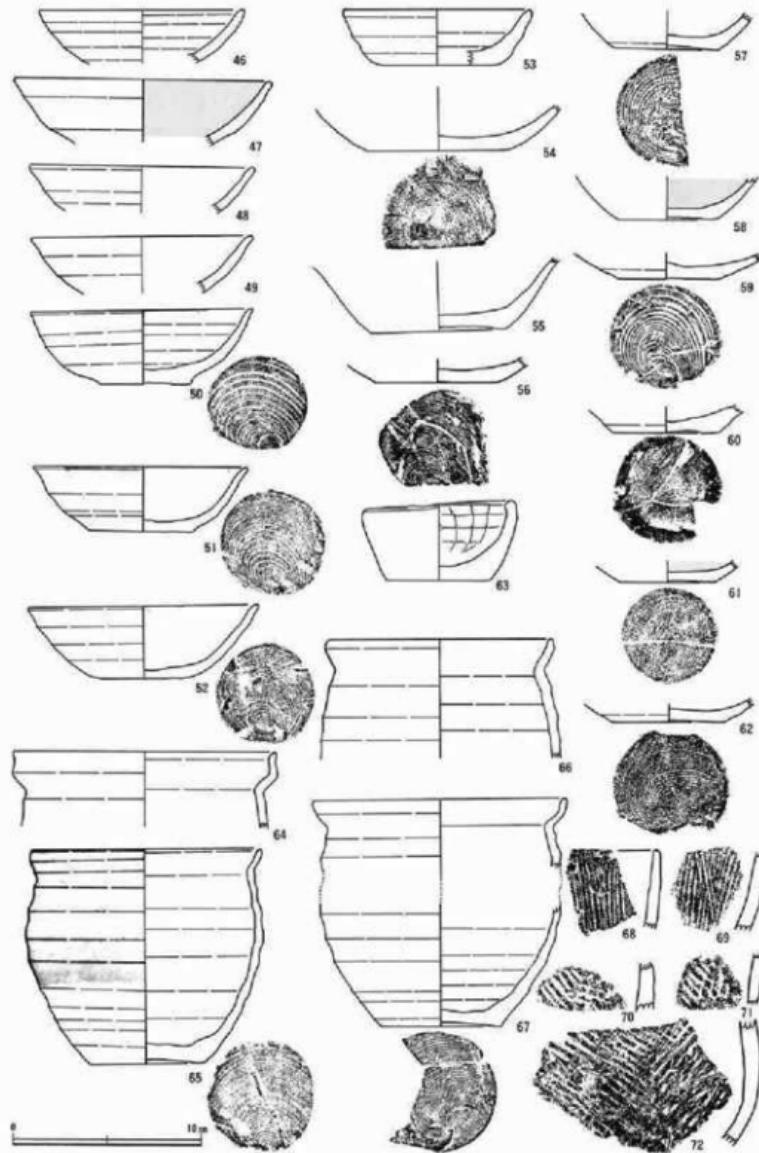
42は直方体の泥岩を利用し、平坦面の一部に磨り面を有する。その中の擦痕は縱位方向に観察される。43は一方の側面に、素材切り出し時の工具痕がみられ、正・裏面に磨り面を有する。石質は粘板岩である。

円標（図版32～44・図版33～45）

大きさは梨子平遺跡とほぼ同数値を示すが、ばらつきは少なく、長さ10cm、幅8cmほどのものに集中する傾向がある。44は唯一火の影響を受けた資料で、赤化し、ヒビ割れている。石質は砂岩である。他の石質は石英粗面岩が全体の40%を占め、安山岩、礫岩、砂岩、流紋岩がこれにつづく。

原石（図版33～46）

自然破碎した角標である。梨子平遺跡同様、小型のものの比率が高い。



第44図 出土遺物(土師器)



第45図 出土遺物（Yamatai器・製塩土器）

2) 平安時代の遺物 (第44~45図、図版34~35)

土師器、須恵器の他に製塙土器、吹子の羽口があり、須恵器の出土量は土師器に比して極めて少ない。土師器は東側の平坦部の遺構内から、須恵器・製塙土器は西側の斜面から出土している。特に須恵器はそれぞれの破片が単発的に出土し、器形全体を窺えるものはほとんどない。

土師器 (第44図46~72、図版34~35) 杯・甕・手捏土器の三種あり、杯類が多い。

杯 (46~62) 体部はいずれもロクロナデ調整である。体部の立ち上りから内縁気味のもの (46~54・56~59・61・62) と外反気のもの (55・60) がある。底部の切り離しは55をのぞいて回転系切で、60は回転系切の後に底部周縁をナデしている。55の底部は二次的にヘラナデされている。47・58・61の内面は黒色処理され、棒状工具で磨かれている。50・51の口縁部には黒色の付着物がついている。いずれも胎土に細砂が混入され、黄褐色をし焼成堅緻である。

なお、53は形態的には須恵器であるが、焼上り等から土師器の範疇に入れた。

手捏土器 (60) 器形全体が直んでいる。外面はナデ調整、内面には指痕痕が残っている。底部はヘラ調整されている。胎土は緻密で焼成は堅緻である。

甕 (64~72) 頭部がくびれる一群 (64~67) とくびれないもの (68~69) がある。64~67は中形の甕で内外面ともロクロナデ調整で、底部の切離しは回転系切である。64は口縁が折曲して内傾し、66はつまみあげによって口縁端部に面がある。68・69はずん胴の甕で外面には刷毛目、内面はナデ調整されている。65・66の口縁内外面には煤が付着している。70~72は胴部片で外面には平行叩目、内面はナデ調整されている。

須恵器 (第45図78~82、図版34) 杯・長頭壺・甕の三種がある。

杯 (78~76) 高台のないもの (74・75) と高台付のもの (76) がある。いずれも体部はロクロナデ調整である。底部の切り離しは前者が回転系切り、後者がヘラ切りである。

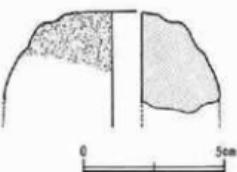
長頭壺 (77~79) 77が口頭部、78・79は体部で同一個体である。いずれもロクロナデ調整である。78は肩部に近い破片で横走する沈線の上に浅くて太い刻目がある。

甕 (80~82) 80は口縁部、81~82は胴部片で、内外面に叩目がある。

製塙土器 (84~88) 深鉢型土器で底部は平底になるものと思われる。外面には粘土帶の接合痕が見られる。85の内面はナデ調整されている。胎土に砂粒や小石が混入されている。第2次的な火を受け硬質である。88は焼上りが同質であるが用途等は不明である。

羽口 (第46図) 直径7.5cmの大形羽口で、直径2cmの孔が中央に穿たれている。先端部には厚くガラス状の溶解物が付着している。

この他に図版35~39の近世摺鉢片がある。内外面に鉄軸がかけられ、内面には11条1束の摺目が施されている。



第46図 出土遺物（羽口）

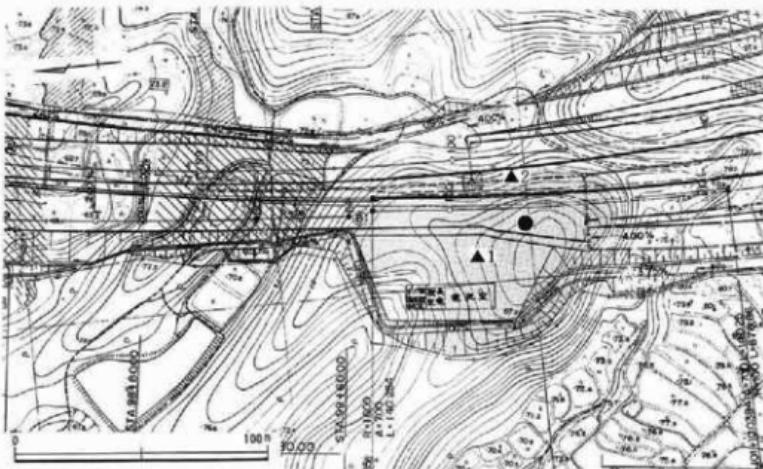
8. カナクソ谷遺跡

1. 遺跡の立地 (第47図、図版36・37)

本遺跡は海岸段丘崖からの直線距離で南へ約500m入った西頭城山地の山麓に位置し、北東方向にのびる小丘陵の尾根上にある。標高は81~95mを測る。北側には段丘面が広がり、東側及び西側には開析谷があり、谷はいずれも北に開口している。丘陵尾根は西側から東へと順次高度を下げ、馬の背状になっている。調査当初、本地点の南側丘陵も「カナクソ谷」と呼称されていることから、製鉄関係の遺跡の存在が想定された。

2. 調査の経過

昭和58年8月の範囲確認調査の結果にもとづいて試掘トレンチを設定した。試掘トレンチは昭58年の範囲確認調査の際にあけたトレンチとトレンチの間をぬうように、地形の傾斜面に沿って幅4mのトレンチを合計6本設定した。表土から地山面までは約10cm~15cmで赤褐色粘質土となる。遺物包含層は全くなく、遺構も検出されなかった。しかし、縄文時代の土器や石器が一ヶ所にまとまって検出され、その範囲は4m四方を測る。位置的には標高約89mの調査対象地最高地点である。これ以外の所からは遺物は全く発見されず、遺物はある程度限定された範囲からしか検出されず、普遍的な縄文時代とは性格を異にするものと思われた。また、本地点の南側丘陵部については、製鉄遺跡が存在していると考えられていたため、雑木伐採後地



第47図 調査対象範囲 (●遺物出土地点、▲炭焼窯)

形を加味して任意の場所に試掘溝を入れたが製鉄跡と証明されるような遺構は全く検出されなかった。

調査は8月8日に着手し8月25日に終了した。

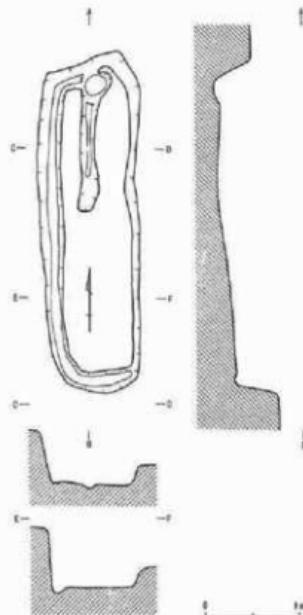
3. 土 層

基本層序は第1層が暗褐色土、第2層が地山の赤褐色粘質土となり、第1層の厚さは10cm~15cmを測るにすぎない。遺物包含層は存在していない。遺物は第1層に混入して出土しているが、その範囲は狭小で限定されている。各層ともに後世の擾乱はあまり受けていない。

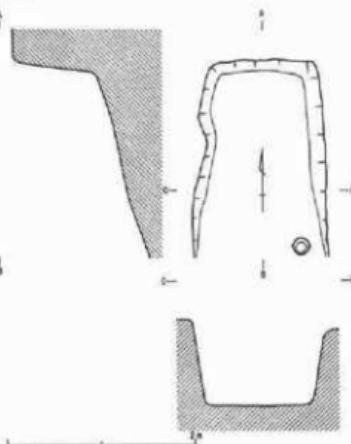
4. 遺 構 (第48・49図、図版27)

検出された遺構は近現代の炭焼窯で、いずれも地山の赤褐色粘質土を掘り下げている。1号窯跡は丘頂部の北東斜面、2号窯跡は丘頂部の南東斜面に構築されている(第47図)。周辺および遺構内からは構築年代を示す遺物は1点も出土していない。本窯跡はボイ炭を焼く炭焼窯であるが、地元の人で知る人は全くいなかった。

炭焼窯1 第1層の暗褐色土から掘り込まれたものと思われる。斜面に併行し、主軸は方位には一致している。形状は隅丸長方形を呈し、長辺3.6m、短辺1.05mを測る。壁面の傾斜は北側が他の壁面に対して緩やかである。南壁から東壁にかけての底面には断面U字形の浅い溝がめぐり、底面の北側中央部にある溝に連結している。溝の交点は溝の底面より若干深くなっている。壁面および底面は厚さ2cm弱ほど赤く焼け、硬質となっている。底面はほど平坦で、底面直上には厚さ2~3cmの粉炭層が、その上には材質がわかる程度の大きさの木炭屑が厚さ18~20cmあり、最上層は木炭混入の暗褐色土となっている。半周する周溝は排水および湿気止めの溝と考えられる。



第48図 遺構実測図(炭焼窯1)



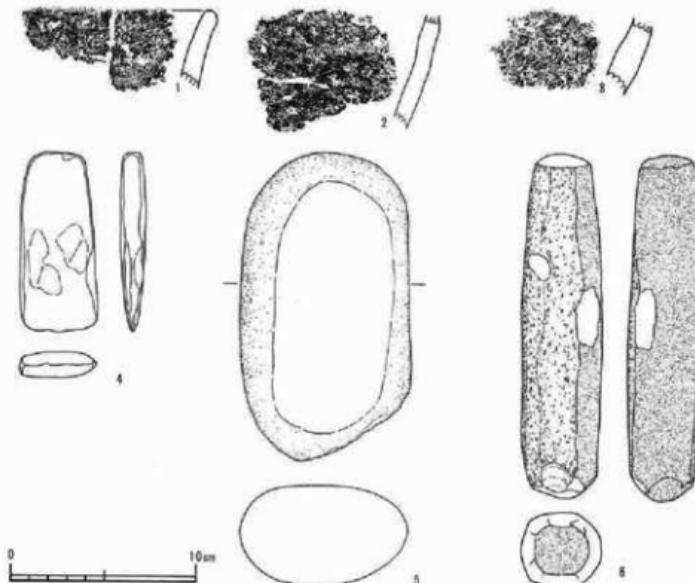
第49図 遺構実測図(炭焼窯2)

炭焼窯2 第1層の暗褐色土から堀り込まれ、南側は板設道路により破壊されている。現長2.1m、幅1.38mを測り、底面は南側へ傾斜している。壁面および底面は厚さ2cmほど赤く焼けている。南側が半分破壊されているため、焚口等は不明であるが、底面が傾斜し、壁面の高さもあることから炭焼窯1とは異なる構造をし、黒炭窯の可能性が強い。

5. 遺物 (第50図、図版43上段)

縄文土器 (1~3) 図示した3片は同一個体で、他に40数片の破片があるが器面が荒れていたため接合は出来なかった。無文土器で胎土に砂が多く含まれている。時期は判然としないが縄文時代中期頃のものであろう。

石器 (4~6) 4は定角式の磨製石斧で、側面は刃部に近づくに従い不明瞭になり、丸味をおびる。石材は蛇紋岩である。5は砂岩製の磨石で、上平面が平滑になっている。6は叩き石で、棒状の礫の両端を使用している。側面の一部は叩き潰しにより円柱状に仕上げられている。石材は安山岩で510gを測る。



第50図 出土遺物 (縄文土器・石器)

9. 東川原遺跡

1. 遺跡の立地 (第51図、図版38)

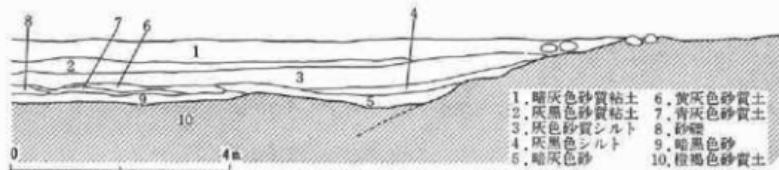
本遺跡は西頬城山地に源を発する名立川の右岸に発達した沖積地に位置している。海岸線から直線的距離で520mをはかり、標高8.5m、名立川の川床としての比高は約4.3mを測る。調査対象地は標高が高く、上越消防署名立分遣所と調査対象地と名立町役場庁舎を結ぶ線上は幅約60cmで弓なりに微高地になっている。調査対象地の東側には幅約30mの低地が微高地に沿って存在し、時代は定かでないが旧名立川の河道と考えられる。本遺跡は現在、名立川の右岸に立地しているが、本来は旧名立川の左岸沖積地の微高地に立地していたといえよう。本遺跡の南西約600mには縄文時代中期から晩期の瓜原遺跡、東側1.3kmの地点には日の入城跡、北東約800mには名立城跡が存在している。

2. 調査の経過

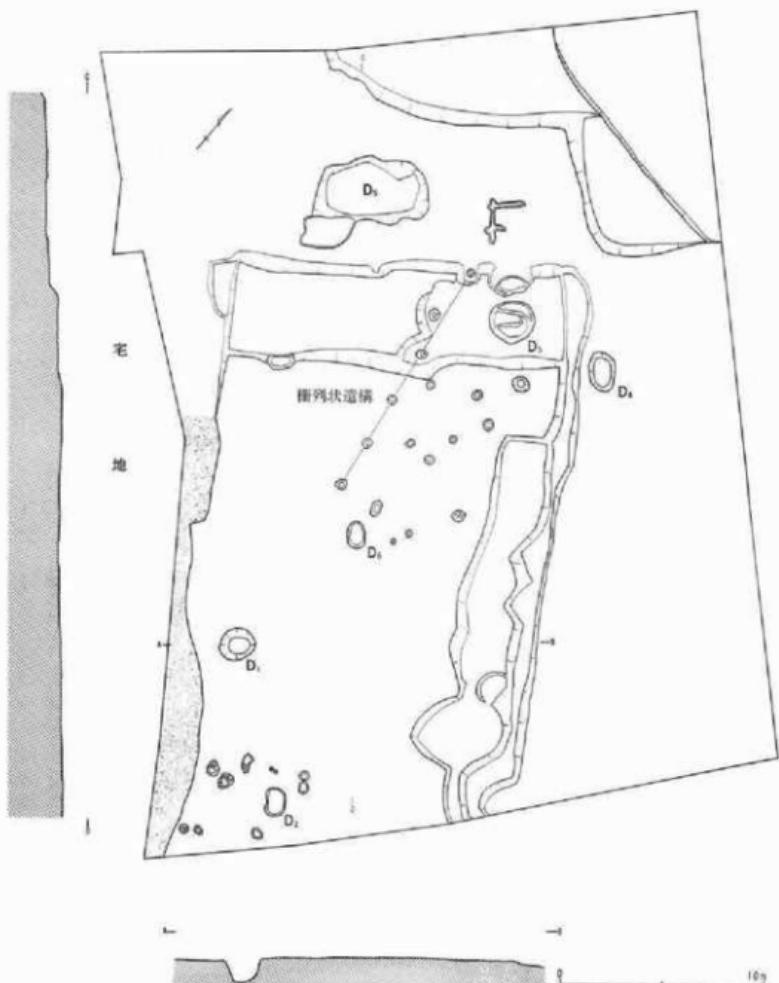
本遺跡は昭和58年の分布調査で新たに発見された遺跡である。水田の畔等には土師器・須恵器の細片が散布し、平安時代の遺跡と考えられていた。調査対象地の西側、工事用道路予定地内およびセンター杭に沿って幅5mのトレーナーを2本とそれに直交するように幅3mのトレーナーを3本設定して遺構・遺物の検出に努めた。畠地と水田部があるため、畠地については人力



第51図 調査対象範囲



第52図 土層断面図



第53図 造構実測図(土壤・根状構造)

で、水田部については部分的に人力で試掘し、遺物包含層が判明した時点で、不用の上面土砂については重機で排土した。工事用道路予定地の試掘により、第52図の土層断面の如く、118.40付近から東側へ地山が傾斜していることが判明した。平坦部では土師器・須恵器などの平安期の遺物と土壤およびピットが検出された。しかし、平坦面についても、地山面が階段状に切られていることが判明した。これは水田部の耕地整理で地山が削平され、水田部を広くした結果によるもので、図版38の下段の如く、段の所には木杭が打込まれ、畔の位置とほぼ一致している。段の周辺部においては青磁・珠洲焼などの中世陶磁器が細片となって中央部の平坦面より多く出土する傾向にある。遺物はいずれも細片で、角が丸まり、磨滅しているものが大半を占めている。恐らく、過去における耕地整理等で混在し、耕作で攪拌されたものであろう。

調査は10月18日に着手し10月29日に終了した。

3. 土 層（第52図）

畠地と水田部の土層があり、畠地では現地表面下20cm弱で地山の赤褐色砂質土となる。層序は耕作土一層のみで暗褐色をしている。遺物は暗褐色土層から平安期のものと中世のものが混在して出土し、遺物包含層というものは全く存在していない。水田部では現地表面下2.5mで青灰色砂質粘土層に達し、上面から耕作土、暗茶色粘土、暗灰黑色粘土、灰色粘質土、青灰色砂質粘土となっている。第1層の耕作土は15~20cm、第2層の暗茶色粘土は40cm前後、第3層の暗灰黑色粘土は70~80cm、第4層は灰色粘土と灰色砂層の互層で約1mの厚さを有し、植物の腐蝕物が混入している。遺物は第3層の暗灰黑色粘土から主に出土している。古代および中世の遺物が存在していて単発的に出土している。第1層、第2層からも遺物が出土しているが、絶対量は少ない。遺構は第3層から検出されていないところから、第3層出土の遺物は耕地整理等で埋込まれた可能性が強い。畠・水田の耕作土からは近世陶磁器が出土している。

4. 遺 構（第53図、図版38・39）

構列状遺構1、土壤5、ピット21が検出された。いずれも地山面と考えられる赤褐色砂質土上面で確認された。遺構の残存状況は、地山面まで非常に浅く、過去における耕地整理等でかなり改変されているため良好ではない。遺物は古代・中世のものが遺構内から出土しているが、その量は少なく、器形を窺えるものは一点も出土していない。

構列状遺構 全長8mを測る遺構である。ピットの長径は大略20~25cm、短径約20cm前後の楕円形で、深さは15~20cmをはかる。柱間は南側3間が0.9~1mで一定しているのに対し、北側1間が2mと長い。柱痕は全くなく、堀方の埋土は暗灰黑色で、土師器の小片を含んでいるものもある。

土壤 5基検出され、形態的には円形・楕円形・隅丸方形の3種に大別される。D₅は長辺5.6m、短辺1.4mを測り、隅丸方形を呈している。内部充満土は暗灰色土一層で、遺物は出土していない。D₁は円形、D₂~D₄は楕円形を呈している。D₂~D₄、D₆の内部充満土は暗灰色

土で、D₃ の最下部には厚さ 5 cm の灰色砂質土がレンズ状に薄く堆積していた。D₁ の内部充満土は上面から炭化物を含む黒褐色土と、灰黑色粘土、最下層は植物の腐敗物の入った灰黑色土でヘドロ状を呈している。土壤内には長径 50 cm 強、短径 40 弱、厚さ 10 cm 前後の偏平な自然石が 2 段ないし 3 段に積まれていた（第 54 図、図版 39 下段）。遺物は D₅ を除いて土師器・須恵器片が出土し、D₄ からは珠洲焼も出土している。

ピット 総計 21 個検出され、南側隅と横列状造構の東側に集中している。形態的には円形と梢円形が主で、中には壁面に段を持っているものもある。直径は 50 cm 前後、深さは 15~20 cm を測るものが多い。内部充満土は横列状造構と同様、暗灰黑色土である。ピット内部から土師器・須恵器の小片が若干出土しているものもあるが、器形を窺えるものは全くない。また、柱痕等は全く見られない。分布などから、建物跡としてはまとまらず、性格は不明といわざるを得ない。

5. 遺 物（第 55・56 図、図版 40・41）

出土した遺物は土師器・須恵器・中世陶磁器・近世陶磁器などの土器類の他に土製紡錘車や石製鉢がある。遺物の大半は旧畠地の耕作土から出土し、造構に伴うものは極めて少ない。遺物は単発的に出土し、土器自体も角が丸まり磨滅しているものが多い。遺物の絶対量は平安時代のものと中世のものが圧倒的に多く、古墳時代のものは極めて少ない。

1) 古墳時代の遺物（第 55 図 1・3・17、図版 40）

土師器と須恵器があり、土師器には高杯、須恵器には翫・蓋などの器種がある。

土師器高杯（第 55 図 1） 高杯の脚部片と考えられ、古墳時代前期の棒状脚と称されるものであろう。器皿は荒れているため調整は不明である。胎土は緻密で焼成は堅緻である。

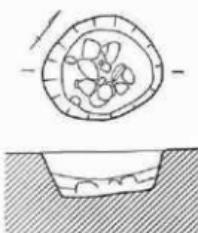
須恵器翫（第 55 図 3） 小型翫の体部片で上下に引かれた横線の間に細かい波状文が施されている。胎土は緻密で暗灰色をし、焼成も堅緻である。器皿には自然釉が湧出し、光沢がある。古墳時代中期後半頃のものであろう。

須恵器蓋（第 55 図 17） 口径 18.8 cm を測り、内面に返りがあり。器皿はヘラ削り、内面は横ナデされている。本遺跡から他に 4 点出土し、古墳時代中期後半のものであろう。

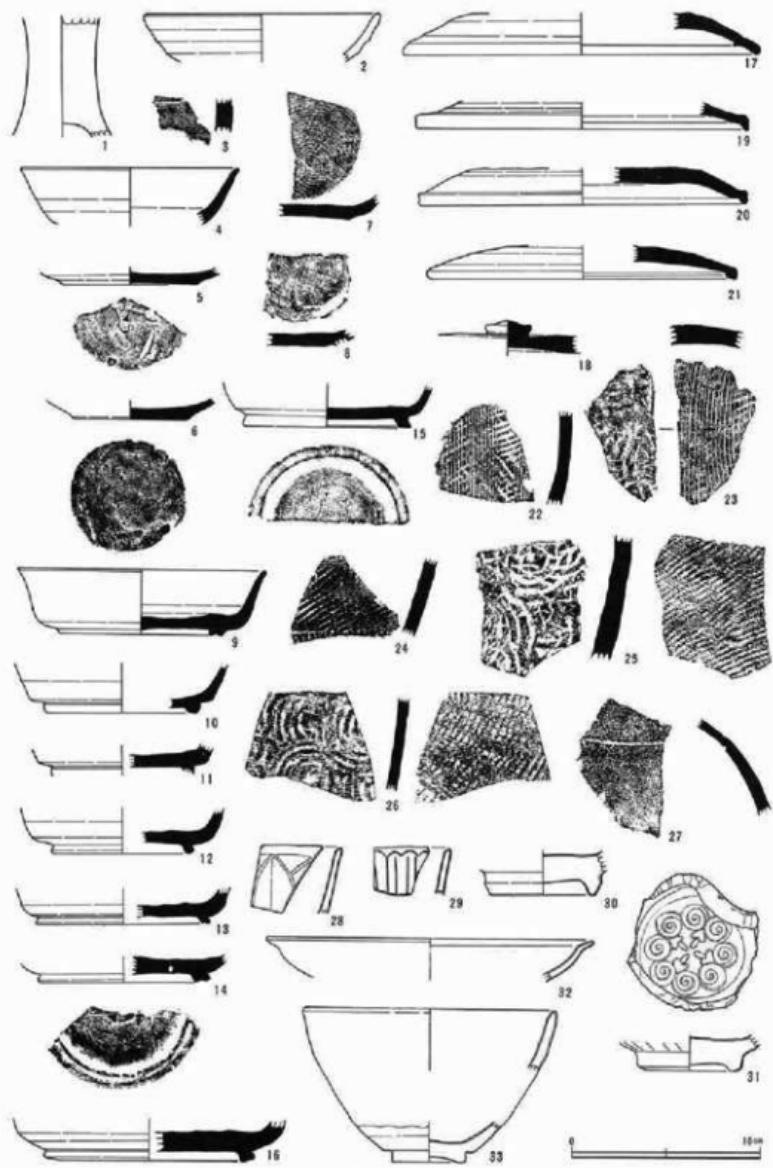
2) 平安時代の遺物（第 55 図 2・4~16・19~27、図版 40）

土師器と須恵器があり、須恵器は器形から杯・高台付杯・蓋・横瓶・長颈壺・壺などがある。

土師器杯（第 55 図 2） 口縁は内唇気味に立ち上り、内外面ともにロクロナナ調整されている。胎土に粗い砂粒が混入され、器皿は全体的に荒れている。



第 54 図 遺構実測図 (1/6)



第55図 出土遺物（須恵器・青磁等）

須恵器杯（第55図4～16） 高台の付くものとつかないものとがある。4は内外面ともにロクロナデ調整されている。5～7は高台の付かない一群で、全体的に薄く仕上げられている。底部の切り離しは回転糸切で二次的調整は全く加えられていない。8～16は高台付の杯である。器形全体は不明であるが、底部からの体部下半の立ち上りは角張っているものが多い。底部の切り離しは回転糸切のもの（8・15）とヘラ切（14）の二者があり、いずれも高台内面はナデ調整されている。8・14の底面には先端部の尖った工具で「×」、「++」が彫刻されている。体部はいずれもロクロナデ調整で2次的調整は加えられていない。

須恵器蓋（第55図18～21） 天井部は回転ヘラ削りで、18には偏平な凝宝珠が付されている。口縁端部は嘴状に引き出されたものも（19・20）と角張ってまるめられているもの（21）がある。胎土には砂粒が混入され、暗灰色をし軟質のものが多い。

須恵器蓋（第55図22～26） 削部片で外面には平行印目とカキ目が付されたもの（22・24・25）と格子目が付けられたもの（26）がある。いずれも内面は同じ同心円文印目である。23は横瓶の端部片で、表面には同心圓状カキ目、内面には同心円印目がある。

須恵器長頸壺（第55図27） 体部上半の肩部片で断面U字形の浅い沈線が横走している。器面は荒れているが、部分的に自然釉が見られる。

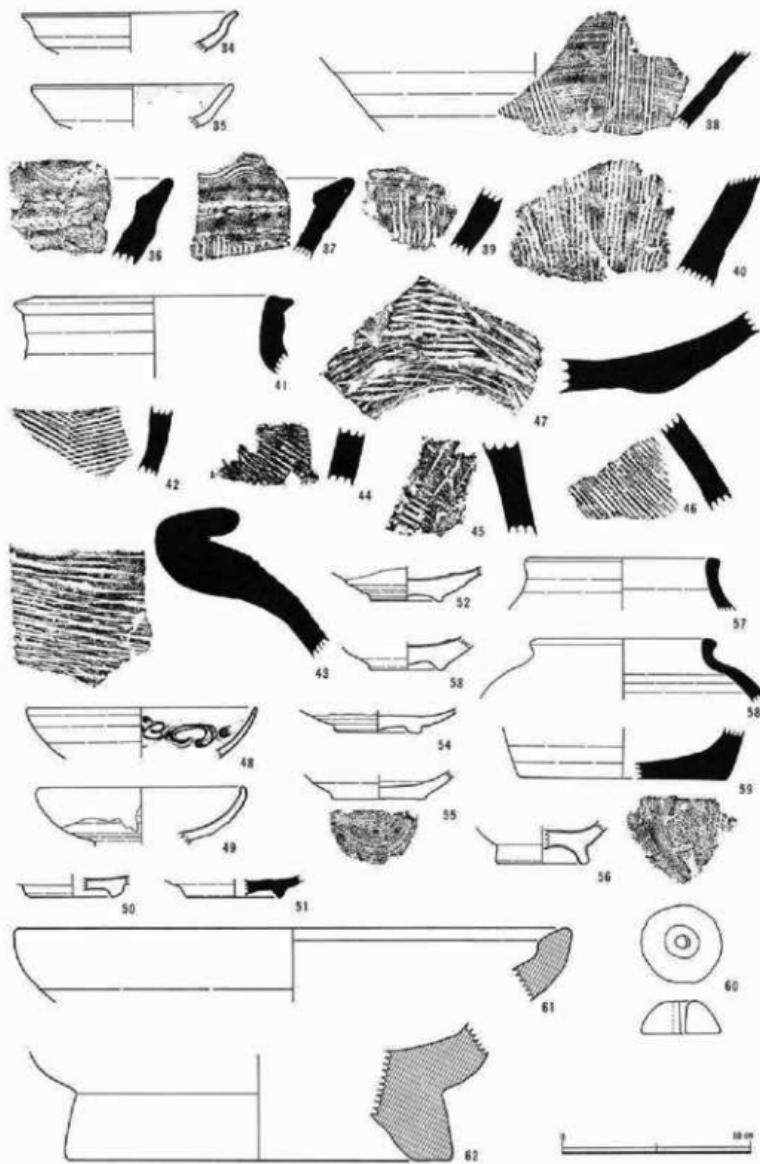
3) 中世の遺物（第55図28～33・第56図34～47、図版40・41）

舶載磁器と日本製陶磁器があり、日本製陶磁器はさらに瀬戸焼・珠洲焼・土師質土器などに細分される。

舶載磁器（第55図28～32） いずれも細片で全体の器形を知ることの出来るものは一点もない。総数は62点を数えるが接合するものは一点もない。28～31は碗形土器である。28は複弁の蓮華文で、磁胎は淡灰色を呈して微細な気泡を含んでいる。青磁釉の色調は翠青色をしている。29の磁胎は白灰色を呈し、青磁釉の色調は黄緑色で貫入が入っている。30・31は底部片で31の内面には渦巻文様等が押印されている。いずれも磁胎暗灰色で黒色の斑点が入っている。青磁釉は30が濃黄緑色、31が翠青色をし、いずれも厚くかけられている。32は段を持つ皿型土器で磁胎は白灰色をし淡青色の青磁釉がかけられている。

瀬戸焼（第55図33・第56図34） 天目茶碗と小皿がある。33は口径13.3cm、推定高8.2cmを測る天目茶碗である。口縁部は内擣気味に立ち上り、釉調は口唇部が茶褐色を呈しているが、体部下半へ下るにつれて茶褐色と黒色が混じり合い黒色が強くなる。体部下半には釉切れが見られ、その下半は露胎している。底部は揚底風で削り出されている。34は黄瀬戸の小皿で、体部中程でくびれ、口縁は外反している。内外面には灰釉がかけられ、貫入がある。

珠洲焼（第56図36～46） 摺鉢、小壺、壺などに分類される。36～40は摺鉢片で、36・37は口縁部である。口縁部には櫛描波状文が付されている。体部外面はロクロナデ調整で内面には摺目が付されている。内面全面に摺目のあるもの（36～40）と摺目と摺目の間に空白部を持つも



第56図 出土遺物（珠洲焼・近世陶磁器等）

の（38）がある。38は15条一束の摺目である。41は壺の口縁部で、口縁端は細く外方に引き出されている。42～47は更で、43は口縁部、47は底部、他は割部片である。外面には条線状叩目、内面には整形時のおさえ痕がある。いずれも暗灰色をし、焼成は堅緻である。36・37・41は室町時代のもので、珠洲焼の龍年V～VI期に属す。38・43は若干年代が古くなるものと考えられ、II～III期位に位置づけされる。

土師質土器（第55図35）　体部下半に棱を持ち、クロナデ調整されている。器面の口縁部および内面には油煙が付着し、灯明皿として利用されたものである。

4) 近世の遺物（第56図48～62、図版41）

伊万里焼、唐津焼、越中瀬戸焼の他に石製臼・土製紡錘車がある。48・54は伊万里焼で、48の内面には濃青色の連続円文が描かれている。54は皿底部で削り出し高台である。内外面には白色釉がかっている。49～53は唐津焼で内外面に濃緑色の釉がかけられ、52～53の内面には胎土目痕がある。56は京焼風の茶碗で内外面に貫入が入っている。55・57～59は越中瀬戸焼で、55は皿、57～59は壺である。鉄釉がかけられ、55・59の底部は回転糸切である。61・62は砂岩製の石臼で、61は茶臼の受部とも考えられる。60は土製紡錘車で、中央に直径0.8cmの孔が上方から穿たれている。60は平安時代、61・62は中世にさか上る可能性がある。

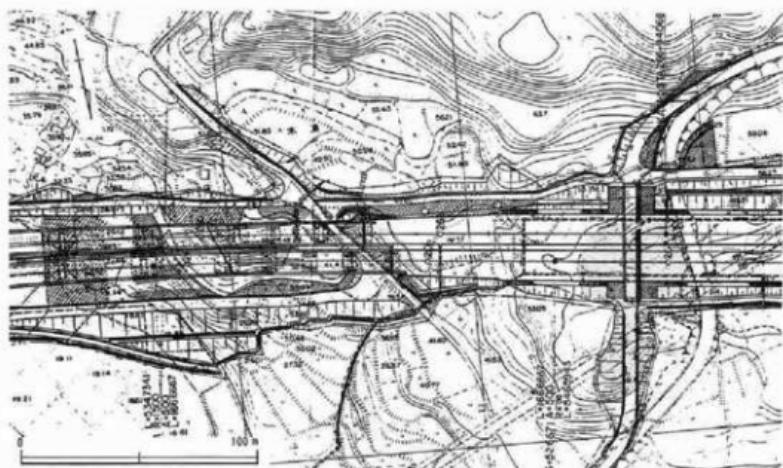
10. 鬼舞II遺跡

1. 遺跡の立地（第57図、図版42）

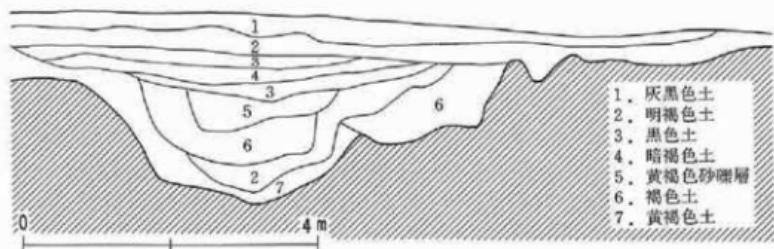
本遺跡には昭和58年の遺跡分布調査の際にフレークが1点採集され、縄文時代の遺跡である可能性が強いという理由で遺跡と判断した。現在、周知の遺跡として登録されている鬼舞遺跡とは地点が異なり鬼舞II遺跡とする。遺跡は木浦川の左岸、標高55～60mの丘陵上に立地し、木浦川によって形成された沖積地との比高は約41mを測る。遺跡の立地について詳細に見ると北東方向にのびる尾根上にあって、尾根の中央部が窪地状になって東側に開口している。当地域の等高線を見ると地すべり地帯の走り方をし、調査の対象地も南側の斜面からすべりおちたものと推定される。

2. 調査の経過

丘陵の尾根に沿って幅3mのトレンチを3本、中央の窪地を直交するように幅3mのトレンチを2本設定した。窪地の土層は埋立てられたものと判明した。窪地を挟んで北側の尾根上では直径1m前後のピットが10個検出されたが、中から遺物は全く出土しなかった。また、南側の尾根の南側斜面でごく限られた範囲の中から縄文土器や石器が出土した。周辺には人為的な遺構は検出されず、金ヶ谷遺跡から出土した遺物の出土状況に極めて近似していると思われた。北側の尾根上で検出されたピット群と南側尾根斜面で検出された土器との関連性は土層観察からも不明であった。調査は10月22日に着手し11月8日に終了した。



第57図 調査対象範囲 (●…遺物出土地点)



第58図 淀地土層断面図

3. 土 層 (第58図)

丘陵頂部の基本的層序は第1層が灰黒色で軟質である。第2層は暗褐色土、第3層は地山の赤褐色粘土である。第1層から第3層までの深度は30cm弱で、各層の厚さは第1層10cm強、第2層が20cm前後を測り、丘陵尾根上では薄く、裾部に行くに従って厚く堆積している。第2層下面から縄文土器や石斧が検出されているが、北側尾根の南側斜面の一部にしかすぎず、第2層がプライマリーな遺物包含層であると断言することはできない。

第58図は丘陵の窪地の土壠断面である。第2層以下は黒色土、暗褐色土、黄褐色土などとなり、レンズ状に堆積している。黒色土は旧表土と思われ、上方の黒色土の上面はほぼ水平に削平されている。その後、第2層・第1層が堆積したものであろう。遺物の出土はない。

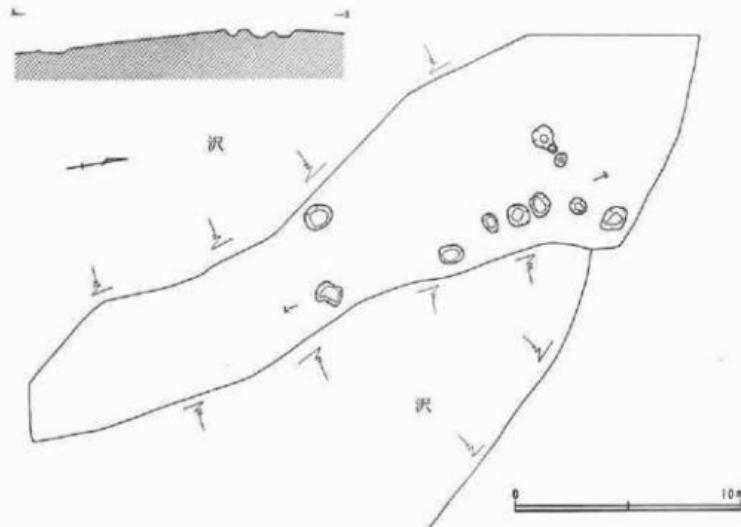
4. 遺構 (第59図、図版42)

検出された遺構は北側丘陵の尾根上に10基の土壠が検出された。ほぼ南北に並び、形態的には円形・楕円形・不整形があり、中には段を持ったものもある。規模は50cmのものと1m前後のものがあり、深さは20cm~30cmを測る。内部の充満土はしまりのない暗褐色土一層で、炭化物も含んでいない。遺物の出土は全くなく、配置等にも規則性はなく性格・時代は不明である。

5. 遺物 (第60図、図版43下段)

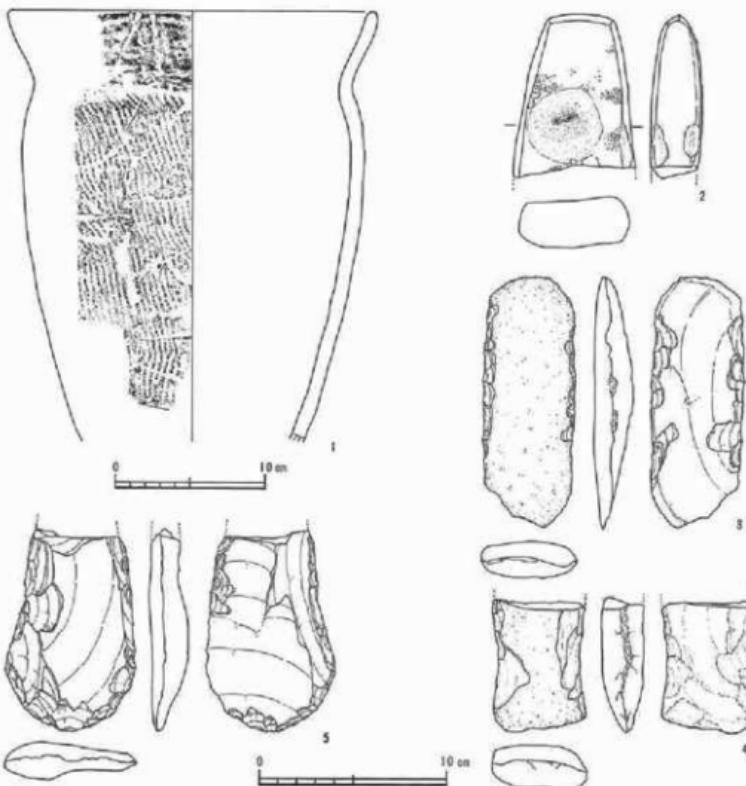
図示した遺物が全てである。これらの遺物は南側尾根の南斜面の限定された地域（範囲4m²）から一括出土したものである。縄文土器は一個体で潰れた状態で検出された。

縄文土器 (第60図) 口径23.5cm、現存高29cmを測る深鉢である。口縁部は無文帯で幅1cm間隔で2条の撚糸が垂直に施されている。頭部は撚糸原体を横に押圧している。その施文間隔は復元した部位を含めて器面を六分割しているものと考えられる。胴部は左撚り2段の縄文原体を斜めに回転し、継ぎの縄文を作り出している。器面の色調は外面が暗褐色、内面が明褐色をし、胎土に砂粒が多く含まれている。胴部上半には煤が付着している。



第59図 遺構実測図 (土壠)

石器（第60図2～5） 石斧が4点出土している。磨製と打製の2種がある。2は定角式磨製石斧で刃部を含む下半を欠失している。頭端部は正・裏面から磨かれ銳角をなしている。表面には研磨作業の前段階を示す剝離と敲打痕がみられる。石材は硬砂岩である。3・4は短柵形打製石斧である。3は片面に原石面を残した横長剥片を素材としている。両側縁の一部には叩き潰し様の痕跡が認められる。刃部は素材の形状をそのまま利用している。4は片面に自然面を残している。刃部は直刃である。基部は欠損しており、両側縁の一部には叩き潰し様の痕跡を残す。石材は安山岩である。5は楔形打製石斧で、基部は欠損している。刃部は円刃で、刃部と側縁部は正・裏面から調整の剝離が加えられている。石材は安山岩である。



第60図 出土遺物（縄文土器・石器）

総括

上越市谷浜地内から糸魚川にかける海岸部には海岸段丘が発達し、数多くの縄文時代の遺跡が段丘面上に立地している。現在までの分布調査や確認調査、発掘調査によると、相対的に表土から地山面までは浅く、遺構・遺物が良好に残存しているものは数少なく、遺物が散発的に採集されるものが多い。今回、調査した10遺跡もこの例にもれず、さらに大規模な地形変更を受けていた。上八平遺跡、梨子平遺跡、川原田遺跡では土壌が検出されたが、いずれも集中しておらず、狹小な範囲内でのみ確認された。遺構そのものも基底面の一部しか残存しておらず、上面すべて削平されている。遺物も大部分が移動し、調査対象地内から散発的に採集されるのみで、原位置は保っていない。これは昭和38年から44年にかけて新潟県が実施した自立農家の育成を目的とした西部パイロット事業によって大規模に地形の改変が行われた結果によるものである。特に、上八平遺跡では各区とも地山の赤褐色土にリッパーの爪跡やブルトーザーのキャタピラ跡が残り、地山面までも削平されている。

このような状況の中で、梨子平遺跡・川原田遺跡は出土土器から縄文時代の中期前葉から中期中葉のものである。遺物量も多いことからこの地域の中核的集落であったと思われる。この二遺跡のほかに東カナクソ谷遺跡では土器の出土量に比して石器等の出土量が極めて多く、安山岩質溶岩製の石核・原石の表皮を残す剥片・河原石等が多く出土している。この事実は、今日まで調査された本地域の該期の遺跡とは趣を異にし、石器製作所的な様相を濃く持っているものと思われる。今後、安山岩質溶岩の露頭などについて調査が進展すれば、これらの遺跡の意義づけが一層明確になり、今後の研究に期待したい。

東カナクソ谷遺跡は、調査途中で新たに発見された遺跡であり、他の遺跡に比して遺構・遺物の残存状態は非常に良好であった。中世後半から近世初頭のものと考えられる寺院跡や縄文時代前期前葉の土壌、平安期の土壌などが検出された。縄文時代前期前葉の遺跡は、県内でも著名な遺跡が数多くあるものの、本遺跡出土の土器とは様相を異にするものが多い。本遺跡出土の土器に類似したものは、最近糸魚川市を含む新潟県西部で発見され、その系統は北陸地方に求められている。縦年の位置づけなど詳細については今後の課題としたい。

東川原遺跡は名立川の沖積地内にある。調査対象地の西側・東側には旧河道があり、少なくとも遺跡の立地としている自然堤防を切って、旧名立河が流れていることが判明した。出土した遺物は、平安時代後期の土器・須恵器の他に中世の陶磁器類がある。平安時代の遺物は松原B遺跡出土の該期の土器と共に、古代の北陸道を考える上で重要なものとなる。

カナクソ谷遺跡、鬼舞Ⅱ遺跡では遺物は極めて少なく、狹小な範囲からしか出土していない。周辺に大規模な遺跡があることから、これらと有機的関連性をもった特殊遺跡と考えられる。



遺跡遠景（北から）



発掘状況（西南から）

（宮ノ平遺跡）

図版2



旧道路（北西から）



炭焼窯



地すべりの
亀裂跡



完掘状況（C区南西から）



完掘状況（B区北東から）

（上八平遺跡）

図版4



完掘状況
(A区西から)



炭焼窯





遺跡遠景（北から）



完掘状況（南から）

（松原B遺跡）

図版 6



畝状遺構

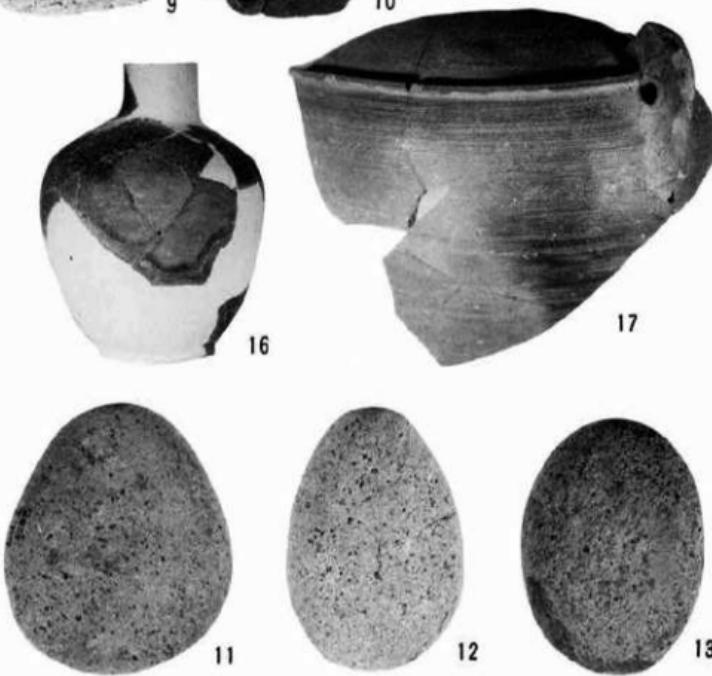
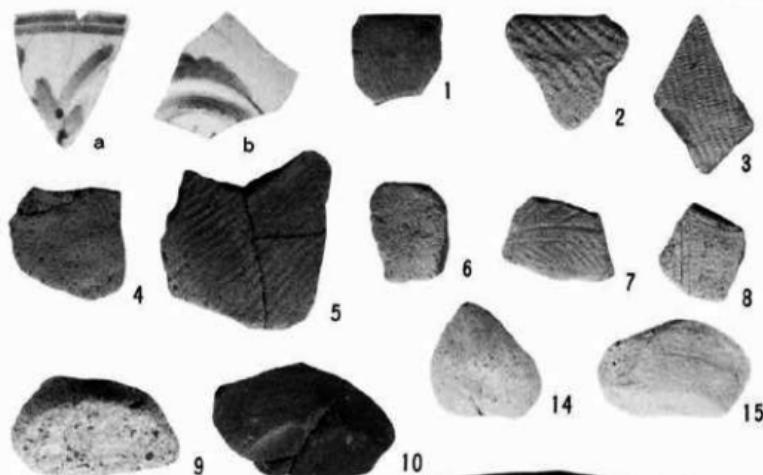


溝



後谷遺跡遠景

図版7



出土遺物（縄文土器・須恵器ほか）a・bは宮ノ平遺跡

図版 8



遺跡遠景（南西から）



実掘状況（北から）

（梨子平遺跡）



土壤



D₁

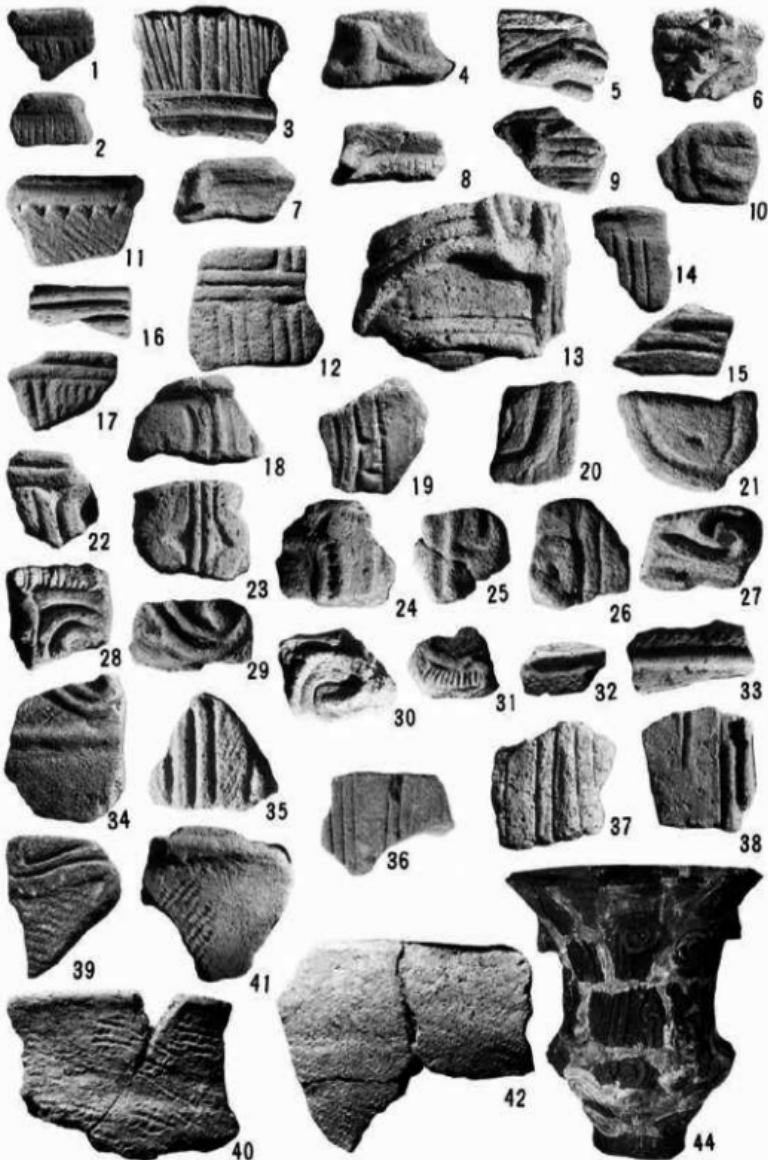


D₂

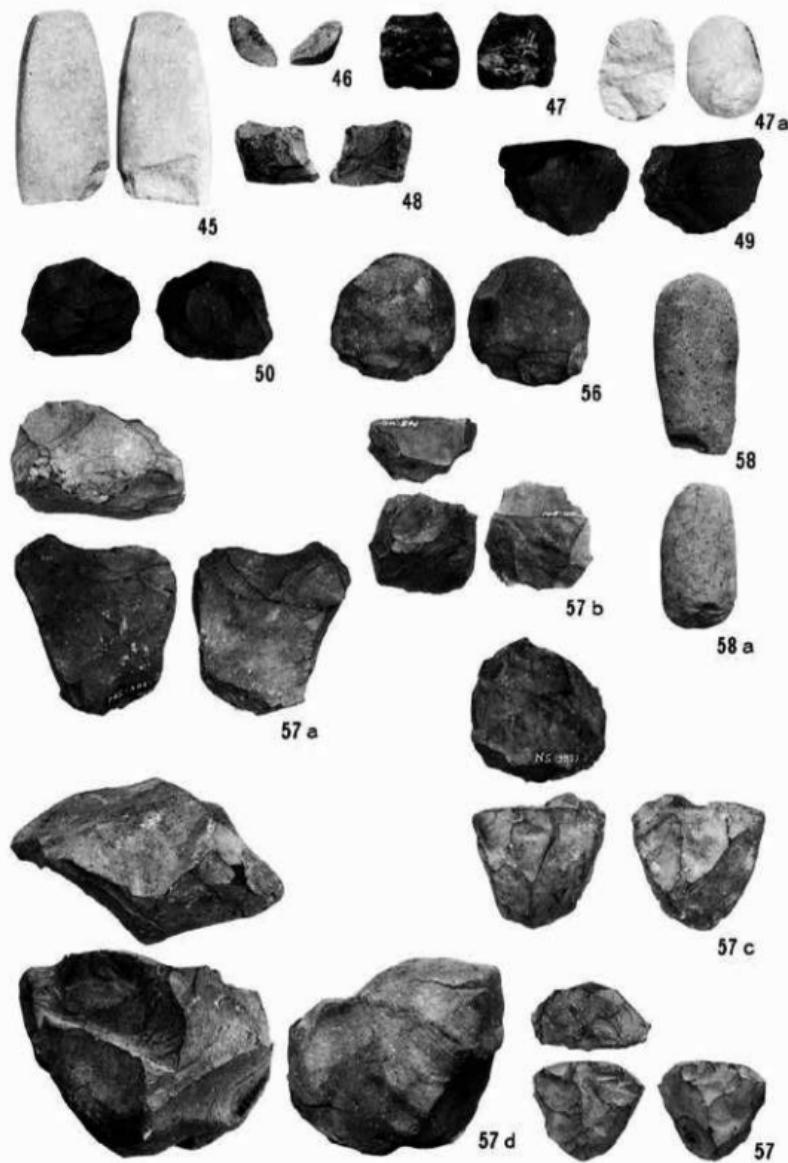


D₁ 土器出土状況

図版10

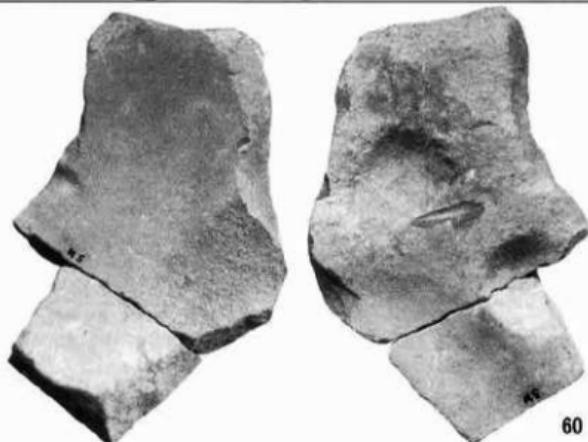
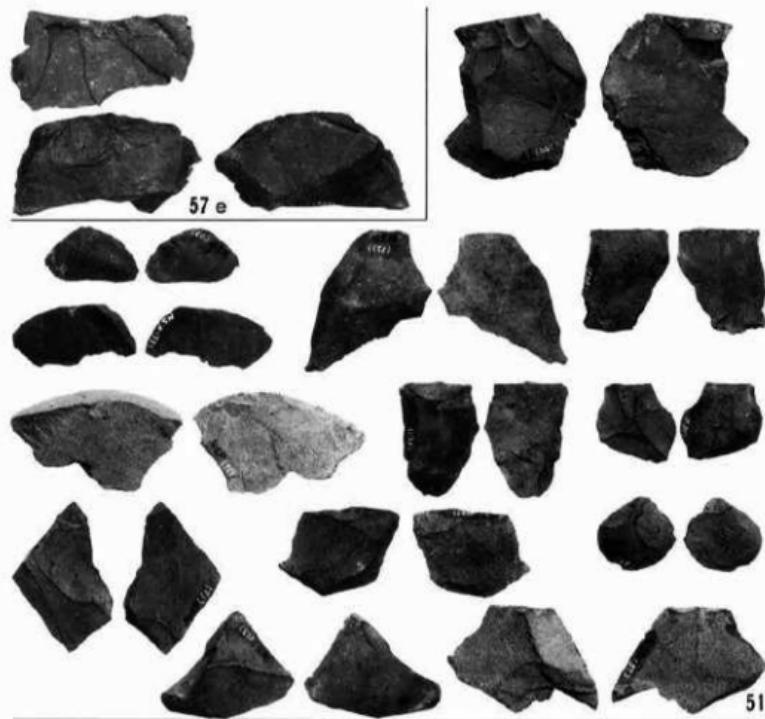


出土遺物（绳文土器）28・29・33・34・36は遺構外他は D ; 出土



出土遺物(石器1)

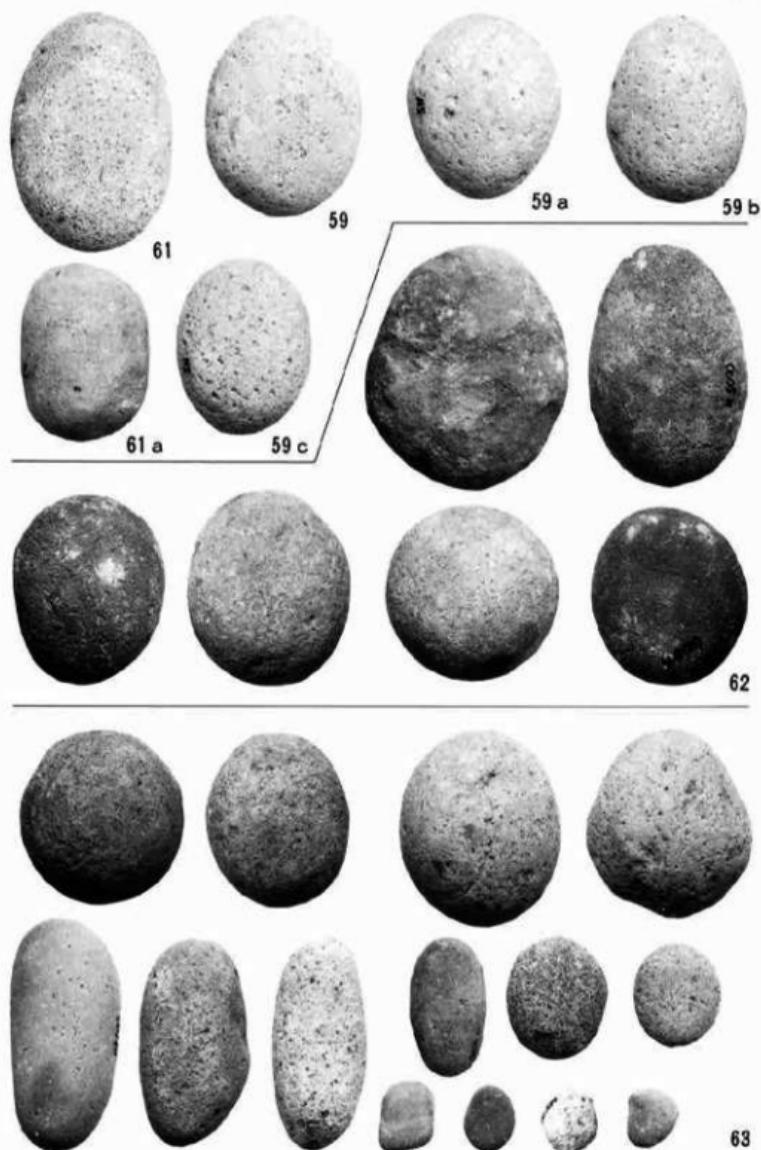
S = 1/2



出土遺物（石器2）

S = 3

図版13



出土遺物（石器3）

S = ½

図版14



遺跡遠景（北から）



完掘状況（北西から）



D7 遺物出土状況

(川原田遺跡)



D₇ 遺物出土状況



D₇ 遺物出土状況



D₇ 遺物出土状況

图版16



D₂ 完掘状况



D₈



D₃



D₆



D₄



D₅



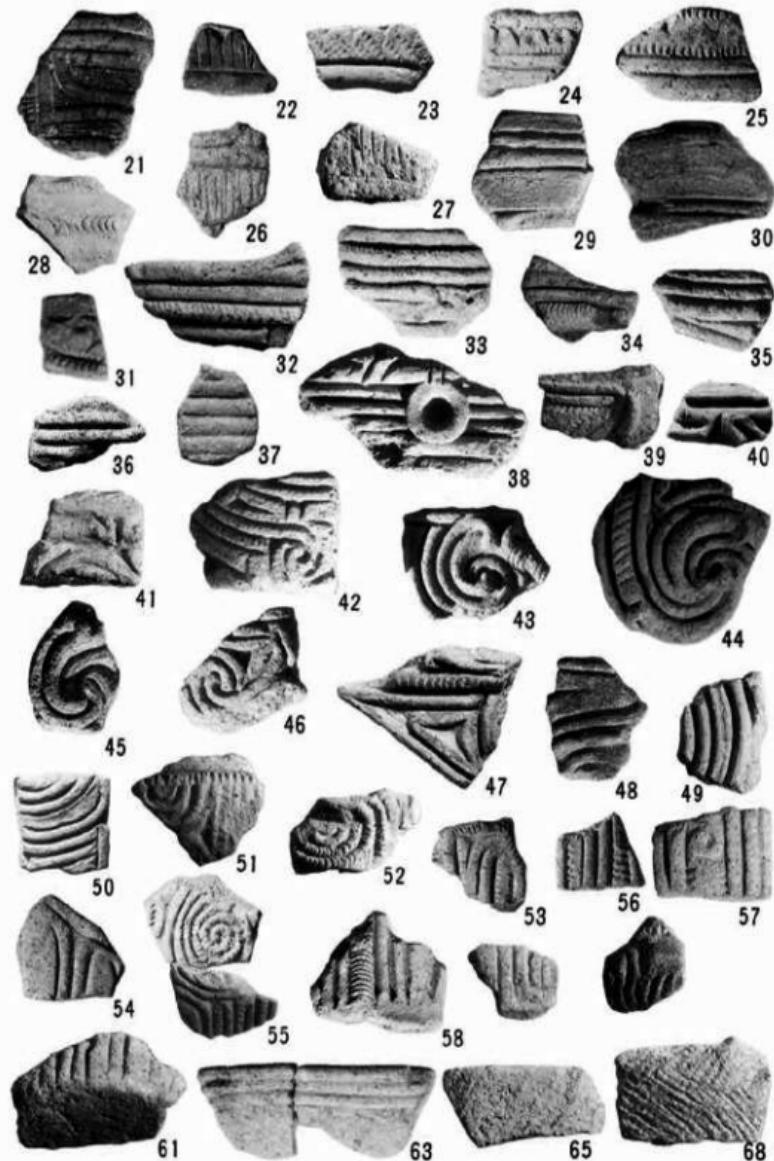
石皿出土状况



出土遺物（縄文土器1）

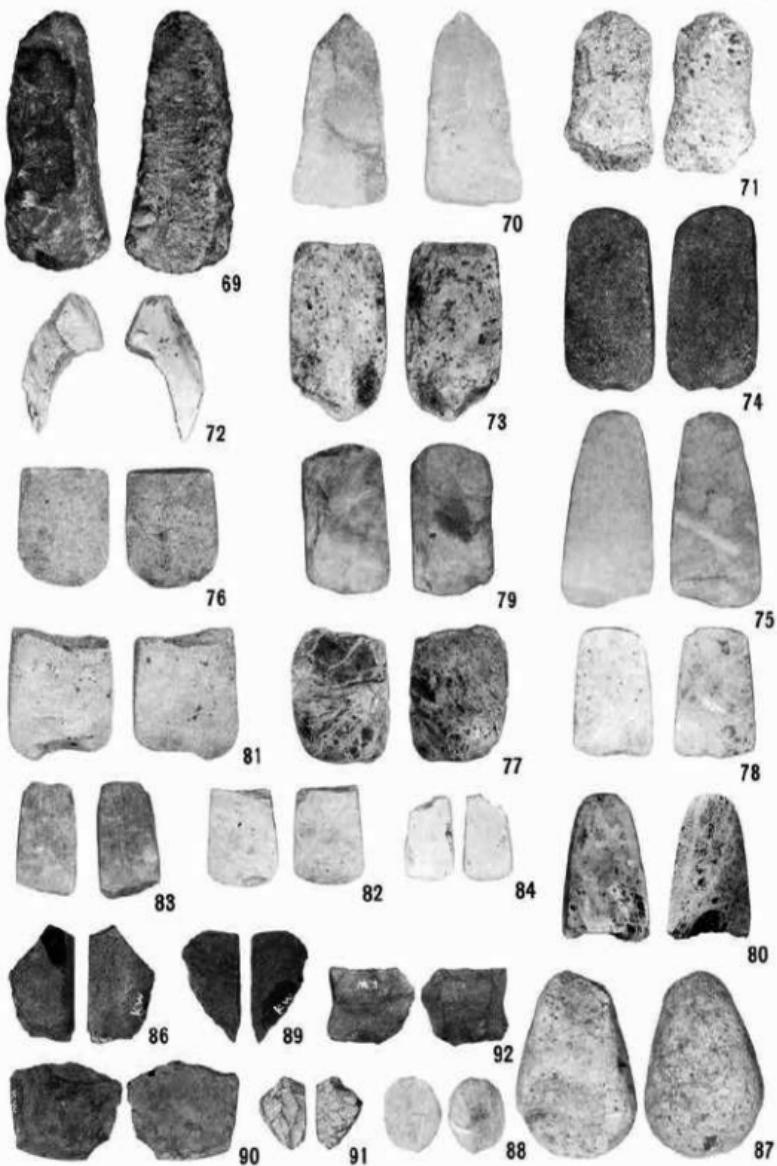
縮尺不同

図版18



出土遺物（縄文土器2）

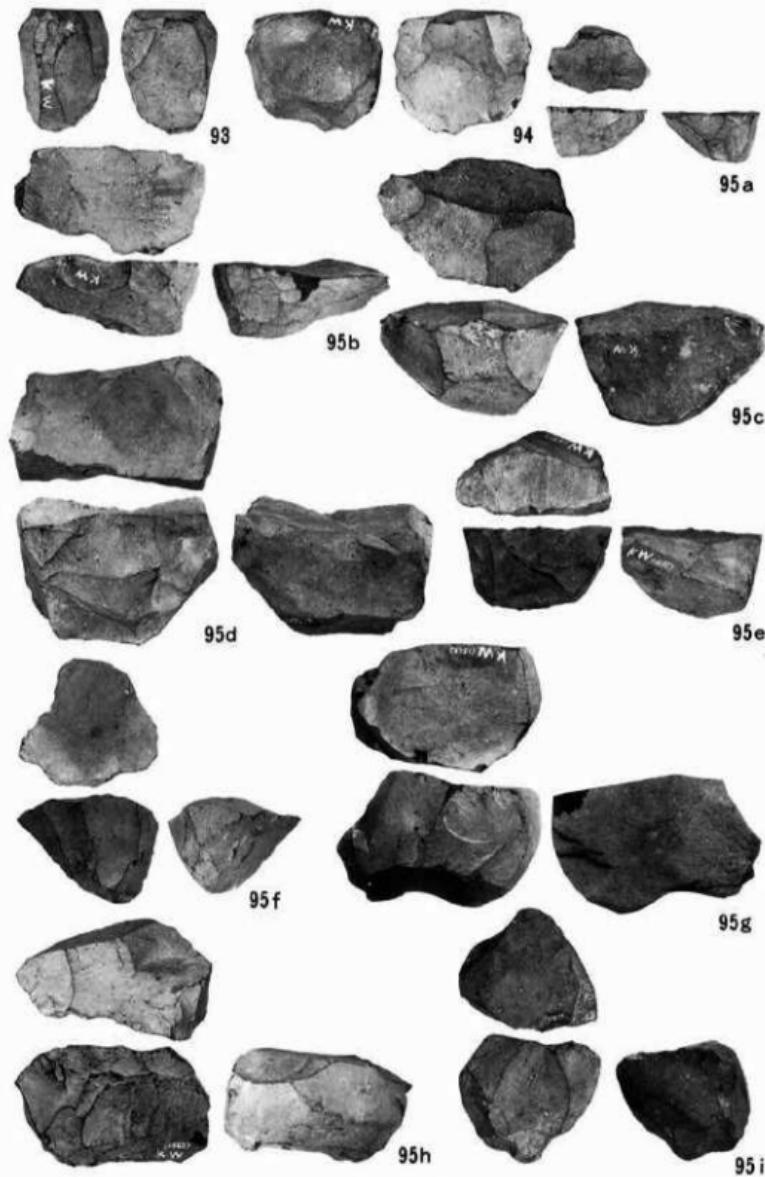
図版19



出土遺物（石器1）

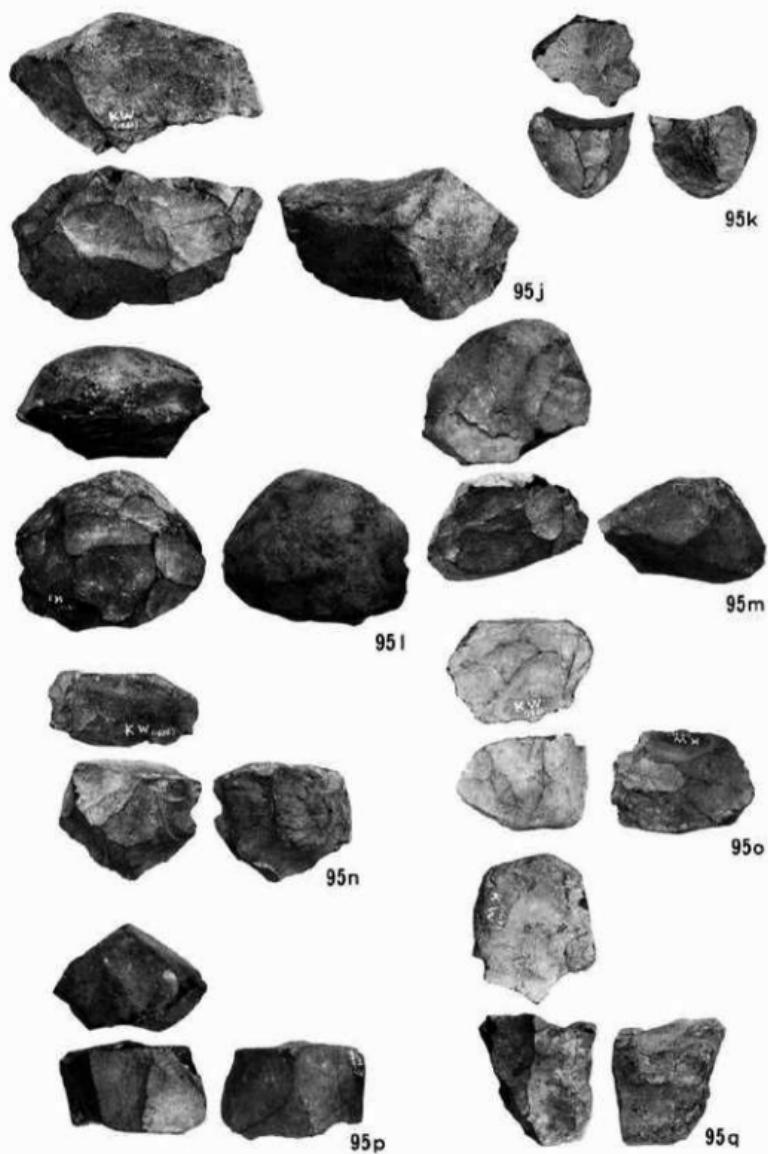
S = 1/2

図版20



出土遺物(石器2)

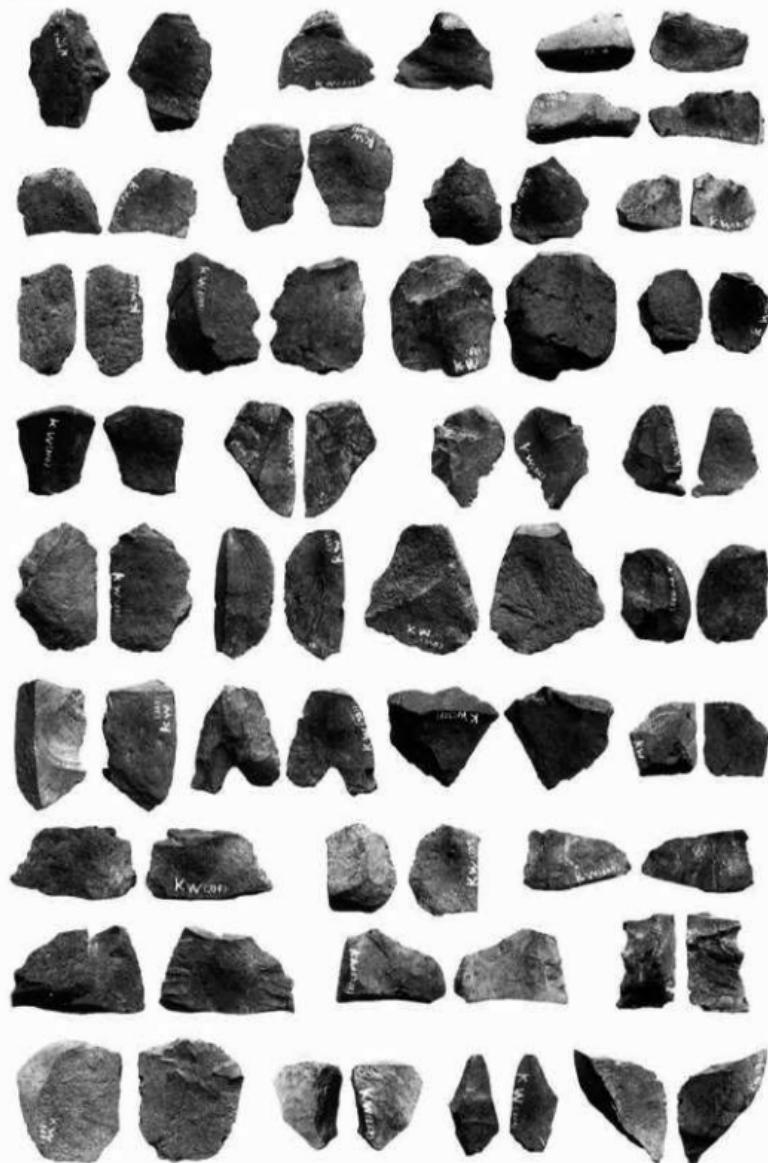
S = 1/8



出土遺物（石器3）

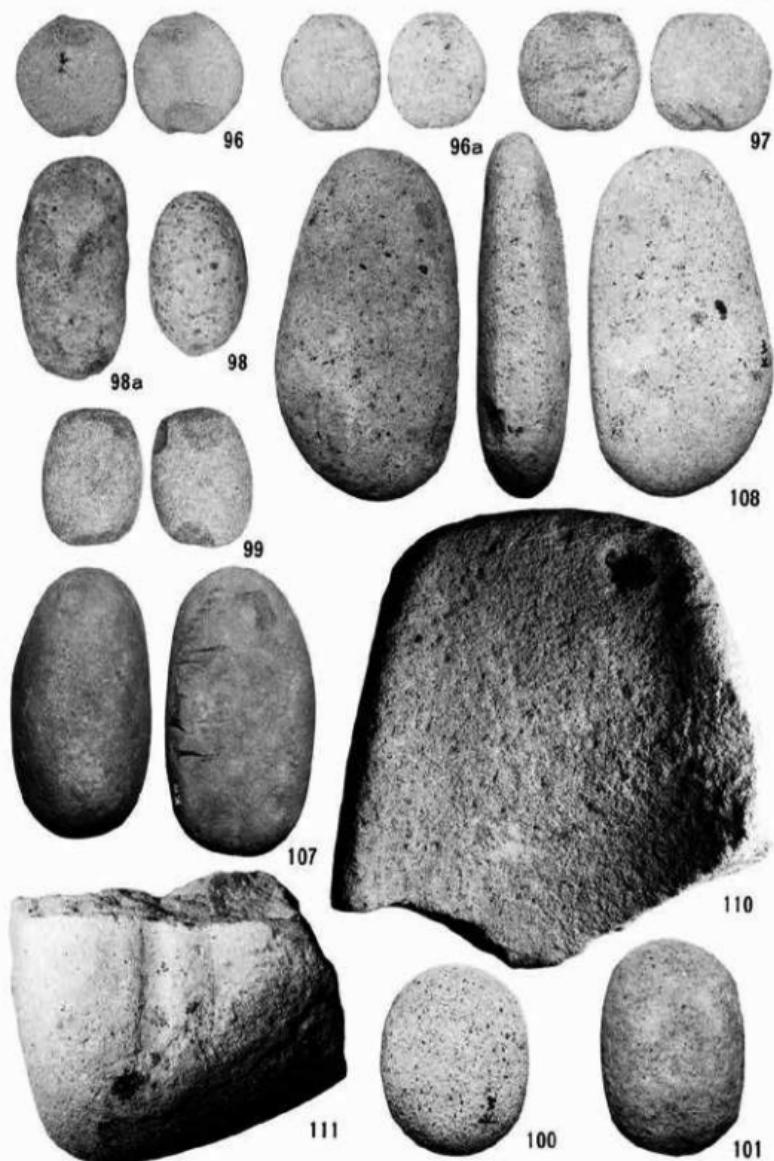
S = 1/2

图版22



出土遺物（石器4）

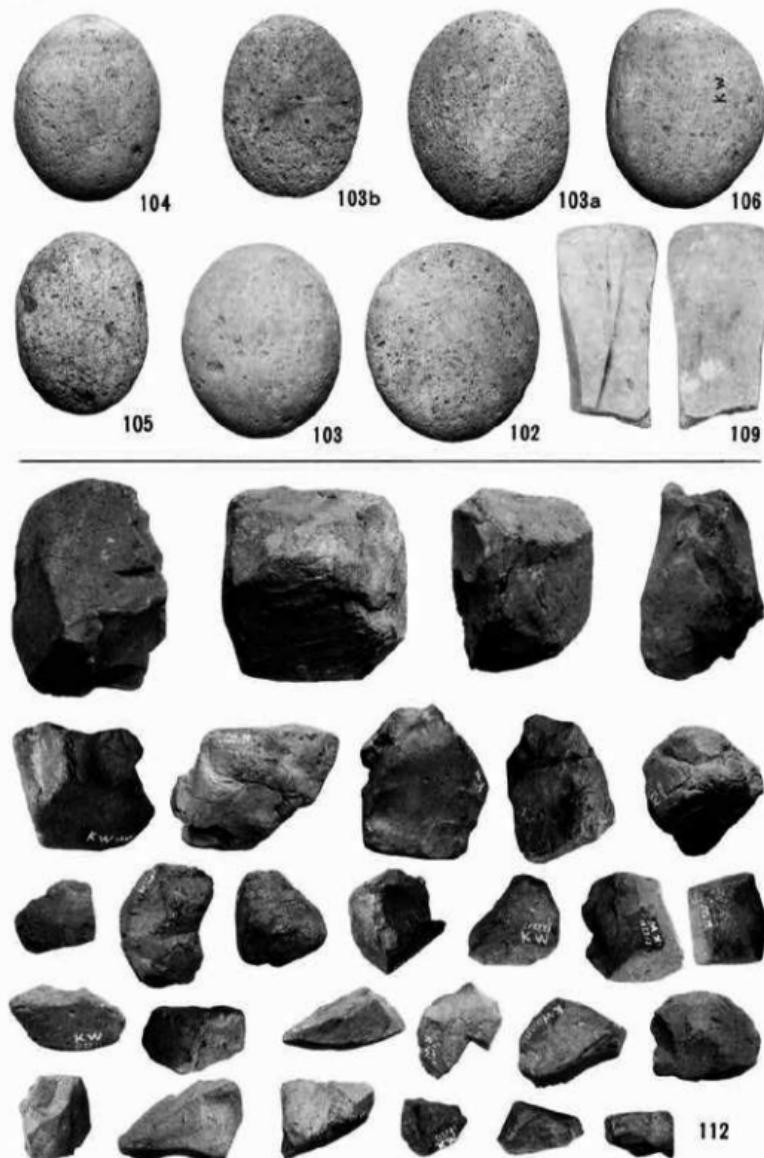
S = 1/4



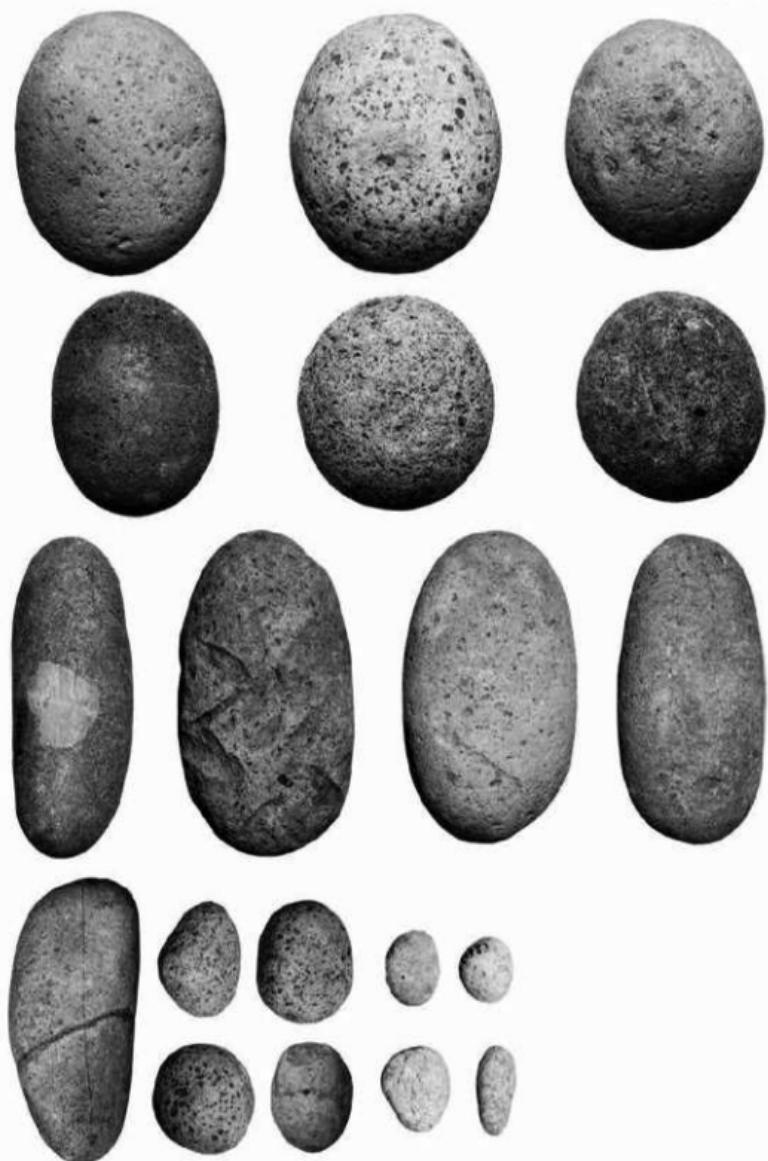
出土遺物(石器5)

S = %

図版24



S = 1/2



出土遺物（石器？）

$S = \frac{1}{2}$



西側斜面遠景（東から）



東側平坦面遠景（東から）

（東カナクソ谷遺跡）



東側平坦面近景（南から）



遺構（土壤）



土壤 2



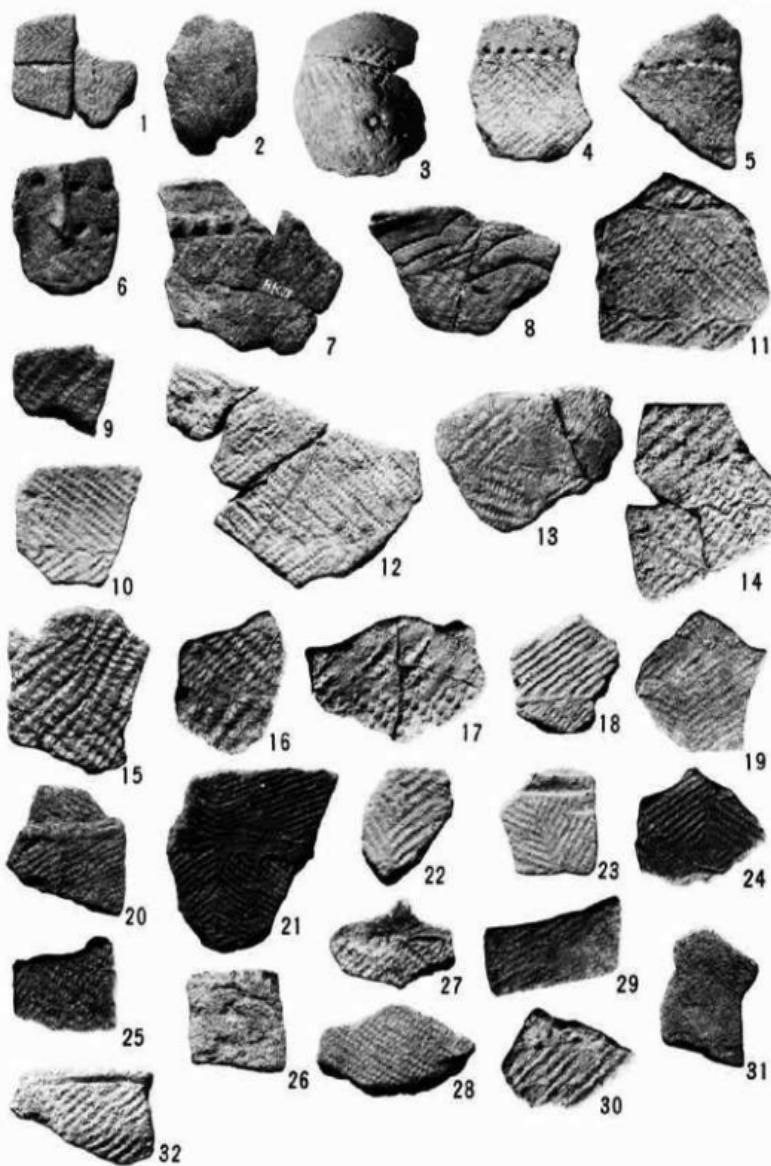
遺物出土狀況



土壤 2

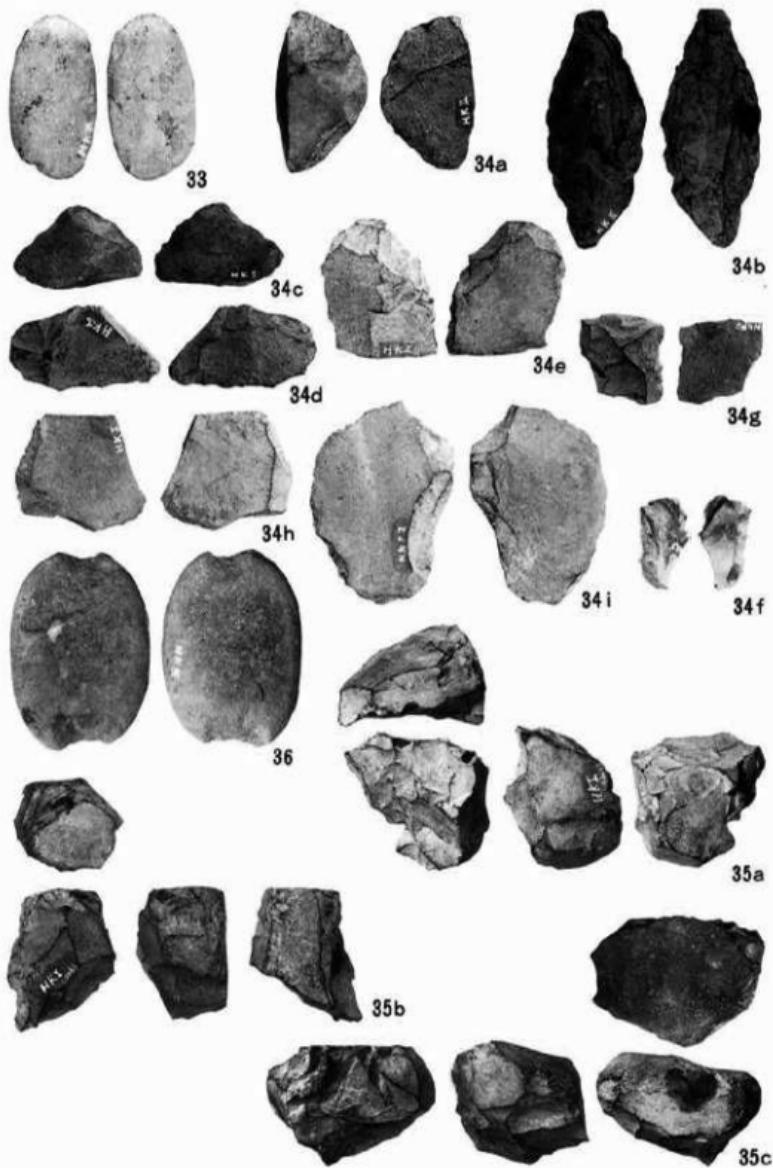


炭燒窯



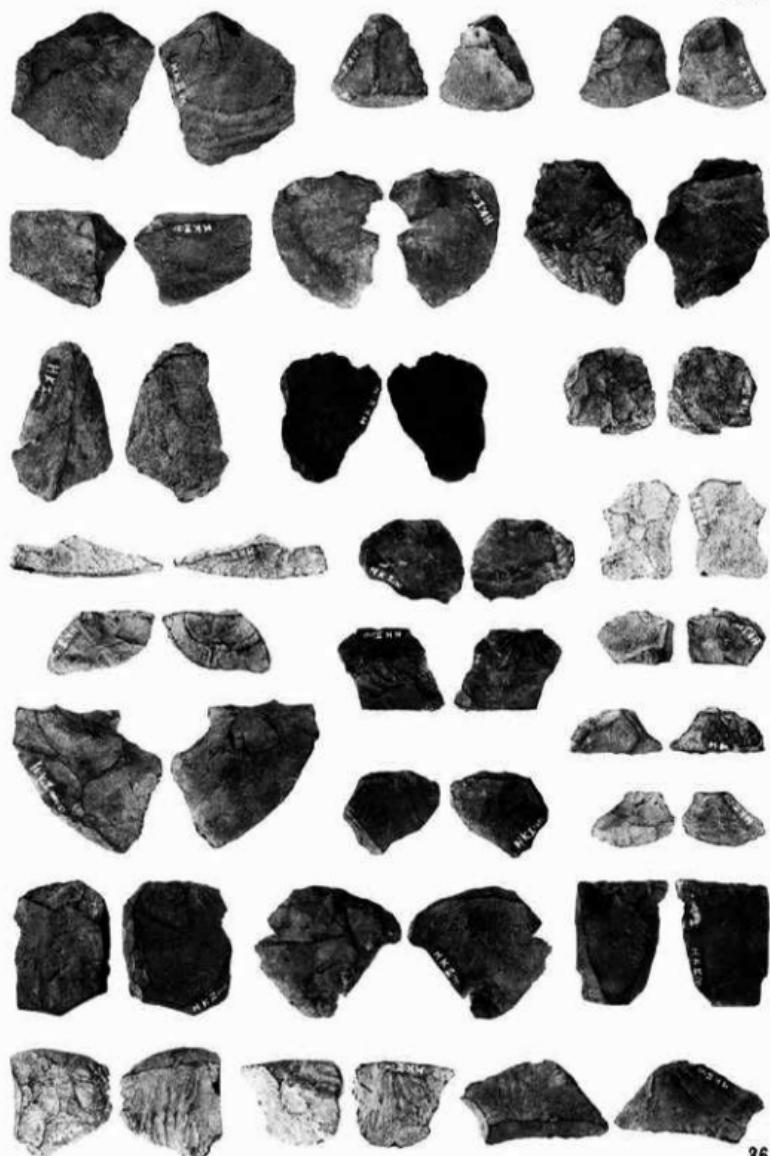
出土遺物（縄文土器）

圖版30



出土遺物(石器 1)

S = 1/2

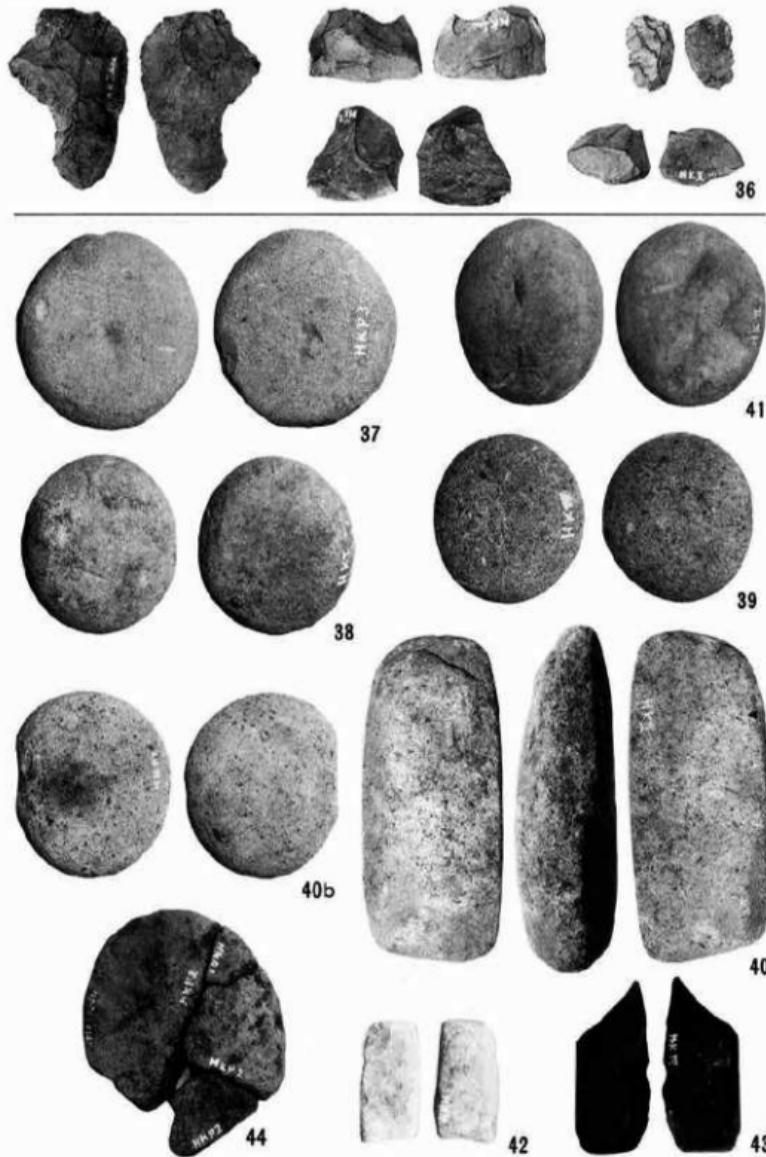


36

出土遺物(石器2)

S = 1/2

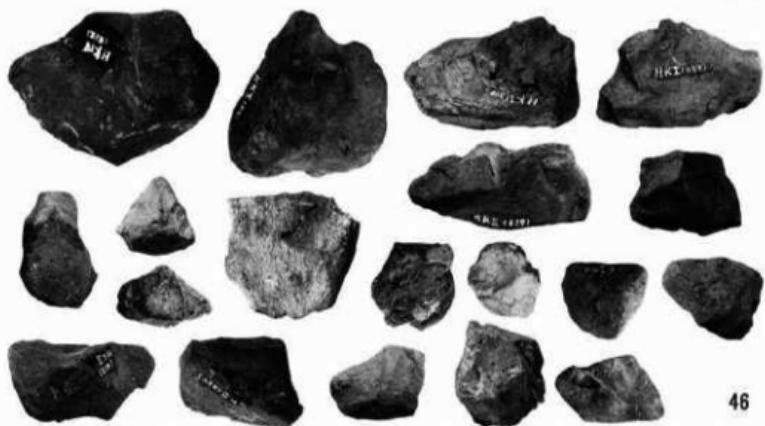
图版32



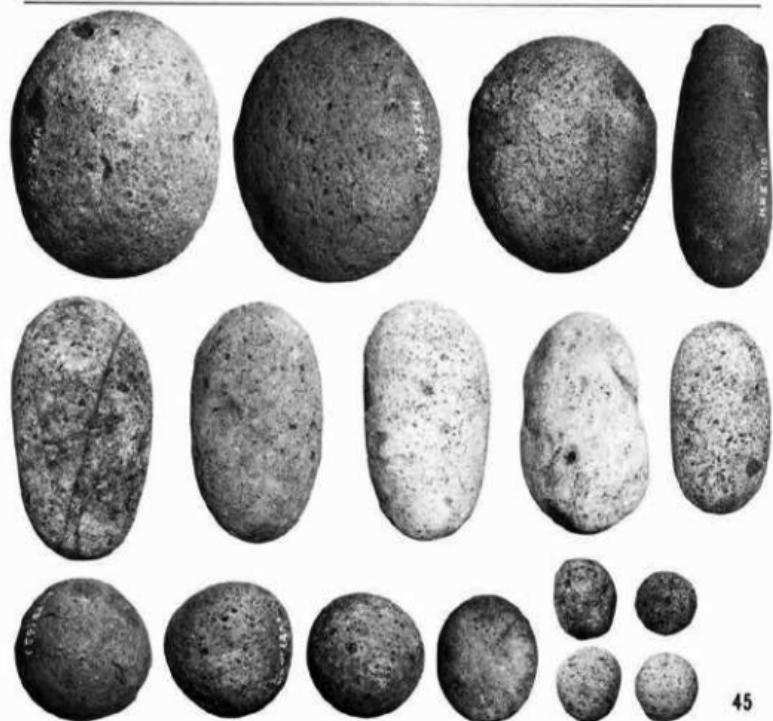
出土遗物（石器3）

S = 1/2

圖版33



46

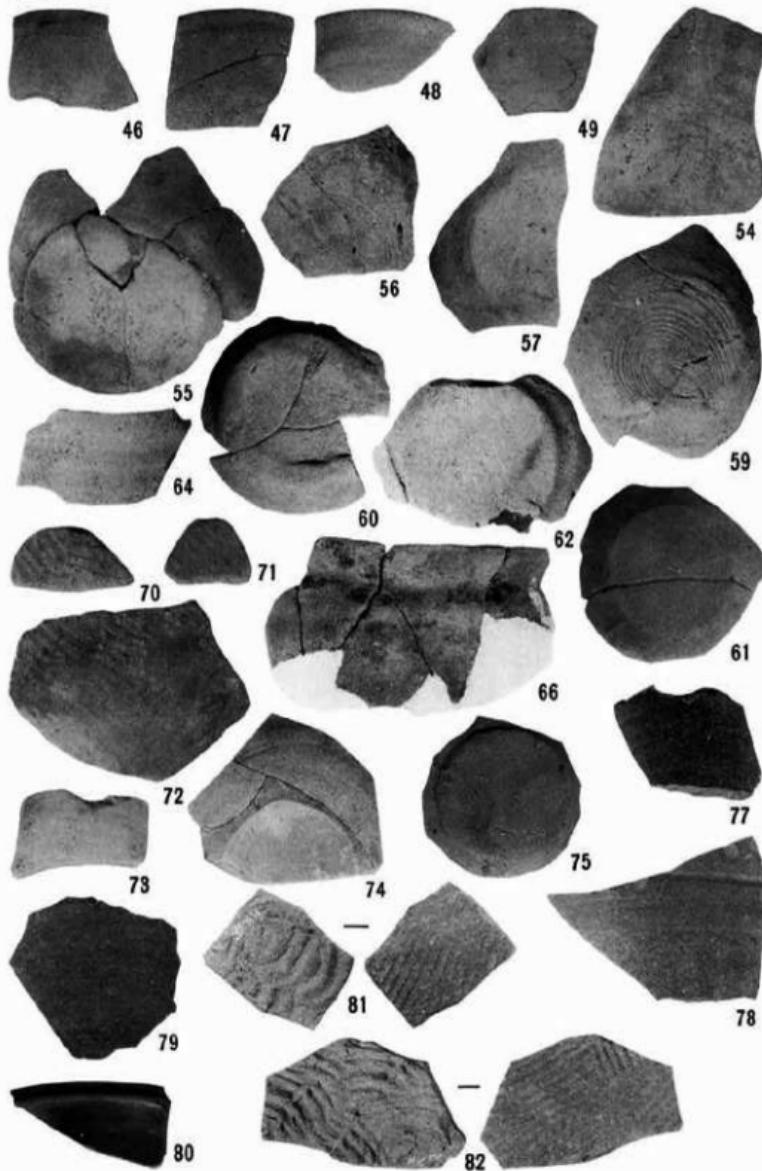


45

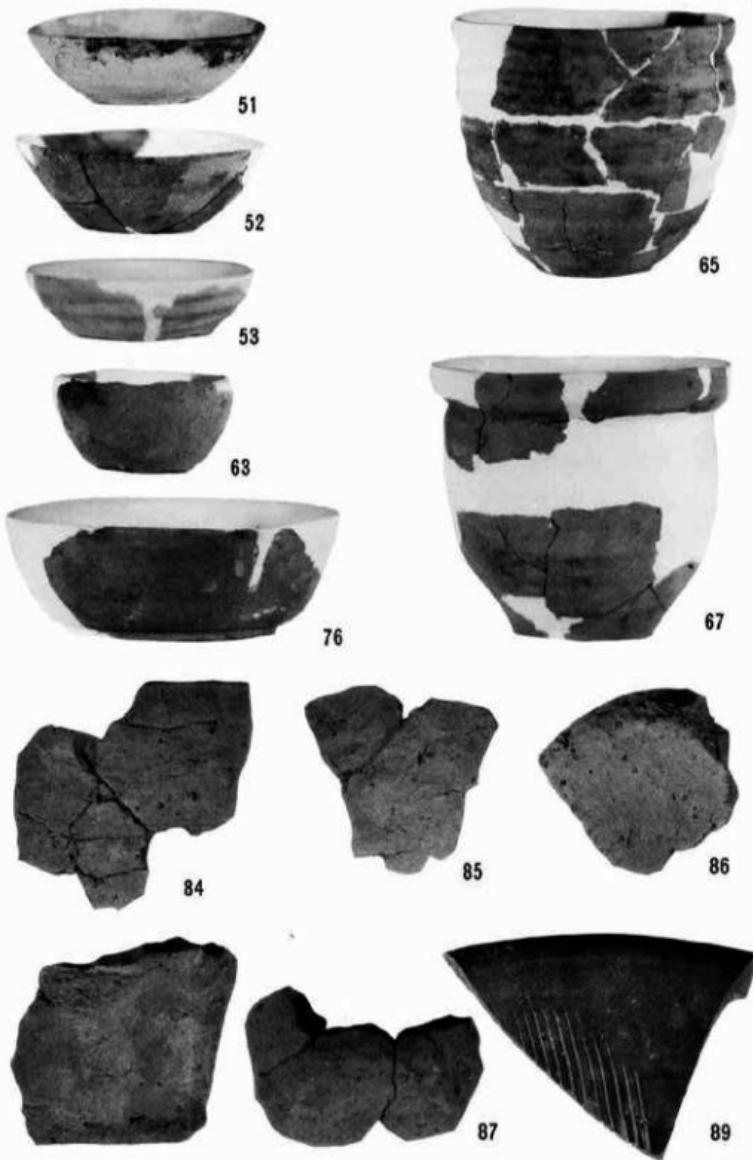
出土遺物（石器4）

S = 1%

図版34



出土遺物（土師器・須恵器）



出土遺物（土師品・須恵器ほか）



遺跡近景（南から）



完掘状況（南東から）

（カナクソ谷遺跡）



遺跡遠景（北から）



完掘状況



炭焼窯1



遠 跡 遠 景 (東から)



遺 構 (北西から)

(東川原遺跡)



遺構（土壤）

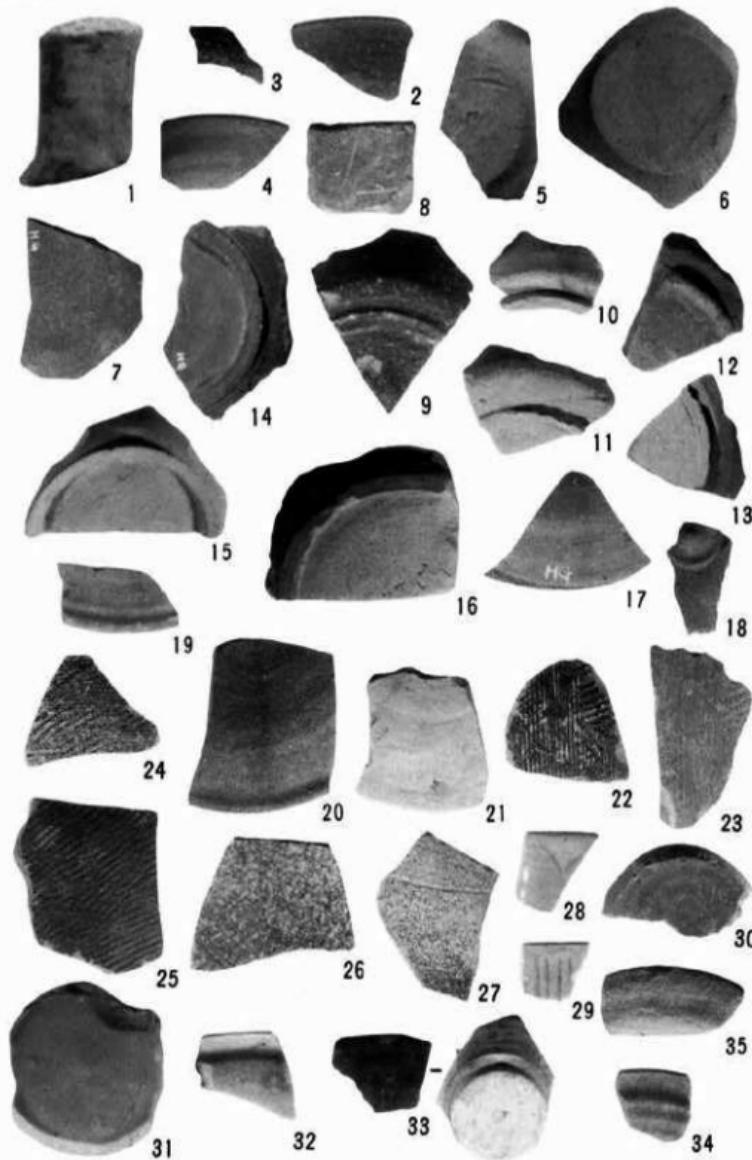


樹列状遺構

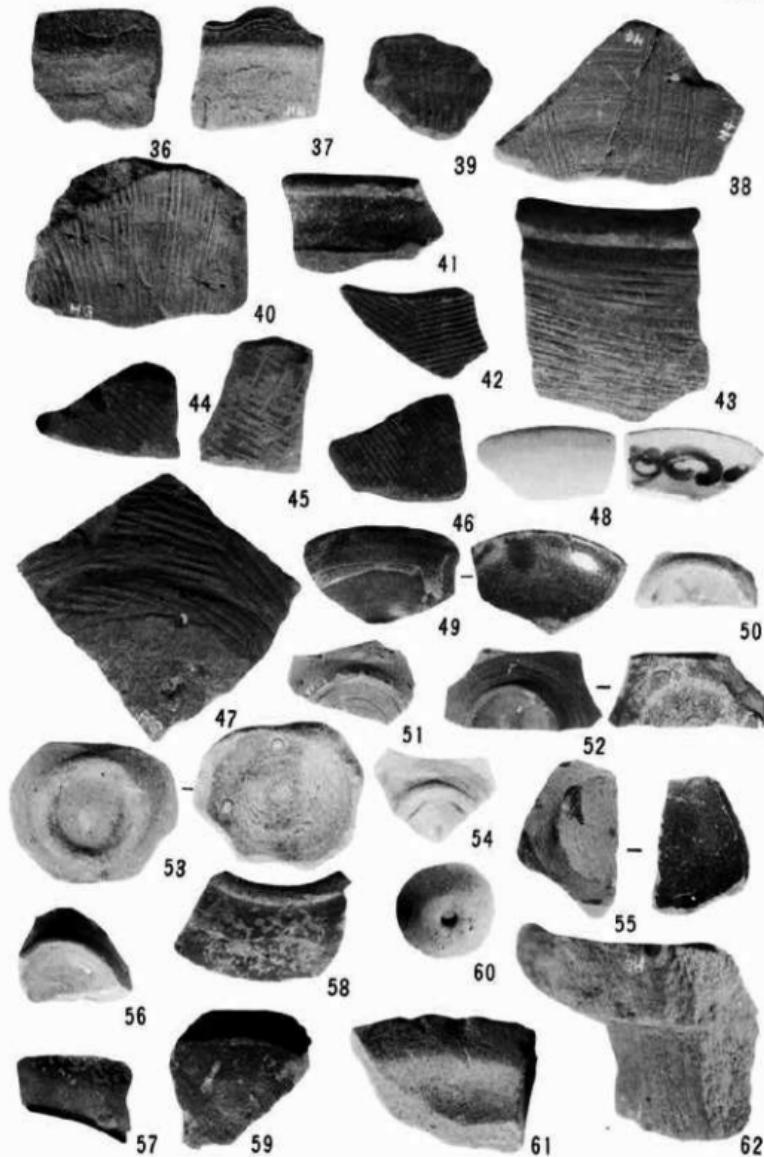


土壤

図版40



出土遺物（土師・須恵器ほか）



出土遺物（中世・近世灰磁器ほか）

図版42



遺跡遠景（南西から）

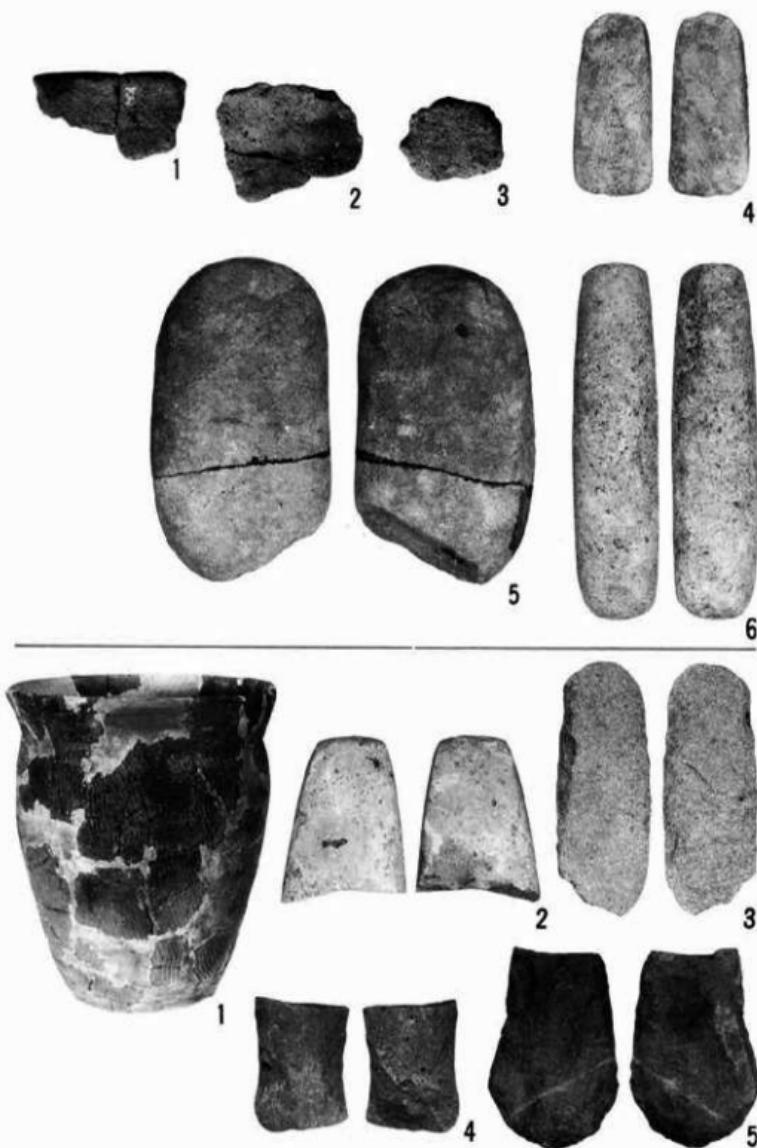


完掘状況（南西から）



遺構

（鬼舞II 遺跡）



出土遺物（上段カナクソ谷遺跡、下段鬼舞II遺跡）

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第47

北陸自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書

宮ノ平遺跡ほか9遺跡

昭和62年3月20日 印刷

昭和62年3月31日 発行

発行 新潟県教育委員会
印刷 長谷川印刷

新潟県埋蔵文化財調査報告書第47正誤表

ページ	行	誤	正	ページ	行	誤	正
1	下から10	あび重なる	たび重なる	43	上から 1	(第34~36図,)	(第34~35・37 図,
3	上から13	本遺跡の	本遺跡群の	44	下から 1	23は1/2	91は1/2
7	下から17	自立経営農家	自立經營農家	45	上から 7	95Q	95q
9	上から11	性格不明の遺構	性格不明の遺構		タ	(図版20・21— 95a~95c・95k ・95a~95h・95k ・95k・95Q)	(図版20・21— 95a~95h・95k ・)
15	上から 5	板根材がまた	抜根材がまだ	48	下から 1	46・47は	110・111は
	下から 1	垂直に堀られ	垂直に掘られ	49	上から14	放斜状	放射状
16	上から 5	碗弾形	砲弾形	51	下から17	南側は	西側は
17	上から 1	木炭片	木炭片		タ 17	南面	西面
	上から 3	水炭	木炭		タ 15	東から	北から
	タ 11	図版 3	図版 5		タ 14	北から	東から
19	下から11	逆天	逆転		タ 13	東から	南から
22	上から16	叩き潰	叩き潰		タ 13	北側中央	東側中央
24	上から 2	第25図	第22図	56	上から10	陵線上	稜線上
27	上から10	短径2.3cm	短径2.3m		タ 11	44・37・39	44をトル
30	上から 2	打面再成剥片	打面再生剥片	59	上から 7	外反氣のもの	外反氣味のもの
	下から 2	(図版11—57c ・57d・57e)	(図版11—57c ・57d・57e) (図版12— 57e)	60	下から 2	縄文時代	縄文時代の遺跡
31	下から 1	4は1/2・16は1/5	48は1/2・60は1/5	61	下から15	堀り込まれた	掘り込まれた
32	上から 1	(図版11—57d ・57e)	(図版11—57d ・ 図版12—57e)	62	上から 1	堀り込まれた	掘り込まれ
	上から 3	また、13の	また、57の		タ 9	近づく	近づく
	上から 6	打面再成剥片	打面再生剥片	65	下から 5	堀方	掘方
	下から 3	剥片作業	剥離作業	66	上から 4	短径40弱	短径40cm弱
33	上から 4	型角礫	形角礫		タ 5	古墳時代中期後 半	古墳時代後期後 半
	上から 7	剥片、破片を	剥片・碎片を	68	上から 9	されたものも (19・	もをトル
34	下から 9	聞込を得た	聞込みを得た	70	上から 6	(第55図35)	(第56図35)
36	上から 3	褐色地	褐色土		タ	陵を持ち	稜を持ち
38	上から 7	2段深	2段掘	72	下から 3	左燃り2段	右燃り2段
	上から12	第32図の16~21	第32図15~20	74	下から 5	旧名立河	旧名立川
	下から13	異なるものの垂直	異なるものの垂 直				